「よし！生意氣な奴だ。」

行きなり松村の拳が振上げられたと思ふと、風を切つて、志田の頭上に飛んだ。素早く首を捻つて身を避けた志田の手は、前に伸びるよと見る間に、松村の腕を掴んだ。と思ふと、巨大な松村の身體は、志田の背の上にあつた。擔がれたまゝ松村は、一二度もが〳〵ともがいたが、氣合と共に志田が一つ腰を捻ると、松村の大きな圖體は空に半圓を描いて、雪の中に放り出された。

「腕力なら僕にだつて、これくらゐな働きは出來るんだ。」

志田は眞直ぐに突立つて、莞爾として笑つた。

「壓制です〳〵。」と叫ぶ彌生の聲が、奥から聞えて來た。

五

「うぬ！」と松村は、雪の中から口惜しさうに齒噛みをした。「柔道の手を出しやがつたな。」

「柔道の手を出したのが、何うしたんだ。」と志田は、同じやうにこ〳〵した顏で言つた。「早く這ひ出さないと、風邪を引くよ。尤も、君のやうな野蠻人は、人間並に風邪を引くなんてこともないか知れないが。」

「何、この野郎！」

松村は雪まみれの身體をがばと跳ね起きると、傷つける獸の如く唸り聲を擧げて、志田を目がけて猛然と躍りかゝつた。

「止した方が好いよ。」志田は身を轉して穩かに言つた。「君が幾ら腕力自慢でも、術にはかなはないからな。」

口惜しいのは松村一人ではなかつた。青木愼一郎は固より、自分たちの仲間が慘めにやつゝけられて、原でも今泉でも、原田でも、心の中では齒噛みをした。不斷の反感をこの一時に晴さうと思つたのが、却つて敵のためにあべこべに酷い目に遭はされたのである。このやうな侮辱、このやうな心外さはまたとなかつた。皆な鉛の熱湯でも飲まされたやうに、眼を白黑さした。が、松村がやられるくらゐでは、迂濶に手出しも口出しも出來なかつた。お互に焰のやうな熱い息を吐いて、殘念さうに眼を見交した。

「君たちが、腕力で僕を威嚇しようと思つても、それは駄目だ。」と志田はぐるりとみんなの顏を見廻して、誇らしげに胸を反らした。「これで高等學校時代には、柔道のチヤンピオンだつたんだからね。君等の三人五人投り出すことくらゐ、雜作もないことなんだ。」

志田にさう云はれても、誰も何とも言ひ得る者がなかつた。お互に見交して居た眼が、だん〳〵伏せ

られて行く。
「志田君。餘りぢやありませんか。」愼一郎は口惜しさのために、全身をぶる〳〵震はしながら言つた。
「來てはならないと、あれほど斷はつてあるにもかゝはらずやつて來て、歸つてくれと言へば、玄關先で狼藉を働く。君も名譽を重んずる學生ぢやないか。亂暴だとは思ひませんか。」
「おつしやるまでもなく、僕の振舞は亂暴です。」と志田は答へた。「けれども僕だけが亂暴でせうか。恥づべきは僕だけで、あなた方の態度は立派なものと言ひ得られるでせうか。何故正々堂々としないのです。何故小細工を弄するのです。何故人の自由を束縛するのです。」
「保護者の權利です。」
「かくの如き小細工が、かくの如き壓制が、何ういふ結果を持來すか、あなた方にはそれが分らないのだ。あなた方は、僕を怖れ、僕の亂暴を咎める前に、先づ自分たちの頑固と、舊弊とを怖れなければならないでせう、自分たちの狹量を恥ぢなければならないでせう。」
「御忠告は有難う。」と愼一郎は皮肉に言つた。「だが、こちらにはこちらの流儀がある。あなたの指圖は受けません。」
「何うしても、彌生さんに遭はせないといふのですね。」

「初めから、決まつて居ることです。」
「では、僕は今日これで歸ります。ですが念のために言つて置きますがね、今日これで歸るといふことは、再び彌生さんを訪ねないといふことではないのですよ。」
「幾度入らしても、恐らく同じ結果です。」
「あなた方には、あなた方の流儀があるやうに、僕には僕の流儀があります。會はせないからといつて、僕は會はずには措きません。會ふやうにして會ひます。」
「と言ふと？」
「それをあなたに、今言ふ必要があるでせうか。では、さようなら。」と、志田は一歩敷居を跨いだが、また振り返つて、「僕は決してあなた方に追ひ返されるのではないのですよ。僕は自分で歸らうと思ふから歸るのです。何うぞ彌生さんに宜しく。」
志田は傲慢さうに、ちよつと肩を聳やかしたが、例のしつかりした足どりで歸つて行つた。
「何んといふ、押しの太い奴だ。」
愼一郎は彼の後姿を暫しの間見送つて、吐き出すやうに言つた。

春の夜

一

冬の寒さが日に〳〵ほどれ、春の暖かさを増して來た。眞白に雪に埋もれて居た野山が、黑々とした地肌を現はすと、木でも、草でも、一時に忙しい生活の營みを始める。まだ雪の下に埋もれて居た時分から、微かな地熱に、靑い芽を吹き初めて居た名もない雜草は、柔かな春風、暖かな日光に、嬉々として芽を伸ばし、可愛らしい花をつける。林の奥や、山の蔭にはまだ雪が消え殘つたが、榛や、朴や、科の木などは、やがてその若葉を伸ばすべく、芽を膨らまし、林檎や、梨や、グスベリは、一時に花をつけ、小鳥は樂しさうに囀り始めた。野には馬が嘶き、そこにもここにも、百姓の働く姿が見えるやうになつて來た。

志田も、彌生も、その後一度も會ふことが出來なかつた。志田は廣岡家を一二度訪問したけれども、

そのたびに玄關から追ひ返されてしまつた。最初は彌生の姿をちらと見、その聲を聞くことが出來たが、後には彼女が家に居るのか居ないのかすら分らなかつた。彼は何うかして一度彌生に會ひたいと思つた。現在のやうな境遇には、彼はもう我慢がならなかつた。如何なる手段を講じても、この煮え切らない狀態に、きつぱりした解決をつけずには居られなかつた。

雪が消えて、草木の生活まで忙しくなつて來るにつれて、志田の心は餘計苛ら〳〵した。何んの未練もなければ、執着もない純子には、會はうと思へば自由に會へて、會ひたいと思ふ彌生には會ふことが出來ないのである。志田は、落着きのない、ぢり〳〵したやうな日を、幾日か送り迎へた。

「もう、かうなつた上は、」と、志田は幾度か我れと我が心に考へるのであつた。「あの頑迷な老人たちの手から、彌生さんを奪ふより外はない。彌生さんが本當に僕を愛してくれて居る以上、それは決して不可能なことではないのだ。」

會はうとして會はれぬもどかしさの餘り、志田はなかば自暴氣味に、さうも考へるのであつた。が、彼にそのやうな手段を容易に執らせない何かがあつた。それは世間體や、我が身の不面目を恐れる心ではなかつた。

「だが、さうすれば僕は、一生あの女の一身を背負込まなければならないことになる。一體それだけの

覺悟が、僕自身について居るのか！」

さう考へる度に、志田は自分の無謀な決心を躊躇せざるを得なかつた。初めて見た時から彼女に心を惹かれ、彼女を愛して居ることは事實である。けれども、彼は彼女と如何なる困難を排しても結婚し、生涯を共にするといふことになると、何故か躊躇せざるを得なかつた。彼の彼女に對する戀心には、どこか眞實を缺いた、誇張や、遊戯的な感情がないとは言へなかつた。

志田は、初めて彌生に愛情を打ち明けた時、殆んど涙を流さんばかりの誠意を以て言つた。しかし、その時の誠意に、自分自身で約束することは、志田に出來なかつた。

志田自身では、人の生涯を弄ばうの、人の感情を玩具にしやうなどといふ惡意は、決して持つて居なかつた。けれども彼は何事に對しても、また何物に對しても熱中することが出來なかつた。たま〳〵熱中したかと思つても、それは直ぐ冷めてしまふ。彼の性質はひどく飽きつぽく、忍耐が乏しく、直ぐ物事に退屈するのであつた。

彌生に對しても、若し彼の望むまゝに彼女と自由に交際することが出來たなら、最初の愛の感激は一月と經たぬ間に冷めてしまつたかも知れない。二人の間が自由でない、周圍から阻まれて居るといふことのために、彼の彼女に對する感激と情熱とは、容易に消え去らないばかりか、却つて益々煽り立てられるのであつた。

終には志田は、彌生を奪取して逃亡しようとまで、非常手段を考へながら、自分の飽きつぽい性質のために、將來の責任を怖れて、さすがにその無謀な企てを躊躇して居るのであつた。

「明日のことを思ひ煩ふことなかれ。燃える時に燃え、冷める時に冷めよだ。飽いたら飽いた時のことぢやないか。」

遂に志田は決心した。彼は起ち上る時が來た。

二

しと〳〵と降りつゞいた春の雨が、夕方になるとやつと止んで、濕つぽい、生暖かな夜であつた。志田は十時過ぎるのを待つて、そつと離屋を脱け出した。母屋の方では、まだ皆な寢んでは居らぬと見えて、明るい燈火の光が洩れ、賑かな人聲が聞えて居た。雪溶けと共に農場の仕事が忙しくなつたので、冬の間暇を取つて、自分々々の家に歸つて居た下女や下男たちの數も、大分多くなつて居た。

月はまだ出なかつたが、朧の空には淡い星影が瞬き、地にはヴェールのやうな薄白い靄がほんのり漂うて、林檎畑の方には、枝々に雲のやうに咲き溢れた林檎の花が、夜目にも仄白く見える。風はなく四

邊はひつそりして、土の臭ひや、堆肥の臭ひや、果樹の花の匂ひが、夜の濕つぽい空氣と共に、志田の顏を打つた。

彼は裏口から間道を拔けようとして、家の者たちに氣取られぬやうに、そつと足音を忍ばして、林檎林の下を潛つた。

「やい、やい、ピン公、そんなに跳くるでねえだ。ほうら、寢藁をやるだで、溫和しくしろよ。」

厩の方で、彌作の聲が聞える。ちら〳〵搖れるカンテラの光が、開け放した入口からさつと洩れ射して、躍んで働いて居る彼の姿が見えた。

裏口から間道に拔けるには、何うしてもその厩の前を通らなければならなかつた。誰にも見られぬやうに脫け出したいと思つて居る志田は、厩で働いて居る彌作の姿を見ると、これは機會が惡いと思つた。彼は、花の眞白に咲いた林檎の木の下に、暫し身を潛ました。

「今夜はうんと御馳走をくれてやらあな。そら、燕麥だぞ。これを食つて、明日は一つうんと働くだぞ。飛び地の畑を耕さなくちやなんねえでな。」

馬を相手に話しかけながら、どそ〳〵動く物音が聞えた。蹄で床板を搔く音や、ふう〳〵いふ鼻息や、燕麥を嚙む齒の音がもり〳〵と聞えた。

やがてカンテラの光が搖れたと思ふと、彌作の姿がのつそりと外に現はれ、入口の扉を閉める音がごとりと聞えた。

「好いあんばいに、明日はお天氣だな。」

彌作は厩の入口に立つて、空を仰いで獨りで呟いた。彼の手に提げたカンテラの光が、また搖れた。と思ふと、彼は志田が身を忍ばして居る林檎の木の方に近づいて來るのであつた。

志田は、都合の惡い方に來ると思つた。が、今となつては避けることが出來なかつた。彼は息を殺して、じつと林檎の木の下に身を忍ばして居るより外なかつた。

「誰だ、そこに居るのは？」

彌作は通りしなに志田の姿を認めた。彼の聲は咎めるやうな調子であつた。

志田は答へなかつた。

「え、誰だ？　そんなところに立つて居るのは？」彌作は一歩近づいて、焰の搖れるカンテラを突き出すと、志田の姿を透かし眺めた。「若旦那樣ぢやねえかね。」

「あゝ、僕だよ。」と、志田は仕方なしに答へた。

「おらあまた誰かと思つて、びつくらしたら、若旦那樣だ。」と、彌作は疎らな齒を出して笑つた。「農場

の若い稼ぎ人共が、また女衆をからかひにやつて來たのかと思つただ。若旦那様、そんなところで何して居るだね。まさか林檎の花見といふわけでもあるまいにな。」

「なに、何んでもないのだよ。」志田はにや〳〵笑つて辯解した。「雨が止んだもんだから、ちよつとその邊をぶらついて來ようかと思つてね。」

「東京からこんな田舍に歸つて來ちや、退屈で仕方ないだな。若旦那様も、ちと母屋の方にござらつしやれば好いだに。若い女共がまたぼつ〳〵稼ぎに歸つて來て、夜は面白い話もあつて賑やかですよ。」

「さうだらうね。」

「この暗がりに散歩して、何んの面白いことがあるもんか。母屋にござらつしやらんかね。」

「またのことにしよう。」

志田は言ひ捨てゝ、さつさと歩き出した。

三

雪が消えてから多少の様子は變つたけれども、志田はまごつくことなしに、廣岡家の邸内に忍び込んだ。門から入ると、誰かに見咎められる懸念があるので、彼は邸の端れの垣根の破れから忍び込んだ。

志田はこれまで、夜になると人に自分の姿を見られる心配がないので、他處ながらでも彌生の姿を見、彼女の聲を聞きたい慾望に驅られて、幾度か廣岡家の邸のまはりをうろ〳〵した。けれども學校が始まつて、青木愼一郎初めその他の連中が、それ〴〵學校に歸つてからは、客間の明るいやうなことは滅多に見られなかつた。が、今日は何うしたのか、部屋々々の窓が明るく燈火に輝いて、殊に客間からは、賑やかな談笑の聲すら洩れ響いて居るのであつた。

「何事があるのだらう。」

志田は合點が行かなかつた。彼は靜かに立止まつて、客間の中の様子を觀察しようとした。けれども彼が立つて居るところとは、大分距離があるので、能くわからなかつた。彼は周圍に氣を配りつゝ、そつと窓下まで忍び寄つた。

集まつて居るのは、松村だの、今泉だのゝ連中らしかつた。部屋の中が明るくて、窓硝子越しに燈火の光りが明るく流れ射して居るので、部屋の内部を覗くわけには行かなかつた。志田は窓下の壁際にぴつたり身を寄せて、たゞ、中の様子を窺ふだけであつた。聲の様子では、純子や、くら子も混つて居るらしかつた。

志田は彼等の愉快さうな談笑の聲を聞き、犬の如く軒端に佇んで居る自分の立場を顧みて、情ないと

共に忌々しかつた。自分がこのやうに惨めな立場に立つて居るにもかゝはらず、皆なが面白さうに話したり笑つたりして居るのが、憎らしくもあれば、残念でもあつた。殊にその中に彌生や純子が加はつて居ることに、彼の心は一層傷つけられた。

「いつそ、部屋の中に躍り込んでやらう。」と、志田は苛ら〳〵しながら考へた。「そして、皆なに向つて言つてやらう。彌生さんも、純子さんも僕のものだ。誰のものでもない僕のものだ。こんな田舎者の相手になつてないで、さあ、僕と一緒に來るんだ。と、さう言つてやらう！」

志田は驚き慌てる皆なを尻眼にかけて、右に彌生、左に純子の手を執つて、悠々と引き揚げる自分の姿を想像して、胸を躍らした。

「彌生さん。今夜こそ一つあなたのピアノを聽かしてもらひたいものですね。」

確かに松村の聲らしいのが言つた。

「いゝえ、わたくし駄目ですわ。近頃ちつとも練習して居ないんですもの。」と、彌生の聲が答へた。

「練習して居なくたつて、何うせ聽き手は僕たちぢやありませんか。かまはんですよ。」と、誰かの聲が言つた。

「でもわたくし、今、ピアノなど彈くやうな氣持になれないのですもの。」

「そんなことをおつしやらんで、一度聽かして下さいな。ね、彌生さん！」

太田純子の聲が言つた。

志田は胸を轟かしつゝ、それらの會話に耳を傾けた。彌生が容易に彼等の望みに應じないこと、そして、彼女の調子にどこか屈托らしいところが感じられることが、僅かに志田を滿足さした。彼は早く皆ながら引き取つて、彌生一人が彼女の部屋に歸つてくれゝば好いと思つた。その時を待つて、彌生をこの家から連れ出さう。そして自分の決心を斷行しようと思つた。

「いよ〳〵やつて下さるんですね。そいつは有難い。」

何んだかよくは聽こえなかつたけれども、皆なでど〳〵押問答して居たが、やがて松村が持前の大聲で怒鳴つた。と思ふと、行きなり窓の硝子戸が、内から押し開けられた。

壁にぴつたり身を寄せて立つて居た志田は、はつと息を呑んだ。彼は思はず身を竦めた。

窓の外にぬつと上半身を突き出したのは、松村であつた。

四

「彌生さんのピアノと來た日には、素敵だといふ噂だけ聞かされて、今まで一度も聽かしてもらへなか

つたのが、今夜こそいよ〳〵聽かれるんだな。皆な、謹んで拜聽しなくつちやいかんよ。」

窓の外に顏を突き出した松村は、直ぐ鼻の下に志田が立つてゐることには氣もつかなかつた。彼はぺつと唾を吐き捨てると、またぴしやりと硝子戸を閉めてしまつた。

志田は燃え立つ憤怒と屈辱の情を以て、その場を離れた。彼は林檎や、梨の木や、グスベリの植ゑられた廣い邸の中を、當度もなく歩き廻つた。歩き廻つて居るうちに、恐らく彌生が彈き始めたピアノであらう。誰の何んといふ曲か志田には分らなかつたが、それはひどく人の心を悲しみに誘ふやうな小曲であつた。別に手の込んだ曲譜でもないので、彌生は鮮かなタツチで、樂に彈いて居た。

春の朧夜の星の下、咲き滿ちた林檎林の中を彷徨ひつゝ、彌生の手によつて奏で出される美妙の器樂の響きを聽いて居るうちに、志田の足はまた知らず〳〵の間に、明るい光りの漏るゝ客間の窓下へと若き寄せられて行つた。そして彼は涙含ましい、胸迫るやうな切ない思ひで、彼女の奏でる音樂に耳を傾けて居た。

「今度は、純子さん。あなたお彈きなさいな。」

一曲彈き終ると、彌生が言つた。

「あら、あたし、駄目なのよ。とてもあなたの後になぞ彈けやしないわ。」

「純子さんは、ピアノよりヴアヰオリンです。」と、誰かゞ言つた。

「あら、あら、そんなことをおつしやつて！　わたし、何も出來ませんわ。ほんとうに不器用なんですもの。」

志田は、彼等の樂しげな聲を聞いて、またその場を離れた。けれども彼は、そのまゝ歸らうとはしなかつた。今夜こそは、何うあつても彌生に會はう。會つて自分の決心を實行しようといふ望みに、彼の心は燃え立つて居た。たとへ何時までゝも、彼等が歸つて行くまで待たう。彌生一人になるのを待たう。

さう決心して、志田は再び邸の中を歩き廻つた。

客間の灯は容易に消えなかつた。話聲や笑ひ聲はなか〳〵盡きさうにもなかつた。考へて見ると、今日は丁度土曜日なので、彼等はみな學校から自宅に歸つて來て、廣岡の家に集まつたのである。志田はそんなことは考へて見もせず、うつかり出かけて來たのがわるかつたと思つた。

一時間近くも、暗い廣い邸内を當てもなく歩き廻つて、彼が三度び客間の窓下に歸つて來た時、そこの賑ひはまだ止みさうもなかつた。が、彼は何故か、そこに彌生が居ないのだといふ氣がした。彼は胸轟かしつゝ、急いで彌生の部屋に廻つて見た。部屋の中は薄暗かつたが、窓のカーテンは引いてなかつた。

志田はこの前と同じ窓から、また部屋の中を覗いて見た。あの夜から今夜まで、恰も少しの時も經つて居ないかのやうに、何んの變つたところも見えなかつた。机の上には心を細目に引つ込められた臺ランプが點り、そしてそこには彌生がたゞ一人、彼の方に背を向けて、机の上にぐつたりと突伏して居るのである。草臥れて眠つて居るのかと思ふと、さうでもないらしい。泣き伏して居るのかと思ふと、さうでもないらしい。

「彌生さん、彌生さん。」

志田は、丁度この前と同じやうな工合に、彼女の名を呼んだ。彼の拳はこつ〳〵と硝子戸を叩いた。

彌生は恰もそれを待構へてでも居たかのやうに、つと身を起すと、志田の立つた窓を振り返つた。

「彌生さん。僕です。」

志田は小聲で呼んで、また忍びやかにこつ〳〵と硝子戸に合圖をした。

彌生は明かに聽きわけた。不意に彼女の顏には、不安と、恐怖と、喜悅とをごつちやにしたやうな表情がさつと走つたが、直ぐ起き上がると、何んと思つてか、ふつとランプを吹き消した。彼女は志田の立つて居る窓際に近寄つて來た。

丁度晩い月が出かゝつて、東の空がミルク色になると、仄な月明りがぼつと空にも地にも流れた。

五

「まあ、志田さん。」と、彌生の顏へる聲が呼びかけた。「まあ、あなたは何うして入らしたの？　いゝえ、さうぢやないわ。何故今まで入らしちや下さらなかつたの。わたし、どんなにお目にかゝりたかつたでせう。お話したいことがほんとに澤山あるのよ。けどもね、わたしあなたをお訪ねすることが出來なかつたのよ。わたし、あなたが入らして下さるのを、毎日々々どんなにお待ちして居たでせう。わたしね、今もやつぱりあなたのことを思つて居たの。一時間も、一分間も、あなたのことを思はないつていふ時はなかつたの。それだのにあなたは、ちつとも入らしちや下さらなかつたのね。あゝ、けれどもたうとう入らして下すつたのだわ。ほんとうに入らして下すつたのだわ。」

彌生は窓の上げ下げ戸を手早く開くと、出來るだけ上半身を窓框の外に突出し、少し身體を踞まして、地上に立つた志田の顏の傍近く、自分の顏を近々と差寄せた。彼女は見ようと思つても長く見ることが出來ないで居た、懷しくてたまらないものを、この瞬間に見盡くさうとするかのやうに、しげしげと見入りながら、低い、囁くやうな、きれ〳〵な聲で、さも〳〵感に堪へないものゝやうに、性急に言つた。それは恰も言ひたいこと、語りたいことが胸一ぱい溢れて居るのを、一時も早く喋つて了はうとして居

るかのやうに見えた。若しそれを今の一瞬間に言つて了はないと、相手が直ぐ自分の前から去つて了つて、最早や話す機會も、語る機會も、永遠に來ないことを恐るゝかのやうであつた。

「僕は幾度か、當てもなしにお宅の周圍をうろ〳〵して廻つたのです。せめてよそながらでもあなたを見たいと思つて、あなたの聲を聞きたいと思つて。けれども僕はお訪ねすることが出來なかつたのです。お訪ねしたつて、あなたにお目にかゝることは出來ないのですからね。」

志田は地平線を離れた月の光を浴びて、白く、蒼く見える彌生の美しい顏を見上げながら、やつぱり低い聲で言つた。

「えゝ、えゝ！　わかつて居ますわ。何もおつしやらなくつたつて、何もかもすつかりわかつて居ますわ。」と、彌生は、潤んだ、情に滿ちた眼で、ぢつと志田の顏を見入りながら、同じやうに早口に繰返した。「それでも、今夜は能く入らして下すつたのね。お目にかゝることが出來て、お話しすることが出來て、わたし、どんなに嬉しいでせう。」

彼女の長い睫毛が瞬くのが、次第に明るくなつて來る月の光りに、はつきり見えた。彼女は肩を搖すつて、ちひさな溜息を吐いた。志田を見て居る彼女の眼は、次第に夢見るやうにうつとりとなつて行つた。

「僕は辛い思ひをして、やつとやつて來たのです、僕、客間の賑かな話も聽きましたよ。そしてあなたのピアノも聽きましたよ。」

「まあ！」

彌生は急にびつくりしたやうに、その輝く眼を大きく〳〵見張つたが、直ぐ雙の手でひたと顏を掩ふた。

「何うしたんです。」

「何んでもありませんわ。」彌生は子供のやうに頭を振つて、兩手で顏を掩ふたまゝ言つた。「わたし恥かしいのですわ。あんなまづいピアノを、あなたがお聽きになつたかと思ふと、わたし恥かしいのですわ。」

「何うしてでせう。大變上手ぢやありませんか。僕、全く感服しました。」

「ほんとう？」

彌生は兩手をぱつと顏から離した。彼女の眼は涙に濡れたが、彼女の顏は誇らしげに微笑んで居た。

「僕に何うして、あなたに嘘を言ふことが出來ませう。」

「ほんとうなら、わたし嬉しい！」と彌生は晴れ〳〵と微笑んだ。

「彌生さん。僕あなたに話があるんです。僕のことを忘れなかつたといふあなたの言葉がほんとうなら、

僕もあなたと同じやうに、一時間も、一分間も、あなたのことを思はない時とてなかつたのです。そんなにあなたのことを思つて居ながら、二人は會ふことが出來ないでせう。だから僕決心したのです。」

「え、決心？」と彌生は眼を見張つた。

「さうです。彌生さん、二人は……」

「あら、そんな高い聲をなすつちや可けませんわ。誰かこつちに來るやうぢやない？」

彌生は、志田の聲が思はず高まつた時、彼の言葉を突然遮つた。彼女の何かにひどく怯えたやうな眼つきが、敏捷く志田の顏を見ると、聞き耳を立てた。彼女の顏は、丁度敵の氣配を感じた時の牝鹿のやうな印象を與へた。

六

二人はひどく過敏になつた耳を澄まして、ちよつとの間ぢつと四邊の樣子を窺つた。が、誰も近づいて來るやうな氣配はなかつた。客間の方では誰かゞピアノを叩いて居ると見えて、混亂した、まづい音が、やかましく響いて居た。同じやうに賑やかな話聲や笑ひ聲が溢れて居た。

「誰も來る者なぞないやうですよ。」

暫しの沈默の後、志田は低い聲で囁いた。

「さうね。わたしの氣のせゐだつたのか知ら。」と、彌生はやつとほつとしたやうに溜息を吐いたが、直ぐまた不安さうにおど〳〵して、「けどもこゝに居ちや、何時、誰が來ないとも限らないわ。誰かゞ來ると面倒だわ。」

「彌生さん。僕、あなたに話があるんです。あつちに行きませう。」

「どこへ行くの。」

「どこか、人の居ない方へ。」

「えゝ、えゝ。」と彌生は頷いた。「あなたの行らつしやるところなら、どこへでも！　あなたと御一緒なら、わたしどんなところへだつて參りますわ。ぢや、わたしあちらから廻つて來ますから、あなたこゝに待つて居て下さる？」

「人に見咎められると可けないですよ。」

「だつて、こゝからは出られやしないわ。」

「大丈夫です。さあ、僕が抱いて降ろして上げませう。」

さう言つて志田は、彌生に向つて兩手をひろげた。

「窓から降りるの。」
「大丈夫です。」
「だつて……」
「愚圖々々して居て、若し誰かゞ來たら何うするんです。」
「履物もないし、窓から降りるのは、わたし怖いのですもの」
「大丈夫です、僕の腕におつかまりなさい。」志田は躊躇する彌生を勵ました。「履物はその邊に、スリッパか、上草履か、ないですか。」
「えゝ、上草履がありますわ。」
「ぢや、それを持つて入らつしやい。早く誰にも氣のつかないうちに。」
志田も無言であつた。彌生も口を利かなかつた。
彌生は今、自分は怖ろしい罪を犯しつゝある、人にも神にも赦されない女のやうな氣がした。自分ほど世にも不幸な、慘めな者はないやうな氣がして、悲しかつた。さうかと思ふと、自分は今歡喜と幸福の絶頂に在るので、この瞬間のためには、たとへ自分の生命を捨てゝ、一生を葬つても惜しくはないとさへ思つた。彼女の心は混亂して、どれが本當の自分の心持だか、自分は本當に不幸なのか慘めなのか

それとも幸福なのか、自分自身で、何が何んだかさつぱりわからなかつた。
彌生にはたゞ一つのことだけが、明瞭であつた。それは自分の身など何うなつても好いといふことであつた。自分には今何事も分らない。分別する力も、判斷する能力もない。けれどもたゞ志田と一緒にさへ居られるなれば、それで好いといふことであつた。志田の行くところに自分も一緒に行きさへすれば、それで好いといふことであつた。その結果が不幸であうと幸福であらうと、そんなことは何うでもかまはないと思つた。
志田の言葉通りに、彌生は廊下に脱ぎ揃へて置いた、源平の緒のすげられた新しい上草履を一足持つて來た。持つて來は來たものゝ、彼女はさすがに窓際で躊躇して居るのを、志田は無理に彼女の身體を自分の腕に抱へると、高い窓から輕々と地上に抱き降ろした。
「ともかく早く、邸から出ませう。」
志田は、何うして好いか途方に暮れたやうな彌生の手を取り、彼女を引立てゝ、花をつけた林檎や梨の木の下を潜り、邸の外まで連れ出した。
二人は無言のまま、月夜の野道を當てどもなく歩いた。路傍には名も知れぬ雜草が、柔かな新芽を萠え出し、ところ〴〵に立つた榛や朴の木も、溫かな春の雨に若芽を吹いて居た。夜露のしつとり降りた

それ等の木々や、雑草の若芽の匂ひや、濕つた土の匂ひは四邊に滿ち、二人の鼻を打つた。

二人は何時か、小さな流れの傍に出て來た。

七

川傍には芽の伸びた川柳が繁茂して居た。ちやぼ〳〵とひそやかに囁くやうな水の音が、流れに沿うてそこでもこゝでもしきりなしに聞こえ、小波を立てゝ居る川面には、大分高くなつて來た月の光が碎けて、きら〳〵と銀の鱗のやうに輝き動いた。偶と、名も知れぬ夜の小鳥が、どこかで一聲鳴いたと思ふと、直ぐ止めた。と思ふと、それに應ずるかのやうに、別の方角でまた一聲鳴いた。鳴いては止め、止めては鳴き、二ところで交る〴〵に鳴き始めた。

何時の間にか靄はすつかり霽れて、月の光は空をも地をも隈なく照らした。見渡す限り廣々とした野面に、森や林が白い月光の下に黑々と見えた。

「どこまで行つても同じことですね。」と志田は不意に立ち止まつた。「この邊で休まうぢやありませんか。彌生さん、あなたくたびれたでせう。」

「いゝえ。そんなでもありませんわ。」と彼女は氣重さうに頭を掉つた。

「こゝに腰掛けませう。」

二人は肩を並べて、そこに横はつた大木に腰を下ろした。後には熊笹が繁り、傍へには川柳が生えて、誰に氣づかれさうな心配もない位置であつた。

彌生は、先刻志田を見出した時とは打つて變つて、ひどく物思はしげな、沈んだ樣子に見えた。彼女は志田の話しかける言葉に對して、餘りはき〳〵した返事を與へないばかりか、何うかするとつじつまの合はない返事をして、急に自分で慌てたりした。

「何うしたんです。」と、志田は心配さうに訊いた。

「何うもしませんわ。何故ですの。」

「でも、何んだかひどく心配してるやうぢやありませんか。」

「いゝえ、わたしに何んの心配があるでせう。あなたと二人でかうして居るだけで、わたしは幸福ですの。わたしには今、心配も恐ろしいことも、何んにもありはしませんわ。」

「彌生さん、あなたは僕を信じて居てくれますか。」

志田はそつと彌生の手を取つた。彼は自分の兩の掌の中に、彼女の柔かな手を握り緊めつゝ、彼女の耳許に囁いた。

「えゝ、えゝ。」と、彌生は輝いた眼で彼の顔を見入りつゝ、力強く頷いた。「わたくし、信じてる以上ですわ。」

「信じてる以上といふと？」

「愛してることなの。」

言下に答へた彌生は、急にぱつと赧くなつた顔を反けると、何故かそれまで志田の掌の中に押へられたまゝに任して居た自分の手を、そつと引込めやうとした。が、志田は放さなかつた。放さないばかりでなく、彼は益々強く彼女の手を握りしめながら、同じやうに優しい聲で囁いた。

「ほんとうに、愛するといふことは、信ずること以上ですね。あなたが僕を愛して下さるといふことは、僕に取つて實に……」

志田は何か言はうとしたが、何も言へなかつた。潮の如く壓倒して來る感激のために、彼の胸は一ぱいであつた。彼は言葉にすることの出來ない自分の眞情を脣に籠めて、自分の掌の中に押へて居る彼女の柔かな手の上に、しつかと押しつけた。

我れを忘れた一瞬間が、二人の間に飛び過ぎた。

「ね、あなた先刻おつしやつたでせう。」

暫らくしてから彌生は、突然我れに歸つたやうに言つた。

「え？」

志田は恍惚とした眼光を上げて、彼女の顔を覗いた。

「あなた、先刻おつしやつたでせう。」と、彌生は繰返した。

「僕、どんなことを言つたでせう。」

「あなたは先刻、決心したとおつしやつたわね。」

「そのことですか。」志田は初めて合點が行つたやうに頷いた。「僕、その通りに言ひましたよ。」

「聞かして下さいな。あなた、どんな決心をなすつたの。」

「彌生さん。東京に行きませう。え、こんなところに愚圖々々して居ないで、東京に歸りませう。あなたはこんなところで暮すべき人ぢやない。あなたの一生をこんな田舍に埋れさして了ふのは、それがあなたに取つて殘酷なばかりぢやなく、全く罪の深いことだ。東京へ歸りませう。え、二人一緒に東京へ歸りませう。」

「東京へ！」

彌生は眼を輝かして、深く〳〵息を呑んだ。

八

「こんな田舍に、人間の幸福や樂しみが何があるでせう。天と地ばかりです。山と野ばかりです。草と木ばかりです。鳥と獸ばかりです。その外には何んにもないのです。こゝには人間の生活を見ることは出來ません！」志田は何かにひどく激して言つた。「ね、東京に一緒に歸りませう。東京にはあらゆるものがあるのです。人間の生活、文明、美術もあれば、音樂もある。幸福も、歡樂も、喜悅も、光明も、我我の欲しいと思ふものは、何んでもあるのです。彌生さん、あなたは何時か僕に向つて、音樂を勉强したいと言つて居らしたぢやありませんか。こんな草深い田舍に居て、こんな野蠻人や勞働者ばかり幅を利かして居る殖民地に居て、何うして音樂などの勉强をする望みがあるものですか。東京に歸りさへすれば、一切が自由で、一切が華やかです。どんな望みでも、あなたの望みで果されないことはない。どんなものでも、あなたの取らうと思ふもので得られないものはない。こゝには何んにもない。そして東京には何んでもあるのです。え、彌生さん。東京に歸りませう。僕と一緒に歸りませう。」

「東京へ！」彌生は息を喘まして、もう一度繰返すと、輝かしい空想的の眼を上げて、夢見るやうにうつとりと空を眺めた。が、彼女は直ぐ力なく溜息を吐いた。「東京へね。」

彌生は弱々しく、口の中で呟くやうに言つて、眼を伏せた。

「何うしたんです。東京へ行くのは厭なんですか。」

志田は、彌生の悲しげな横顏を覗いて言つた。

「いゝえ、さうぢやありませんわ。」

「僕の決心といふのは、そのことなんですよ。あなたと一緒に、二人で東京に歸るといふことなんです。あなたはそれが厭なのですか。」

「いゝえ。」と彌生は俛だれて居た顏を擡げて、はつきり言つた。「わたし、あなたの行らつしやるところに一緒に行くことが、何うして厭なものですか。東京に行くといふことは、わたしに取つて何よりのことなんですわ。」

「では、僕の決心を、一緒に實行して下さるんですね。あなたは僕と一緒に、東京に來てくれるんですね。」

志田は急に眼顏を輝かし、息を彈ませると、思はずまた彌生の手を取らうとした。が、何故か今度は彼女はその手をそつと引込めて、おづ〳〵した懇願するやうな眼で、彼の顏をちらと仰いだ。

「でもね……」

彌生は後が言へなかつた。
「でも、何うしたんです。」
「わたしには祖父も祖母もあるんですもの。」
「あなたに取つて、自分自身が眞實に生きることよりも、あなたのおぢいさんやおばあさんの方が大事なんでせうか。」
「いゝえ！　さうぢやありません。」
「さうでなかつたら、何うして僕と一緒に東京へ行かないんです。」
「自分の生きることも大事ですわ。けれどもわたしには、祖父や祖母のわたしに對する、あの愛情を裏切ることが怖ろしいのです。」
「若しおぢいさんやおばあさんに、あなたに對する本當の愛情があるなら、もつとあなたの自由を尊重してくれなければならない筈だと思ひます。あなたの一生を、こんな殺風景な殖民地の、草深い田舎に葬り、あなたの自由を束縛するのは、それは決して愛情ではない。若しそれを愛情としても、間違つた愛情です。あなたは祖父母の愛情を裏切るのではなくて、ただ自分の本當に生きる道を歩くだけのことです。」

「でもね……わたしがさうなつた後の、祖父や祖母の悲歎を考へますと、自分の思つた通りのことも出來ないやうな氣がしますの。」と彌生は悲しげに溜息をついた。
「あなたは、もつと勇氣を持たなくちや可けない！」
志田は鋭く叫んだ。彼はつと立ち上ると、腕をしつかと胸の上に組んで、力を籠めた足どりで、彌生の腰掛けた前を、右に左に歩き始めた。
「許して下さい。」
彌生のおど〳〵した眼が、志田の動くにつれて右に左に彼の姿を追うて居たが、彼女は悲しげに叫んで、兩の手でひたと顏を掩ふた。
その瞬間、突然彼等の前に、ばら〳〵と四五人の若者が躍り出た。
月は高くなつたが何時か朧に霞すんで、仄な光が總べてのものを包んだ。

九

突然、志田と彌生の前に現はれたのは、白面の青木愼一郎であつた。腕力自慢の松村であつた。皮肉家の今泉であつた。勿論、原や、原田もつゞいて居た。

志田は愕然とした。けれども彼は直ぐ冷靜を取り返した。彼がびつくりしたのは、彼等を恐れたゝめではなかつた。誰も來る筈はないと決めて居たところに、突然ばら〳〵と大勢立現はれたので、不意を打たれたのである。

彌生は、さすがに女のことである。夜目のことで、誰にも氣づかれなかつたけれども、はつとして顏色を變へた。何うなることかと思つた。氣早な若者たちのことである。志田一人に相手は大勢で、どんな間違ひが起らないとも限らない。彼女は何うしたら好いかと思つた。が、突嗟にはなすべきところも知らなかつた。彼女は、自分と志田と、二人を取り卷いて突立つた連中の顏を、恐怖に充ちた眼を大きく見張つて、ぐるりと見廻した。

「志田君、飛んだお邪魔をしましたね。」愼一郎は憤怒のために戰く聲を、無理に落着けた不自然な調子で、皮肉に言つた。「僕は信じて居たのです。あなたでも彌生さんでも、敎養のある立派な人たちだ。まさかこんな人目を偷んだ卑しい媒曳などしようとは思はなかつたです。殊にあなたは、不斷何よりも男らしい態度を尊ぶ人ぢやありませんか。會ふなら會ふで男らしく、何故正々堂々と會はないのです。何故下女や下男のやうな、破廉恥な眞似をするんです。こんなことぢや、あなた方の品性に對して、今後少しの信賴を置くことも出來ないぢやありませんか。」

「あなたの言葉は、たゞ僕を傷つけるための毒舌に過ぎない。僕の態度が男らしくあるかないか、僕たちのして居ることが下女下男と同じ眞似であるか何うか、それはあなたの見る通りで宜しい。僕にはそれをちつとも辯解する必要はないのです。で、あなたは何んのために我れ〳〵の跡をつけたのです。あなた方が大勢で、かうしてやつて來たのは、一體何んのためなんです。先づその用件を聞かうぢやありませんか。」

志田は相手を見下すやうな態度で、傲然と胸を反らした。彼の言葉、彼の態度は、一層皆なの反感を煽つた。彼等の怒りは爆發した。

「君は、我れ〳〵がやつて來た結論を知りたいと言ふのか。」

何か言はうとする靑木を押しのけて、松村は一歩志田の面前に突き進んだ。

「お互に、つべこべ喋べり合ふことは無益ですよ。」と、志田が言つた。

「全くその通りだ。我れ〳〵の結論は、要するにかうなんだ。」

言ふなり松村は、志田の胸を目がけて、熊の如く躍りかゝつた。彼は雙の腕に滿身の力を籠めて、相手の身體にむづと組みつくと、一振り二振り振つた。

不意を打たれて志田は、身を構へることが出來なかつた。彼の身體は、搖れる船の上の檣の如く、右

と揺れ左に揺れた。
「何を亂暴するんだ。」
憤激して志田が叫んだ時には、彼の脚は誰かのために掬はれた。打ち振る松村の力と、脚を掬はれたのと相俟つて、機みを喰らつた志田の身體は、地響きをしてゝ大地の上に打つ倒れた。
彼等はわつと一度に歡乎の聲を上げた。
「鐵拳制裁！」と、誰かが叫んだ。
「賛成！」と、悦ばしげな聲が應じた。
「恥を恥としない者の上には、たゞ腕力あるのみだ。」
また別の聲が叫んだ。
「やつてしまへ！」
青木愼一郎の聲と共に、素早く羽織を脱いだ者がある。地上に打倒されて、松村の力を籠めた鐵の如き雙腕に、しつかと押へつけられた志田の身體に、頭からすつぽり羽織が打被せられた。
「撲れ！」
「半殺しにしてしまへ。」

獰猛な、狂喜するやうな叫びと共に、鐵拳の亂打は雨の如く志田の身體に下つた。足を擧げて蹴る者もあつた。
志田は最早觀念したのか、死せるものゝ如く動かなかつた。聲も立てなかつた。我が身に下る亂打を默つて忍んだ。
「あなた方は、何をなさるの！」
彌生は行きなり立上つて、今や幾度目かの拳を、志田の身體に向つて振下す愼一郎の腕に縋つた。

十

「彌生さん。あなたは志田君を打つ僕の手を止めるんですか？」
愼一郎は憤怒と興奮のために蒼ざめて、ぶる〳〵戰く歪んだ顏を、彌生の上に捻ぢ向けて詰つた。
「あなた方は卑怯です。」
彌生は死にもの狂ひに、愼一郎の腕に縋つて叫んだ。
「何が卑怯です。」
「一人の人に大勢で亂暴して、卑怯ぢやありませんか。」

「思ひ知らしてやるのだ。僕の手を放して下さい。」
「いゝえ、放しません。志田さんを打つちや可けません。」
「何を！」
不斷猫の如く靜かで、女のやうに優しい愼一郎の顏は、怒れる豹の如く物悽かつた。彼は彌生に掴まれた手を力任せに振りもぎつた。機みを喰つて彌生の身體はよろ〳〵とよろめいたが、何かに足を絡まして、ばつたり地面に倒れた。
打たれても、蹴られても、志田は同じやうに身動ぎ一つしなかつた。微かな呻き聲一つ上げなかつた。彼は齒を喰ひしばつて、自分の上に加へられる暴力の苦痛を忍んだ。侮辱の痛みを忍んだ。抵抗して遁れることも出來なければ、勝つことも出來ないと分つた以上、自分の面目を男らしく保つ唯一の道は、抵抗しないことより外はなかつた。相手のなすがまゝに任して、ぢつと忍ぶより外なかつた。跪けば跪くほど見苦しくなるばかりである。打てるだけ打て、蹴れるだけ蹴れ。如何なる暴力も、如何なる侮辱も默つて忍ばう。
志田はさう決心したのである。彼は辛抱强き牡牛の如く、亂打と侮辱の下に身を置いて、齒を喰ひしめて我慢した。

打つても蹴つても、一語の苦痛の呻きも洩らさず、微動だもせず横たはつて居る相手を、猶ほ打ちつづけることは、張り合ひがなかつた。反感と、憎惡と、復讐とのために、狂暴に打ちつゞけて居た皆なの手は、無抵抗な志田を打つことがだん〳〵不安になつて來た。彼は恰も死んだものゝ如くである。彼等は何んだか不安を感じて來ると同時に、彼等の拳に籠められた力は自然と緩んだ。雨の如く志田の身體に下る亂打の數は、次第に少くなつて來た。
「好し。引揚げろ。」
誰かが呶鳴つた。合圖するやうに鋭い口笛が吹き鳴らされた。志田の身體を包んだ羽織がさつと取られたと思ふと、皆なはばら〳〵とその場を立去つた。次第に遠ざかつて行く彼等の中の誰かが吟ずる、悲壯な詩吟の聲が、朧の月光の下を漂ふて、それも次第に遠ざかつて行く。流れの水音は、急にひつそりした四邊に際立ち、何時の間にか聲をひそめて居た夜の小鳥のつゝましい聲が、また鳴き交し始めた。
暫らく經つてから、志田はやつと身を起した。骨や肉がめり〳〵痛んだ。彼は危く倒れようとしたが顏を蹙めて、やうやく自分を保つことが出來た。彼の耳は、ひつそりした四邊に、以前と同じ流れの音を聞き、小鳥の鳴き交す聲を聞き、彼の眼は以前と同じ月の光や、空や、大地や、川柳や、熊笹や、森や、林を見た。そして、自分と二三歩離れた眼の前の地面に、彌生の突伏して居る姿を見た。

「彌生さん、彌生さん。」
志田は我が身の苦痛を忍んで、彌生の傍に近寄り、彼女の手を取つて抱き起した。彼女は、愼一郎が手を振り放した拍子に倒れてから、そのまゝ地面に突伏して泣いて居たのであつた。
「志田さん。」
彌生は何んにも言ふことが出來なかつた。彼女は涙に濡れた眼でぢつと志田の顏を眺めたが、直ぐたまらなくなつたやうに彼の胸に顏を埋めた。
「彌生さん。」と、志田も涙ぐんで言つた。
「東京へ行きませう。一緒に東京へ行きませう。」と彌生は細そりした肩を顫はしながら言つた。
「え、一緒に東京へ！」
志田は叫んで、彌生の手をひしと掴んだ。
恥と苦痛とに贖はれた二人の愛の手は、しつかと握り交され、約束は誓はれた。

東京へ

一

「こんな怪らい暴風雨だに、これでも若旦那樣は東京へお歸りになるだかね。」
彌作は、志田の部屋にやつて來て、また同じことを訊いた。
「幾度訊いても同じことだよ。僕は何うしても今日立つんだ。」
志田は氣むづかしい顏をして、のしり〳〵と部屋の中を取りとめもなく歩いて居た。彼は彌作の問ひに對してぶつきらぼうに、しかしきつぱりと答へた。
「でも、あんまりひどい暴れになつて來ただから、どうだかと思つてね。」彌作は言ひ譯するやうに、疎らな齒を見せて笑つた。「別に大した用事のある身體でもないだから、明日にしたら好いだらうにね。こんな暴れが、さう二日も三日も永つゞきするものではねえだから、明日になれば止むだらうと思ふね。

明日にしちや何うだな。」

「いや、何うしても今日立つんだよ。」志田は剛情に繰返して、チョツキのポケツトから懐中時計を出して見た。「まだ四時前だ。七時の汽車までには、三時間の上ある。ステエションまで馬車はどれくらゐかかれば行くかね？　大抵一時間ありや大丈夫だらうね。」

「そんなにかゝらないね。こんな暴れだが、それでも四十分もあれば大丈夫だね、天氣が好いと、ピン公を一打ち走らせれば、三十分の道だからね。」

「四十分か。だが少し早目にステエションに行きたいから、五時半には出かけるやうに、馬車の支度をして置いてくれ。」

「何うしても今日立つだね。」

「何うしても、今日立たなくちやならんのだ。」

「それぢや、五時半までに支度をして置くだ。」

彌作は幾ら引き留めて見ても、志田が思ひ返さぬので、今はもう諦めたやうに、禿げた白髪頭を一つ掉つて、部屋を出て行つた。

志田は一人になると、また所在なさゝうに、部屋の中を當てともなく、のそ〳〵と歩き始めた。片づける物は片づけ、始末する物は始末し、彼はもう何をすることもなかつた。たゞ時が經つのを待つばかりであつた。停車場に向つて出かける時の來るのを待つばかりであつた。

志田が北海道に歸つて來たと思ふと、殆んど滯在する間もなく、また突然東京に歸ると言ひ出したことは、彌作をびつくりさせたばかりでなく、彼の叔母をも驚かした。もつとゆつくり滯在する豫定で歸つて來たものが、何うしてこんな急に東京に歸ると言ひ出したのか、彼の突飛な行動の原因は誰にも分らなかつた。何故そんなに急いで東京に歸らなければならないのか、わけを訊いても、彼ははつきりした返事を與へなかつた。たゞもうこんな田舍には飽き〳〵したと言ふだけである。一日も辛抱出來ないと言ふだけである。

一度言ひ出したことは、誰が何と言つても、決して後へ退くことをしない、剛情で我儘な志田の性質を叔母は能く心得て居た。理由もない氣紛れで、來たいと思へば來、歸りたいと思へば歸るのである。それは彼の心のまゝに任せるよりしかたのないことである。誰が何んと言つたつて、思ひ止まる兒ではないのだから。彼の叔母はさう思つて、悲しさうに溜息を吐いて諦めた。それでは志田の好きなやうにするが好いと言つた。

丁度志田が立つといふ日は、朝からひどい暴風雨であつた。烈しい風はごう〳〵音を立てゝ、野を吹

き、山を吹き、林にぶつかり、森にぶつかり、建物にぶつかつた。空は眞黑な雲に鎖されて、雨は瀧の如く落ちた。

彌作ばかりでなく、叔母も、東京に歸るなら歸るで、何もこんな恐ろしい暴風雨の日に、無理に立たなくても、一日二日見合せたら何うかと、朝から幾度となく、それは殆んど口の酸くなるほど止めて見た。けれども志田の決心を翻させることは出來なかつた。彼はどこまでも剛情に、何うしても今夜七時の汽車で立つと繰返した。遂には叔母も持て餘して、やつぱり志田の心のまゝにするが好いと言ふより外なかつた。

荷物とても來た時のまゝである。赤革の箱鞄が一つ、それにバスケットだけである。彼は自分でその荷物を始末し、暫し滯在した部屋を片づけてしまつた後は、母屋の方には行かうともしないで、恰も檻に入れられた猛獸の如く、部屋の中を幾度となく行きつ戻りつした。そして時の經つのを待つた。

二

「若旦那樣、馬車の支度が出來たゞよ。」

彌作は防水マントにすつかり身體を包んで、離室の緣先にやつて來ると、志田に告げた。

志田は時計を見ると、彼が命じた時間通り、丁度きつちり五時半であつた。彼は鞄とバスケットとを彌作に渡すと、自分は母屋の方に出かけた。志田は曾て永い間暮したことのある部屋を、久し振りで歸つて來てちよつとの間滯在したばかりで、また再び出て行かうとする時、何がなし振り返つて見ずには居られなかつた。今度は何時歸つて來て、この部屋に寢起をすることがあるのか、それとも今後再び歸つて來るやうなことはないのか、さう思ふと彼も、そのがらんとした部屋に對して多少の感慨がないわけに行かなかつた。

玄關に出ようとすると、丁度女中がやつぱり馬車の支度の出來たことを知らせて、志田の迎ひに來るのと會つた。レインコートに身を固め、靴を穿いて、彼が馬車に乘り込む時、叔母はもとより、下女や下男が見送つてくれた。

「お前、氣をつけてお歸りよ。」と叔母は涙ぐんだやうな聲で、彼の後から聲をかけた。「こんな暴風雨の中を立つて行くのだから、心配して居るからね、着いたら直ぐ電報で知らしておくれ。」

年を取つて而も孤獨な叔母は、ちよつと來たと思ふ間もなく、直ぐまた歸つて行く甥ではあるけれども、何うせ一生一緒に暮せる甥ではないのだけれども、それでも別れることが辛さうに、聲が震へた。

「大丈夫です。着いたら直ぐお知らせします。」

志田はちよつと振返つて元氣よく答へたが、外套の頭巾に包まれた彼の顏には、につと寂しい微笑が浮べられた。

馬車をつけられた馬は、激しい吹き降りの中に、雨に打たれて立つて居た。鬣や、尻尾や、腹からは、雨の滴がぽた〳〵と傳はつて居た。耳も、睫毛も濡れて居た。

志田が馬車に乘り込むと、彌作は御者臺に乘つて、手綱を取つた。鞭を見せると、馬は暴風雨を衝いて勢ひ好く走り出した。路面は泥濘み、水は溢れた。轍は水の滴を跳ね飛ばし、馬車は右に左に搖れながら疾驅した。

「ほら、ほら！　もう一と走りだ。元氣好く走れよ。」

彌作は御者臺で、雨にぐつしより濡れながら、高く鞭を上げて見せて馬を勵ました。彼のその聲も、ともすれば雨と風とに吹き消され勝ちであつた。

暴風雨がひどいので、道は思つたよりも暇取つたが、それでも停車場に着いた時には、發車までにはまだ四十分以上も間があつた。

「御苦勞だつた。もうこれで好いから歸つてくれ。」

志田は馬車から降りて、待合室に入ると言つた。

「折角こゝまで來たものだ、汽車まで送りませうよ。」

ぐつしより濡れた彌作の防水マントからは、滴がぽた〳〵と滴つて、三和土の上に落ちた。

「いや、それには及ばないよ。」

「でも、奥樣も、若旦那樣が汽車にお乘りになるまで送るやうにつて、言つたゞからね。」

「何、かまはないからこゝで歸つてくれ。」

志田は、汽車まで見送らうと强情に主張する彌作を、無理に斷つた。

「それぢや濟まないだが、これで失禮するかね。」

「さうだ。お前もひどく濡れてるぢやないか。それに馬も可哀相だよ。こゝまで送つてもらへば澤山だ。後は汽車に乘るばかりだからね。」

「ぢや、若旦那樣、お別れだね。氣をつけて行かつしやれよ。」

「有難う、お前も達者で暮せよ。」

「この次ぎは何時歸るだか、わからないだね？」

「さあ、何時になるかね。またなるべく早く歸つて來ようよ。」と志田は寂しく笑つた。

「今度若旦那樣が歸つて來る時には、わしがまたかうして送り迎へ出來るだか、何うだかな……。」

「そんな心配することがあるものか。」
「年を取つてるだからね。」
彌作は疎らな齒を出して笑つて、烈しい吹き降りの中に出て行つた。

三

田舍のステエションは、發車間近になつてもそんなに混み合ふやうなことはなかつた。殊に烈しい暴風雨なので、乘る客も、降りる客も少かつた。
志田は切符賣口の開くのを待つて、上野ステエションまで通しの切符を二枚買つた。發車の時間が迫つて來るに從つて、彼の心は次第に落着かなかつた。待合室の中を無意味にごと〳〵歩き廻つて見たり、閲覽所に備へてある田舍新聞の綴込を手に取つて見たりしたが、直ぐまた苛ら〳〵して入口に立つて外を眺めた。
春の永い日も、暴風雨のために夕暮が近く、七時前にはもう殆んど夜であつた。眞暗な空からは止め度もなく雨を落し、風は恐ろしい叫び聲を上げて吹き過ぎる。早くから表の硝子戸を閉めた町通りに軒を並べた、商家の心細げな灯影が、降り頻る雨の中を路上まで洩れ射して居る。稀にある人通りの雨に打たれた姿が、ぽつかり灯の中に現はれたかと思ふと、直ぐまた眞暗な暴風雨の中に消えて了ふ。
發車時間がもう五分の後に迫つて來た。驛夫が函館行の急行が發車することを呼んで歩くと、改札が始まつた。雨に濕つた、暗い、佗しい顏つきをした乘客たちが、一人々々出て行つて、直ぐ待合室はがらんとした。
志田は苛ら〳〵しながら入口に突立つて、動かうとしなかつた。幾らか蒼ざめて見える彼の顏には、眉と眉との間に深い竪皺が刻まれ、氣むづかしさうにきと脣を結んだ。そしてきら〳〵輝く一生懸命の眼が、ステエション前の眞暗な廣場に、ぢつと注がれた。彼の眼も顏も、次第に物狂ほしくなつて行く。
時は一分經ち、二分經つた。その一分二分の間に、志田は一年二年と自分の生命を削られて居るやうな思ひがした。
「或ひは……」
志田は今まで出來るだけ觸れまいと努めて居た、自分の胸に渦卷いて居る恐ろしい不安に、遂ひ觸れずには居られなかつた。彼は思はず身震ひし、顏を歪めて、脣を嚙んだ。
「だが、そんな筈はない。あの女が僕を瞞すなんて！　そんなことがあるものか！」
彼はまた思ひ返して、強い自信のある調子で頭を掉つた。

丁度その途端、眞暗な闇の中から、恐ろしい暴風雨の中から、眞黑なマントに身を包んだ一人の女の姿が、突然彼の眼の前の明るみへ、ぽつかり現はれた。

今まで何物かに強く抑へつけられて居たやうな志田の胸は、急に躍つた。息が喘んだ。彼は瞳を凝らして、その眞黑なマントに包まれ、ぐつしより雨に濡れた女の姿が、自分に近づいて來るのを見詰めて居た。

「間に合つて？」

闇から浮び出て來た女は、行きなり志田の前に立ち止つた。彼女はマントの頭巾を後に撥ね退けると、眞蒼な、滴の傳ふ顏を仰向けて、彼の顏を仰いだ。

「もう三分」と、志田は答へた。「遲かつたぢやありませんか。僕はどんなに心配したか知れません。」

「やつとの思ひで——ほんとうにやつとの思ひで出て來たのですわ。けれども、もう大丈夫なのね。こゝまで來たのですから、もう大丈夫ですわ。わたしあなたと御一緒に、どこへでも參ります。えゝ、え。どこへでも！　わたしにはもう何もないのですわ。あなたより外には何もないのですわ。」

「急がないと、間に合はないかも知れません。」

志田はさう言つて先に立つた。

改札を通り抜け、陸橋を渡つてプラットホームに行くと、汽車はまだ着いて居なかつた。屋根だけあつて、圍ひのない、吹き曝しのプラットホームは、烈しい吹き降りに、殆んど野天に立つて居ると同じことであつた。乘客たちは小さな待合所に竦んで、汽車が着くのを待つて居た。

志田と彌生とは、若しや誰か知人に顏を見られはしないかとひどく怖れた。二人はわざと吹き曝しのプラットホームに立つて居た。

やがて汽車は、轟然たる響きを立て、暴風雨を衝いて入つて來た。プラットホームは搖れた。

四

彌作は、志田を汽車まで見送るつもりであつたが、頑固に斷られたので、ステエションに送りつけたなりで歸途についた。馬は行きと違つて、鞭を上げるまでもなく、元氣好く走つた。彼は馬車の上で、烈しい動搖に身體を揉まれ、雨に打たれながら、何時でも町まで出かけて來た時にはさうであるやうに、今日もまたやつぱり町外れの居酒屋に寄つて、好きな酒を一杯やつて行かうか行くまいかと思ひ迷つて居た。

一杯飲み出すと、止めどのない酒である。今から始めたのでは、屹度夜晩くなつて了ふだらう。何時

もの日ならかまはぬとして、こんな大暴風雨の日に、あんまり遲くなつて、若し間違ひでもあつてはならない。飲みつけの居酒屋でやるのはよして、家に歸つて自分の部屋でゆつくりやることにしやう。

彌作はさう思つても、馬が元氣好く走り、だん〳〵馴染みの居酒屋が近づくに從つて、腹の蟲がぐうぐう言つて、素通りすることは承知しさうもなかつた。烈しい誘惑は、彼の心を掴んだ。

「たつた一杯だけだ。たつた一杯だけなら文句はあるめえ。」と、彼は我れと我が心に言つた。「酒を飲んでわしの惡い癖は、梯子上戸で、切上げ時を知らないことだ。そのために過ちも多ければ、度々失策もし出來す。けれども一杯だけ飲んで引揚げる分には、過ちや失策をしつこはないのだ。たつた一杯なら水を飲むと同じことだからな。咽喉が渴いた時に、水を飲んで惡いつて法はないだ。さうだ、一杯だけなら水と同じことだ。あれがきゆつと舌に滲みて、咽喉に通る時のことを思ふと、全く堪へられないだ。」

「いや、いや。」と、彌作は直ぐまた考へ直した。「これが何時ものわしの惡い癖だ。何時だつて、飲んだくれて、醉つぱらつて、失策をやらかさうと思つて飲み始めることなど夢にもない。飲み始める前は、一杯だけでよさうといふつもりで飲むんだ。が、一杯咽喉を通つて了ふと、また一杯飲みたくなる。この一杯だけでよさうと思つて、もう一杯飲む。また後一杯飲みたくなる。もう一杯、もう一杯と、終ひには何も分らなくなつて、失策をし出來すやうなことになるのだ。さうだ、初めから飲まないに越したことはない。」

彌作は諦めては見ても、彼の咽喉は鳴つた。よさうと思つたり、一杯だけなら差支へあるまいと思つて見たり、いや、いや、その一杯が可けないのだ、その一杯が失策の元なのだと考へ直して見たり、彼は雨に濡れ、馬車に搖られながら、とつおいつした。酒のためにすつかり氣を取られて、手綱を取ることもうつかりして居た。が、はつと氣がつくと、馬は正しく家路に向つて走つて居るのであつた。

「好し、好し。はい、はい。」

彌作は愛撫の情を止めることが出來なかつた。彼は手綱を取つて劬るやうに優しく聲をかけた。馬は滴の垂る鬣を掉り、耳を動かして、暴風雨の中を走つた。

馬が駈けるに從つて、不斷得意の居酒屋はだん〳〵近づいて來る。一旦思ひ諦めた筈の誘惑が、またしても彌作の心に頭を擡げ始める。暗い中に居酒屋の燈火が見えて來た。もや〳〵と香ばしい煮物の湯氣の立て籠めた、酒の匂の滿ちた酒屋の內部の有樣が、彼の眼に浮んで來た。煤けたランプの光や、酒や煮物の汁がこぼれて、汚點のある卓子が眼に見えて來た。

「えゝ、ままよ。一杯だけやつつけるか。」

彌作は半ば自棄くそになつて、思はず馬の手綱を緊めた。が、直ぐまた反省した。

「可けない、可けない。こんな暴風雨の日に酔つぱらつてしまつちや、どんな危い間違ひがないとも限らない。」

彌作は、居酒屋から洩れ出る灯を見まいとした。彼は自分の直ぐ鼻面に、足を運ぶたびに規則正しい運動で默々と動いて居る、肥えた馬の尻をぢつと見詰めた。そして一氣に居酒屋の前を駈け拔けようとして、鞭を振つた。

「はい、はい。そら、そら！」

鞭を上げられるまでもなく、急いで居た馬は、更に疾驅した。居酒屋の入口の、油染みた障子を洩る灯影が、ちらと彌作の眼に映つたかと思ふと、直ぐ消えた。

「はい、はい。」

彌作は恐ろしいものの前から一刻も早く通り拔けようとするやうに、更につゞけざまに鞭を上げた。突然馬の鼻面で女の悲鳴が聞えた。と思ふと、馬車は激しく震動して、馬は四本の脚を踏ん張り、たちたぢと停つた。

五

一刻も早く居酒屋の前を走り拔けようとして、夢中になつて馬を疾驅さして居た彌作は、突然馬の鼻面で叫ばれた女の悲鳴に、びつくりして我れに返つた。疾驅して居た馬車が、急にがくりと止つたので、機みを喰つた彼の身體は前にのめつた。彼は危く馬車の外に投り出されようとしたのを、やつと踏みこたへて、馬の前脚の邊を覗いて見た。初めは誰かを轢いたかと胸を轟かしたが、好い工合に、別に人を轢いたやうな樣子も見えなかつた。

彌作は兎も角馬車から降りて見た。路傍に何か黑いものが轉がつて居た。近づいて見ると、夜目には黑いマントに包まれた誰かが倒れて居るのであつた。

「もし、もし。」

彌作ははつとして駈け寄つた。彼は倒れた者の肩に手をかけて呼んだ。

「はい。」

はつきりした聲で返事をして、直ぐむく〳〵と身を起した。

「何うしただね。」

彌作はまだ胸の動悸を鎭めることが出來なかつた。彼は暗がりの中に相手の顏を覗き込んで訊いた。が、それが女であることは分つても、どこの誰だか、どんな女だかは、もとより分らなかつた。

「何んでもないのです。」女の聲が答へた。「後から不意に馬の鼻が打つかつたものですから、びつくりして飛び退いた機みに轉んだのですわ。それぎりなのよ。何んでもないのですわ。」

「危いとこだつた。」と、彌作は溜息を吐いた。「それで、どこも怪我はなかつたかね。」

「えゝ、別に……。自分で轉んだのですもの。」

「過ちがなくて、まあ好かつた。」彌作は初めて安堵の胸を撫で下ろした。「早く戻らうと思つて、少し馬を急がしたもんだから、それでビン公、お前さんの脊中に鼻面をぶつつけただな。なあに、馬はこれで滅多に人を踏むやうなことはないだからね。」

「あなた、志田さんとこの爺やさんぢやないの。」

女は不意に問ひかけた。

「お前さんはね？」

彌作は、先刻から何うも聞き覺えのあるやうな聲だと思ひながら、何うしても思ひ出せなかつた。それが、自分のことを訊かれて、慌てゝ訊き返した。

「わたし、三四度お伺ひしたことがあるわ。」と、女の微笑を含んだ聲が答へた。

「あ、なるほど。お前さん太田様のお嬢さんだつたね。道理で、先刻から何んだか聞いたことのあるやうな聲だと思ひながら、どうしても思ひ出せなかつただ。」と、彌作も笑つた。「だが、お前さん、こんな暴れの日にどこに行つただね。」

「町まで、何うしても用事があつたものですから。」

「ぢや、歸りだね。」

「え。」

「歸りなら丁度好いだ。馬車に乗せて送つて上げるだよ。」

「まあ、さう。さうして頂けばわたしほんとうに助かるわ。」

「何うせ空馬車だもの、一人や二人乘つたつて、何んでもないだ。さあ、遠慮はないから乘んなさるが好い。」と、彌作は愛想好く言つた。「わしも今、若旦那様を停車場に送つて、丁度歸りだがね。」

「え、若旦那様つていふと、志田さんのこと？」と、純子の聲音は遽つた。

「何んだか、突然東京に歸るんだと言ひ出して、幾ら止めてもきかずに歸つて了つただ。」

「何時の汽車で？」

「汽車は七時だよ。」

「七時といふと、急げばまだ間に合ふわね。」と、純子はやきもきした聲で叫んだが、直ぐ息忙しくつゞ

けた。「爺やさん、一生のお願ひだわ。何うぞ、わたしをこの馬車でステエションまで送つて行つて頂戴。わたし、何うしても志田さんにお目にかゝらなければならないの。志田さんと一緒に行かなければならないの！」

「これからまた停車場に引き返すだかね。」

彌作は呆氣に取られた。

六

純子は、呆るゝ彌作を勵まし、渋くる彼を無理やりに頼んで、ステエションまで馬車を引き返させることにした。馬も御者も氣が進まなかつた。ただ純子一人のみ焦りに焦つた。

「早く！　早く！」

純子は馬車の中で氣を揉んだ。鞭は振り上げられ、馬の尻に柔かな音を立てた。馬車は眞暗な暴風雨の中を疾驅した。

丁度純子がステエションに着いた時には、轟然と響きを立てゝ汽車がプラットホームに入つて來た時であつた。彼女は前後の分別もなかつた。一途に志田の跡を追はうとした。もう乘客は一人もなく、改札口の柵は開け放しになつたまゝ誰も居ないのを幸ひ、彼女はつゝとそこを抜けた。夢中になつて陸橋の階段を駈け上つた。彌作は何が何んだか分らなかつた。彼は氣違ひのやうな純子の後姿を、不安さうな眼で見送つて居た。

濡れたプラツトホームには、もう乘客の姿は一人も見えなかつた。手提燈を提げた車掌や、驛夫の姿が、三四人見えた。列車の窓々はすつかり硝子戸に閉ざされて、明るく輝いて居た。

狂氣の如く駈けて來た純子の姿を見ると、一人の驛夫が一旦閉めた列車の扉をまた開いた。

「お早く、お早く。」

驛夫は急かし立てた。

「いゝえ。わたし……。」

純子は自分でもわけの分らぬことを言つて、夢中で明るい窓の中を覗き込みながら、驛夫の傍を通り抜けた。驛夫は怪訝さうに、彼女の姿を眺めて居た。

どの列車に志田が乘つて居るのか、まるで見當もつかなかつた。彌生を迎ひに出た時、志田も二等列車に乘つて來たことが、この時不意に純子の頭に閃いた。

二等列車は遙か後部に連結されて居た。彼女は濡れたマントや着物の裾が足首に絡まつて、歩行が困

難なのを、撥ね退け〳〵二等列車を目がけて走つた。手提燈の光が搖れたと思ふと、車掌の笛が鳴つた。短い汽笛の聲が應じて、汽車は動き出した。

純子は氣が氣ではなかつた。息せき切つて彼女がやつと二等客車の傍まで駈けつけた時には、汽車は次第に速力を早めて來た。

とある窓の中に、純子は志田の姿を認めた。明るい客車の中に、志田は腕を組んで、氣むづかしい表情をして、クションに背を凭せて居た。彼の眼は輝き、顏の色は心持ち蒼ざめて見えた。

「志田さん！」

純子は思はず叫んで、窓際に駈け寄つた。が、彼女は愕然として立止まつた。志田の隣に、彼と肩を並べて、眞蒼な、石の如く冷たい顏色をした彌生が腰掛けて居る姿を認めたのである。

「あゝ、やつぱり！」

純子は絶望的に呻いた。

兼ねて自分の想像して居たところでもあり、志田自身でも純子に向つて、自分の愛して居るのは彼女ではなくて、彌生であると言明したところでもある。彼女は覺悟はして居たやうなものの、今眼の前に二人並んだ姿を見ると、胸は異樣な嵐に渦卷いた。彼女は息の止まるやうな思ひで、一瞬間立止まつたが、彼等を乘せた汽車は遠慮なく彼女の眼の前から飛んで行く。

「志田さん！　志田さん！」

純子は狂氣の如く叫んで、彼等を乘せた列車を追ひかけた。

志田は自分を呼ぶ聲に氣がついたのか、ひよいと眼を上げて窓の外を見た。彼はそこにマントを被つた純子の姿を認め、愕然と顏の色を變へた。が、直ぐまた以前の如く腰を落着け、最早再び動かなかつた。

「志田さん！　志田さん！」

純子は呼びつづけながら列車の速力に歩調を合して、プラットホームを走つた。けれども汽車の速力は次第に早くなる。マントも着物も濡れた純子は、走ることが出來なかつた。彼等を乘せた列車の窓は、それを追ひかけて居る彼女から次第に遠ざかつて行く。それでも彼女はやつぱり志田の名を呼びながら、强情に走りつゞけた。

プラットホームを出外れると、一層烈しい暴風雨は純子を襲つた。裾は足に絡んで、彼女は濡れた冷たい砂利の上にばつたり倒れた。

「志田さん！　志田さん！」

倒れながら純子は、尙も志田の名を呼びつゞけた。

志田と彌生とを乘せて東京へと走る列車の響きは、暴風雨の中を闇の彼方へと、だん〳〵遠ざかつて行く。

公園にて

一

東京の春を魁するものは、上野公園の櫻である。東京の秋を知らせるものも、また上野に開かれるいろいろの美術展覽會である。九月の月に入ると、まづ美術院の展覽會が開かれる。つづいて二科會の展覽會が開かれ、最後に一番大仕掛で、一番俗受けのする政府經營の帝展が開かれる。

九十度以上の暑さが幾日とかつづいて、氣象臺の報告でも何十年以來の暑さといはれた酷熱も、さすがに九月の月半を過ぎると、めつきり秋めいて來る。朝夕は冷々とした風が吹いて、蟲の聲でも雲のたたずまひでも、燈火の光でも、物の響でも、何んとなく物佗しく、やうやく秋の深くなつて來たことを思はせる。夜など空が冴えて、星の光が明るく、北から南に大きな弧を畫いて跨つた銀河が、だん〳〵白く濃くなつて、取り止めもなく吹く輕い風が道行く人の裳すそを煽り、前栽の植込の萩や楓の葉裏を

翻して、さら〳〵と幽寂な音を立てたかと思ふと、またどこともなく消え去つて行く。

丁度十月の月半から華々しく開かれた帝展に、上野の山の秋はひとしほ賑つた。一年々々と人氣を呼んで、今では美術を解する者と解しない者とを問はず、恰も上野や向島や飛鳥山の春の花見が、東京市民の大部分の年中行事の一つであるやうに、一年一度の帝展見物は、また東京市民大部分の年中行事の一つとなつた。繪を見てその善惡の判別のつきさうもない女子供から、勞働者や職工風の者まで、我れも〳〵と展覽會の入口目がけて詰めかける。電車の中や、往來の立話、役所の晝休みなどに話題になるのは、屹度出品畫の噂である。卑しくも東京の人間である以上、八公熊公の末に至るまで畫のことを論じない者は、東京市民としての恥辱である。

その展覽會が開かれて、まだ一週間と經たない或る日。日曜と祭日とぶつかつた上に、夏から雨の少い年で、秋になつても好晴がつづいて、風のない、空の高く晴れた、本當に玉のやうな、麗かな小春日和であつた。不斷でさへ混み合ふ展覽會の入口から場内にかけて、その日は朝からひどい混雜であつた。會場の開かれる定刻前から、切符賣口には既に群衆が黑山のやうに詰め寄せた。十時を過ぎ、正午から一時二時時分には、山下から動物園前、會場にかけて、行く人歸る人で、廣い通りや、公園内の廣場や、林の中の歩道には、人の姿が黑豆を撒いた如くに散らばり蠢いた。自動車はけたゝましく警笛を鳴らし

て群衆を縫ひ、腕車はベルと懸聲勇ましく、護謨輪の車を輕快に馳せ違ふ

それらの群衆の大部分は、皆、展覽會目がけて詰めかけるのである。入口も混雜したが、出口も押合ひへし合つた。足を踏まれて叫び聲を上げる者、歗鳴る者、下足番を叱咤する者、とてもゆつくりと美術を鑑賞するなどの氣分ではなかつた。大袈裟に言へば半分は命懸けである。

「評判の支那八景も、世評ほど大した代物ぢやないね。」

「俗氣紛々たるものさ。」

「あんな繪が、現代人の嗜好に投ずるのかね。」

「一言にして盡せば、彼奴は藝術家ではなくて山師だね。自分の野心を大仕掛な構圖に盛つて、俗衆の眼を驚かさうとしてるに過ぎない。」

「近頃流行の長篇小說の作家の中にも、あゝいふ傾向の奴が多くはないかね？」

「そいつを迎へて喝采するんだから、世間つて存外甘いもんさ。」

どこかの學生らしい三人連の若者が、混み合ふ出口をやつと離れると、今見て來た繪畫の批評だか、罵倒だかを試みながら、ぶら〳〵歩いて行く。つづいてその三人連れの後から人波に揉まれつゝ、やつと場外に遁れ出た一人の若い婦人があつた。秋とはいへど好く晴れた眩しい日射に、今下足番から受取

つたばかりのパラソルをひろげようとすると、亂暴に取り扱はれたためか、骨が痛んで半分くらゐしか開かなかつた。强ゐて開かうとすると、折れた骨が布地を破るおそれがある。

「まあ、しようがないのね。」

若い婦人はその圓顏を心持蹙めて口の中で呟いたが、そのまゝパラソルを閉くことは諦めて杖に突いた。そして、自分の前をのろ〳〵歩きながら、景氣の好い罵倒を試みて居る三人の言葉を聞くともなく聞いて、彼女は微笑んだ。

「おや、彌生さんぢやないか知ら。」

偶と彼女は自分の行手に、一人の若い婦人の姿を認めて、思はず獨言つた。

二

混み合ふ展覽會の會場から出て來た、若い丸顏の婦人が認めた、もう一人の婦人は、やつぱり彼女と同じくらゐな十八九、まだ二十歳にはならない年頃であつた。華美な縞のお召の單衣に、紫がかつた羽織を着て、濃い海老茶地に白のレース張りのパラソルを翳したのが、ぱつと華美々々しく人目についた。

圓顏の婦人が、最初彼女の姿を見た時、丁度パラソルを後に傾げたので、帶の邊から上は隱れて見えなかつた。それが何うかした拍子に、彼女は傾げたパラソルを眞直ぐに直したので、後姿が完全に見えたのであつた。

「おや、彌生さんぢやないか知ら。」

圓顏の婦人が思はず獨言つたのは、丁度彼女の後姿を完全に見た刹那であつた。背のすらりと高いところ、華奢な撫肩、ほつそりした優雅な頸、飾氣のない無雜作な束髮の頭、歩きつきから背恰好が、彌生そつくりであつた。

圓顏の婦人は、急にすた〳〵と足を早めて、直ぐ彼女に追ひついた。

「彌生さん、廣岡さん。」と、彼女は後から呼びかけた。

「え。」パラソルを翳した婦人は振り返つたが、「あら、純子さん！」と、びつくりして言つた。

「まあ、やつぱり彌生さんだつたのね。わたしやつとお會ひすることが出來たわ。」

純子は眼顏を輝かして、にこ〳〵微笑みながら彌生の身近にひたと寄り添つた。

彌生は初めびつくりして、ちよつとの間顏の色を變へたが　直ぐ不斷の落着いた態度に歸つた。純子がさも懷しさうに、氣の好い微笑を、愛嬌に滿ちた圓顏に浮べて寄り添つて來るのを、幾らか迷惑さうに、不機嫌に、その形の好い眉を顰め、眩しいものでも見詰める時のやうに、眼を細めてぢつと見て居

た。

北海道を出てから、未だやつと半年ばかりしか經たないのに、彼女の姿でも、顏つきでも、見違へるやうに一變して居た。一體に色の白い顏の色が、瑞々した蒼味を持つて、濡れたやうに潤んだ眼が、底深い光を湛へ、以前は大變濃いやうに思つて居た眉が、少し薄くなつたやうに思へた。

「わたし、あなたをどんなに捜して居たでせう。屹度東京に居らつしやるといふことだけはわかつて居たのですけれど、どこを何う捜して好いかちつとも見當がつかなかつたの。わたしね、あなたの卒業なすつた學校を尋ねたり、以前御交際のあつたといふお友だちを一人一人お訪ねしたり、あなたの居らつしやるところを何うかして知りたいばつかりに、隨分苦心したのよ。けれども、どこを尋ねて見ても、あなたの近頃の消息を知つて居る人はないでせう。みんなあなたを、學校卒業なさると直ぐ、北海道にお歸りになつたきりだと思つてるのでせう。東京にまた出て入らしたことすら、知つてる人は一人もないのですもの。わたし、あなたにもう一生お目にかゝれないのか知らと、さう思つて居たのよ。」

彌生は變つても、純子は以前に變らぬ無邪氣で快活な娘であつた。彼女は自分の喋つて居ることが、相手にどんな感じを與へるかも深くは考へようとしないで、今まで彌生の行方を捜した苦心を、惡氣のない、快活な調子で喋つた。

「それは誰も知らない筈ですわ。わたし、誰にも會はないのですもの。わたしね、以前のお友だちで、今でもおつきあひして居る人は、一人もないの。新らしいお友だち一人出來てるわけぢやなし、わたしほんとうに一人ぼつちなんですわ。」と彌生は瞬きして、眼を伏せた。

「他の方は兎も角、何故わたしに知らして下さらないの。二人一緒に小學校に通つて居た時分には、あんなに親しくして頂いたお友だちぢやありませんか。わたしあの時分と今と、ちつとも變らないつもりですのに、あなたは、わたしがあなたのことを思つてるほど、わたしのことは思つて居ちや下さらないのね。わたし、どんなことでも、それがあなたのために隱さなくちやならないことなら、誰が何んと言つたつて、隱すつもりなのよ。」

純子は顏には微笑を含んだが、さすがに怨みがましく言つた。

「わたし惡かつたわ。御免なさいね。」と彌生は氣弱く、素直に詫びた。

三

「こんなところで、何時まで立話も出來ないわね。」と純子は、ぢろぢろ二人を見て過ぎ行く往來の人々を憚るやうに言つた。「わたしどつさりお話があるのよ。未だ〳〵どつさりお話があるのよ。ですがあな

た、お急ぎなの。」
「別に急いでも居ませんけれども……。」
彌生は何んだか氣が進まなささうであつた。
「お一人なんでせう。」
「え。何うして？」
「何んでもないのよ。たゞ伺つて見たの。」
そして純子も彌生も、何故か同じやうにぽつと赧くなつて、お互に眼を反らした。
やがて二人は、どちらからともなく、ぶら〳〵歩き出した。通りは自動車や、腕車や、人の往來が煩いので脇道に切れ、樹間の細道を縫ふて、當てもなく歩いた。櫻の葉は疾くに散つたが、黄ばんだ銀杏や、榎の落葉が、風もないのにはら〳〵と舞ひながら、靜かに地に落ちた。歩いて行く彌生のパラソルの上に、純子の肩の上に止つた。
「もう、すつかり秋なのね。」
彌生は、枯れ〴〵の木の間から高く澄んだ空を眺め、地に落ち敷いた落葉を眺めて、感慨深さうに言つた。その樣子はどこか寂しく、心細さうである。

純子は今更の如く、彌生に向つて不審の眼を見張らずには居られなかつた。それは彌生の態度でも調子でも、彼女が豫期して居たところとは、まるきり正反對なためであつた。純子の想像して居たところによると、彌生は今や幸福の絶頂に居なくてはならない筈であつた。戀の勝利と喜びに酔うて居なくてはならない筈であつた。彌生は以前、北海道の草深い田舍で暮さなければならない自分の身を、どんなに歎いて居たらう。どんなに都會の豐富で華やかな生活を憧れて居たらう。自分の好める音樂の勉强することを、どんなに熱望して居たであらう。そして、また青木愼一郎と許婚の位置にある自分の身の不幸を歎き、どんなに愼一郎を厭ひ、志田忠治を愛して居たらう。
彌生は自分の欲するまゝの道に生きるべく、家を捨て、祖父母を捨てゝ、志田忠治と共に東京に出て來たのである。彼女は心から厭うてやまなかつた、田舍の生活を捨てたのである。愼一郎を捨てたのである。そして、自分の愛してやまなかつた志田と共に、東京に出て來たのである。彼女の現在は、希望と幸福とに滿たされて居なければならない筈でこそあれ、彼女の生活には、決して不幸や悲しみが忍び込む隙間はない筈である。
それだのに彌生の樣子は力なく、彼女の表情は悲しげである。空を眺め、地に散る落葉を眺めて、我れ知らず洩らした、秋を嘆息する彼女の聲の響きには、同じ我が身の秋を喞つ寂しさが含まれて居るや

うに、純子には感じられた。それは人生の春、人生の喜びに醉うて居る者の聲でもなく、言葉でもなかつた。純子は今彌生が何ういふ境遇で、何ういふ狀態に居るのかを知りたいと思つた。けれども彌生の性質を知つて居る純子は、それをぶしつけに訊くことは出來なかつた。

「この邊でちよつと休みませうね、」と純子は立ち留つて、彌生の横顔を覗いた。

「え。」

二人は大きな欅の木の下の石の上に、並んで腰を下ろした。

「あなたも展覽會を見に入らしたの。」と、純子が訊いた。

「え。」

「すつかり御覽になつて？」

「いゝえ。」と、彌生は頭を掉つて、「途中で出て了つたの。」

「わたしなんかには、何うせよくは分らないんですけれど、何んですか世間で評判するやうな、感服する絵もないのね。」

そして純子は、會場から出た時、三人連の學生が、今年の出品中特に人氣を呼んで居るある畫家の、大掛りな絵を罵倒したことを思ひ出して、思はず微笑んだ。

「わたし、氣分が惡くなつたやうですから、皆な見ないで出て來てしまつたの。ほんとうなら展覽會から、音樂會の方に廻らうと思つて居たんですけれど……。」

彌生は、純子の微笑になぞ氣もつかずに言つた。

四

「やつぱり、今でも音樂の勉強なすつて居らつしやるの？」

純子は胸を躍らして訊いた。

「いゝえ。近頃ぢやさつぱり……」と、彌生は心細さうに微笑んで、何故か羽織の襟を搔き合せ、氣にして前の方を隱すやうにして、「東京に出て來て二三ケ月の間、少し勉強したんですけれど、今ぢやそれどころぢやないんですわ。」

「どうして？　あんなにお好きな音樂ぢやありませんの。それにあなたのやうに天分の豐な方が、折角今のやうな自由の境涯に居らして、自分の好きな道も勉強なさらないのは、ほんとに惜しいと思ひますわ。」

純子は彌生の瑞々した、腫れぼつたいやうな顏をつくづく見て、しみじみ言つた。

「音樂の勉强なんて、そんなことを考へたのは、それはみんな昔の夢なのよ。」と、彌生は自ら嘲るやうに、また自ら憐むやうに、美しい口元をきゆつと引歪めて、どこか捨鉢な調子で言つた。「今となつちや何もかも駄目なの、女が心に描く希望や願ひは、それはほんとに頼りのない夢と同じことですわ。現實にぶつかると、何もかもめちや〳〵なのよ。わたし、今ぢや音樂の勉强なぞといふことは、夢にも思つちや居ません。思はずに居られなくても、無理に思はないやうにして居るのですわ。思へば思ふだけ、自分を苦しめるやうなものですからね。」

「わたしには、あなたのおつしやることが、能く分りませんわ。」

「思ふまいとしても、自分の好きなことつていふものは、やつぱり忘れられないものと見えるのね。何時の間にかそつちの方に氣が引つ張られて居るのよ。新聞を見ても、知らない間に音樂の記事を讀んでるの。道を歩いて居ても、樂器の音ばかりが耳についてしかたがないの。今日も音樂學校で、今度新たに外國から入らした先生と、永いこと樂壇から退いて居らした、ほら、あなたも御存知でせう、内山女史ね、あの方と、お二人のピアノの演奏會があるものですから、帝展を見てからそちらに廻らうと思つて、この通り切符まで買つて來たのよ。」と、彌生は膝の上で玩具にして居た、刺繍のあるバッグの中から、一葉の切符を摘み出して見せた、「けれども、展覽會があの人混みでせう。繪を見て居るうちに、わたし氣分が悪くなつて、見物もそこ〳〵に出て了つたの。そして音樂會なぞには廻らないで、歸らうとして居たところなの。それには人の彈くピアノを聽いたりすると、自分もやつぱり誘惑されて、一層思ひ切れなくなるものですから、音樂など聽かない方が好いのですわ。ですからわたし、もうこんな切符など入らないの。」

彌生は飾氣のない、けれども手そのものが如何にも華奢で、優雅な美を持つた手で、こまかく疊んだり、のしたりして居た切符やプログラムを、ぢり〳〵したやうな態度で、重ねては二つに裂き、四つに裂き、八つに裂きして、眼の前にぱつと放つた。斷れ〴〵の紙片は、ぱつと空にひろがつて、落ち散る花片の如く、また落葉の如く、ひら〳〵と舞ひながら、土の上に、また芝生の上に亂れ落ちた。

純子は彌生のその苛々した有樣を、圓な眼を見張つて、呆氣に取られて眺めて居た。何を彼女がそのやうに苦んで居るのか、何を憤つて居るのか、純子には全く見當もつかなかつた。

「彌生さん。あなた、何うしてそんなことをなさるの。」

純子はやがて優しく訊いた。

「御免なさいね。」彌生は、はつと氣がついたやうに、彼女の深い蒼味をもつた顏が、さつと恥らふやうに赧らんだ。「ほんとに久し振りでお目にかゝつて、わたし今のやうな眞似をして可けなかつたわ。何う

お氣にかけないで下さいね。わたしね、何うかすると近頃、急にかつとなつて前後も忘れて、夢中になるやうなことが度々あるの。」

「あなた、どこかお氣分が悪いのぢやない？」

「わたし？　いゝえ。何うして？」

彌生は不安さうな眼光で、ちらと純子の顏を眺めると、またしても慌てて羽織の襟前を搔き合せた。

彌生の身體の異狀などには、固より氣のつかない純子は、彼女のその不思議な動作を、ただ無意味に眺めて居た。

五

純子は、彌生の近況について、いろ〳〵聞きたいと思ふこともある。自分でも話したいことが、どつさりある。けれども彌生の神經が病的に尖つて居て、ちよつとしたことにも直ぐ興奮しさうなので、うつかりしたことを訊いたり、話したりすることは出來ないやうな氣がした。

「純子さん。何時東京に出て入らしたの。」

彌生は、やつぱり膝の上で、バツグを弄くりながら、やがて訊いた。

「わたし？」純子はぽつと顏を赧らめて、ちらと彌生の横顏に眼をくれたが、「あなたが東京に入らつしやると、直き出て來たのよ。」

「で、今何うして居らつしやるの。どつか學校にでも通つて居らつしやるの。」

「え。」

「どこの學校なの。」

「どうせわたしなど、平凡な學校なのよ。」純子は含羞むやうに微笑んで、「麹町の方の、或る裁縫の技藝學校に通つてるの。こんなことを習つて、何うなるかといふ氣もするんですけれど、でも、わたしなどのやうな、平凡な女は、そんなことでも習つて置くより外、しかたがないんですもの。」

「どうしてあなたは、そんなに自分のことを卑下なさるの。結構ぢやありませんか。却つてその方が好いのですわ。」

彌生は皮肉でなしに、心からつく〳〵言つた。

「好いか惡いか、わたしには分らないのですけれども、それより外しかたないものですから……。」純子はどこまでも謙遜な態度で、繰返した。「で、あなた、今どちらに居らして？」

「牛込なの。」

「まあ、さう。」と、純子はびつくりしたやうな眼を見張つて、「牛込に居らつしやるの。わたし、小石川に居るのよ。關口臺町なの。そんな近くに居て、何うして今までお目にかゝれなかつたのでせう。東京つて、狹いやうでもやつぱり廣いのね。これが田舍だと直ぐ分るんですけれどもね……。」

「ほんとにね。」彌生は同感した。「あなた、親戚のお家にでも居らつしやるの。」

「え。親戚つていふほどでもないのですけれど、知合ひの家の座敷を借りてますの。彌生さん。わたし未だ〳〵いろんなお話があるのよ。若しお差支へなかつたら、これからわたしのとこに入らして下さらない？　牛込に居らつしやるのなら、そんなに廻り道でもないぢやありませんか。」

「さうね。」と彌生は考へて、言ひにくさうにためらつてからつゞけた。「どんなお話か知らないけれど、若し國の方のお話でしたら、わたし何んにも聞きたくないの。國の方のことを聞くことは、わたし苦しいばかりですから、何にも聞かして下さらないやうに、お願ひしますわ。」

「あなた、隨分お思ひ切りが好いのね。」

「わたし、思ひ切りが好いのでせうか？」と彌生は口尻を歪めて、反問した。「若しわたしに、何の未練もなく國の方のことを思ひ切ることが出來るくらゐでしたら、わたしは今こんなに苦しまないでせう。平氣でいろんな國のお話も伺ふことが出來るでせう。純子さん。わたしね、よく國の夢を見ますの。小さい時のことだの、農場のことだの、林檎の花の咲いてるとこだの。けれども毎晩のやうに見るのは、祖母の夢ですわ。祖父の夢ぢやない、祖母の夢ばつかりですの。默つてわたしの眼の前に現はれて、ぢつとわたしを見詰めて居るんです。わたし夢の中で、どんなに祖母に責められるでせう。」

「まあねえ。」と純子はひどく感動して、「あなたが居らつしやらなくなると間もなく、おばあさまは御病氣なすつたのよ。一時はむづかしかつたのですけれど、今ぢや次第に宜しい方だといふことですわ。病氣のうちも、熱の囈語に彌生々々つて、しよつちうあなたの名ばかり呼びつゞけに呼んで居らしたといふことですわ。」

「純子さん。何うぞもう何もおつしやらないで。國の方のことなど一言も話しちや可けません！」彌生は何時の間にかハンカチーフで顏を掩ふて、肩先を震はしたが、直ぐぱつと取ると、「いえ、いえ、さうぢやない。話して下さい、話して下さい！　何もかも、あなたの知つて居らつしやるだけのことを、皆なわたしに話して頂戴。」と、眞赤な顏をして、狂氣のやうに言つた。

六

純子は、彌生の恐ろしい感情の爆發を、暫しの間呆然として眺めて居た。やがて氣がついた時には、

四邊に四五人の人々が立つて、二人の様子を不思議さうにぢろ〳〵見て居るのであつた。純子は極り悪さのために、顔が火のやうに熱つて來た。

「彌生さん氣を鎭めて頂戴。そんなに興奮なすつちや可けませんわ。」純子は四邊の人々に氣を兼ねつゝ慰めた。「何もかもわたしの知つてるだけのことは、すつかりお話ししますわ。ですから、わたしのところへ參りませう。こんなところぢやとても煩くて、何んのお話も出來ないのですもの。わたしの家に參りませう。」

「え。」彌生は素直に頷いて、涙で濡れた頬をハンカチーフで拭つたが、「わたし、どこへでも參りますわ。純子さん、慍らないで、堪忍して下さいね。」

「あら、何うなすつたの。何故急にそんなことをおつしやるの。」

「何んでもないのよ。」彌生は涙に濡れた眼を、悲しげにつと微笑んだが、「わたし悪かつたわね。わたしのことをそんなに思つて居て下さるあなたにまで、今まで居どころを隱したりなんかして、ほんとに悪かつたわ。」

「またそんなことをおつしやるのね。それはもう先刻濟んだことぢやありませんか。」

「でも、わたし悪かつたと思ふものですから……。何んだか氣が濟まないの。」

「何時までも、氣になさるものぢやありませんわ。」

「ね、純子さん。二人はお友だちですわね。」

「えゝ、えゝ！　おつしやるまでもなく、ほんとうに親しいお友だちなんですわ。」

「力になつて頂戴。わたしほんとうに不幸なのよ。わたし苦しいのよ。」

「何うして、そんなことをおつしやるの。」

「純子さん。女になど生れて來るものぢやないわね。男つて何んて我がまゝな、殘酷な、恥知らずなものでせう。そして女は何んて弱い、何んて情けないものでせう。男の泥足に踏み躙られ、打ちのめされても、默つて忍ばなくちやならないのが、女の哀れな身の上なのね。一體、そんなことつてあるものでせうか。男の我がまゝと、暴慢との下積になつて、傷つけられ、辱められながら、それでも未だ馴らされた犬のやうに、おとなしい家畜のやうに、男の踵に服從の接吻をしなければならないのが、女の運命なのでせうか。それが神樣から與へられた、女の掟なのでせうか。世の中の男といふ男は、女に取つて恐ろしい悪魔ですわ。鬼ですわ。わたし、男と女のこの道理に合はない掟に服從することが出來ません。男の暴慢と無慈悲とを許すことが出來ません。」

「彌生さん。何うぞ氣を鎭めて下さい。」と純子は、はら〳〵して懇願した。

「まあ、わたし恥しい。」

彌生は急に氣がついたやうに、ぱつと赧くなつて、打つて變つた弱々しい態度で、顏を伏せた。

何かの憤怒に堪へないもの丶如く、ぱつと燃え立つ火の如く、激するかと思へば、直ぐまた傷ついた小羊の如く、可憐な、痛々しい態度になる。勝氣で、性質のしつかりした彌生の、この取止めのない不思議な變化は、何に原因して居るのか、純子には能く分らなかつた。ただ彼女が恐ろしい打擊に打ち挫がれて居ることだけは分つた。心の平衡を失するまでに、身心共に苦しみ、惱み、もがいて居ることだけはわかつた。忍ぶべからざる屈辱の下に喘いで居ることだけは分つた。

「純子さん。わたし死ぬかも知れませんわ。」

不意に彌生は顏を擡げて、意味の分らない謎のやうな眼光を、ぢつと純子の顏のまともに注いだ。

「え！」純子は思はずぎよつとして、息を呑んだが、「何うしてそんなことをおつしやるの。」

「でも、」と、彌生は蒼ざめた顏に、につこり凄艶な微笑を浮べた。「人の命つて、何時何うなるか分らないのですもの。わたし近頃何んですか、不意にそんな氣持がするのよ。」

「あなたの氣のせゐだわ。」

「わたしの氣のせゐでせうか。」と彌生は美しい眉根に、暗い皺を刻んで、「わたし死にたくないわ。たとへ壽命が終つても、わたし今は死にたくないわ。わたしまだ生きて居なくちやならない！」

恐ろしきもの

一

林を越した向ふの廣場では、二組ばかり小學校の生徒らしい運動會があつた。紅白だんだらの幔幕をめぐらし、蜘蛛手に張りわたした赤や、青や、黄や、白の萬國旗は空に飜り、絶えず爽快な樂隊の音が響き、時々どつと歡呼の聲が上げられるのが、人の心をそゝるやうに聞えて來る。

周りには一ぱい見物の群衆がひしめいて居た。

純子は氣紛れに興奮するかと思ふと直ぐまた取り止めもなく打萎(うちしを)れる彌生を、慰めつ、劬りつ、關口臺町の自分の宿に歸る電車に乘つた。

「あなたのとこに伺ふより、わたしのとこに入らつしやらない？」

江戸川で電車を降りて、二三歩橋を渡りかけた時、彌生は突然立止まつて言ひ出した。

「あなたのとこに？」純子は彌生の眼を見返して訊いた、「お差支へなくて？」

「何うしてでせう？　何うしてそんなことをお訊きになるの。ちつとも差支へなぞある筈はないぢやありませんか。」

「でも……」と純子は口籠つたが、「折角ここまで入らしたんですもの、わたしのとこに寄つて下さいな。またこの次ぎにあなたのとこに伺はして頂くわ。それに、わたしのとこはもう直ぐそこなんですもの。ここまで入らした以上、わたしのとこに寄つて下さるのが順序ですわ。」

「それもさうね。」

彌生は素直に頷いて、また歩き出したので、純子はほつと安心した。彼女は彌生の現在の生活狀態がはつきり分らないので、それを知るまでは、うつかり彌生のところを訪ねられないやうな氣がした。若し彌生が現在志田と一緒に暮して居るとすれば、彼女のところを訪ねると、何うしても志田と顏を合さなければならない。その場合自分は如何なる態度を取るべきであるか。それは純子の今まで幾度となく、夜に日に思ひ煩(わづら)ひ、考へ詰めて來たところであるにもかゝはらず、未だはつきりした覺悟が出來て居なかつた。

曾て雪の夜、志田にあのやうなことをされたその翌日、彼を訪ね、彼に向つて言つた、純子の決心は

今もなほ變りはないけれども、純子は自分の決心のために、彌生を傷つけることを恐れた。彌生に打擊を與へることを、出來るだけ避けたいと思つた。志田に對して寸毫も假借するところはないけれども、小さい時から親しい交りをつゞけて、今もなほ淪らない友情を有つて居る彌生の心を、自分のために痛めさせたくないと思つた。それには兎も角、志田に對する自分の決心を、豫め彌生に打ち明け、自分の不思議な立場を明かにして置く必要があつた。

そのために純子は、志田の跡を追ふと共に、彌生の跡を追うて、東京に出て來たのである。彌生の居どころさへ分つたら、彌生に會ふことさへ出來たなら、一切を打ち明けて、彼女の了解を求めよう。さう思つて純子は、彌生の行方を搜索して居たのである。

會ふは會つても、まだ彌生の現在の生活狀態を知ることも出來なければ、事實を打ち明け、自分の決心を話しもしないうちから、早計に彌生のところを訪ねて、若し志田に會ふやうなことがあれば、自分がひどく困難な立場に立たなければならない。そのことを純子は恐れたのである。が、彌生は好い具合に、自分のところに誘ふことを諦めたので、純子はやつと安心した。

江戸川には、濁つた水が流れて居た。下流の方で、子供が棹を操つて、舟遊びして居た。秋の深いことを思はせるやうな江戸川公園を左に見て、半町ばかり行くと、直ぐまた左に曲つた。草花屋の店先には、秋海棠だの、芙蓉だの、秋の七草だのゝ鉢植が並べられてあつた。

だら〳〵の坂を上つて行くと、左手の方に早稻田から、天神町や、矢來や、牛込の町々が一目に見晴らされた。が、それも直ぐどこかの邸の高い塀に遮られて了つた。

「ここなのよ。」

通りから右に細い露地を入つて行くと、純子は斯う言つて彌生を振返つた。彼女は先に立つて格子戸を開けた。

二

小じんまりした家で、緣側を鍵の手に廻つた、離室のやうな部屋を一間純子は借りて居た。南に向いた庭は日當り好く、あるとしも覺えない、ささやかな秋の風が、前栽の萩や薄に渡つて、古びた建仁寺垣には、枯れ〳〵になつた朝顏の蔓が卷きついて居た。北向の櫺子窓の下には、小さな机を据ゑて、書棚の上の一輪挿には、桔梗の花が挿してあつた。蔽布をかけたミシンが据ゑてあつたり、床の間にはバイオリンが立てかけてあつたりした。すべてが氣持好く整つた、女學生のささやかな部屋の感じを現はして居た。

「まあ、好いのね。」

彌生は勸められた座蒲團に坐つて、四邊を見廻しながら心から言つた。彼女は東京に出てから、長いこと寄宿舍の生活をして、卒業前の半年ばかりを、ミス某の心安い或る家庭に寄食したことがあつた。その時の丁度こんな風に落着いた自分の生活を思ひ出して、つく〴〵懷しい氣持がした。その時分と今までは未だ一年の月日が經つか經たないのに、自分の境遇、自分の運命は、何んといふ變化であらうと思つた。

「わたし不精でせう。それに不器用なもんですから、取り散らかしたまゝ、ちつともかまはないのよ。」純子は寛いで、自分も座蒲團を敷いた。「あなた、羽織をお脱りになつちや如何？」

「好いのよ。」

彌生は部屋を眺めたり、庭を眺めたりして居た。

そこへ、この家の主婦らしい五十年配の婦人が、茶盆に湯沸しを載せて、お茶の用意をして持つて來てくれた。小肥りに肥つた、品の惡くない婦人で、ぼつ〳〵白髮の混つた頭に小さな丸髷を載つけて居た。

「あら、小母様。恐れ入りますのね。わたし、頂きに出かけるところでしたのに。」

純子は恐縮さうに、茶盆や湯沸しを受取つた。

「いゝえ。何うせ暇なんですから。」主婦は愛想好く笑つたが、「入らつしやいまし。」と改まつて、彌生に挨拶した。

「お初めて……。」

彌生も固くなつて挨拶した。

「小母様。わたし、しよつちうお噂して居たでせう。北海道で、小さい時からお友だちの、廣岡彌生さん。」と、純子は紹介した。

「まあ、さやうですか。」と主婦は目立たぬやうに、彌生の顏や、息遣ひや、腹部の邊に、物慣れた眼遣ひをちらとくれて、「お噂はもう、純子さんからしよつちゆう伺つて居ましたの。わたしもね、御一緒に歸つて入らした時、ちらとお見かけして、この方が屹度廣岡さんぢやないか知らと、偶とそんな氣がしたんですよ。まあ、蟲が知らしたんですわね。」

「わたしのとこには、お客様つてちつともないから。」

純子は笑つて居た。

「御ゆつくりお話なさいまし。」

やがて、主婦は會釋して出て行つた。
「氣の好ささうな方ね。」
彌生は主婦の足音が聞えなくなると、小聲で言つた。
「そりやほんとうに親切な方なの。」純子も聲を低くして言つたが、「ね、久し振りでお日にかゝつたのですから、ゆつくりしていらつしやいね。そんなに行儀好く畏まつて居ないで、樂になさると好いわ。わたし行儀が惡くて、そりや坐ることが下手なの。直き足が痛くなるのよ。失禮するわ。」
年は同年の十八である。けれども彌生は今度東京に出てから、身體つきでも、ものごしでも、急に大人びて來た。以前に變らない女學生まる出しの純子から見ると、何んだか二つ三つも年上の姉樣に相對して居るやうな氣がするのであつた。彼女は甘えるやうに言つて、膝を崩した。
そこへ、格子戸の開くベルの音が聞え、玄關口で二言三言話す聲が聞えた。
「お客樣か知ら。」
純子は聽き耳を立てた。
「さうらしいのね。あなたのとこ？」と、彌生が訊いた。
「わたしのとこぢやないわ。わたしのとこには、滅多に來る人などないのよ。屹度この家のお客樣なのよ。」
さう言つてるところへ、先刻の主婦がまたやつて來た。
「純子さん。お客樣ですよ。」
「え、わたしのとこ？」純子は意外さうに眼を見張つて、「何誰でせう。」
「この前二度ばかりお見えになつた、青木さんつて方ですの。そら、愼一郎さんとかおつしやる……。」

三

突然訪ねて來たのが、青木愼一郎であると聞いた時、彌生はびつくりした。
「青木さんも東京に居らつしやるの？」と、彌生は純子に訊いた。
「え、わたしまだあなたにお話しなかつたけれど、あなたが東京に入らつしやると間もなく、やつぱり青木さんも出ていらしたの。」
「まあ、さうなの。」
彌生は意外さうに言つた。
「あなた、お會ひになつても差支へない？」

「さうね……」と、彌生は考へたが、「わたし、會ひたくもないし、會ふ必要もないんですけれど……。」

「でも、青木さんは、あなたの跡を追つかけて上京なすつたのよ。そして今まであなたの行方を、どんなに捜して居らしたでせう。そのことでわたしのところにも、二三度入らしたんですわ。」

「けども、わたくし今更あの人に會ひたくありません。青木さんにしたつて、わたしの跡をどんなに追つかけて見ても、しかたないことぢやありませんか。」

彌生は神經的に蒼ざめた顏をして、きつぱり言つた。

「彌生さん。わたくし、一口にさう言つて了ふものぢやないと思ふわ。それぢや、あんまりあの方の立場がお可哀相よ。」純子は心から同情するやうに言つた。「あの方が、もう直き卒業間近の學校をうつちやり、北海道に居らつしやりさへすれば、何不自由なく暮して居られる身の上を、東京に出て來て苦勞して居らつしやるのは、誰のためでせう。それは皆な、あなたを思つて居らつしやるせゐぢやありませんか。彌生さん。青木さんはあなたが嫌つて居らつしやるやうに、惡い方ぢやありませんわ。少くもあなたを思つて居らつしやる點では、純で、誠實な方ですわ。あんまり冷淡になさらない方が好くはないこと。」

純子はむきになつて忠告した。彼女のその調子には、人のためにそれを言つて居るといふよりも、どこか自分自身のために言つて居るやうな、一生懸命のところがあつた。

「わたし、會はない方が好いでせう。わたし會ひたくありません。」と彌生は强情に繰返した。「若しあなたが、青木さんをお通しになるなら、わたしこれで失禮しますわ。でなかつたら、何うぞ斷つて下さい。」

「如何致しませう。お待ちになつて居らつしやるんですよ。」

二人の問答を、聞かぬやうなふりをしながら聞いて居た主婦が、催促した。

「ちよつと待つて下さいね。」と、純子は言つて置いて、また彌生に向つて、「あなた、お歸りになつちや可けませんわ。今お歸りになつても、あなたが入らしたことが、青木さんに分らずには濟まないでせう。それが青木さんに分つた以上、わたし、あなたの居らつしやるところを、青木さんにお話しないわけには行かないでせう。ですから、かうなつた以上、あなたはもう逃げたり隱れたりなさらないで、立派にお會ひになつた方が好いわ。そして、青木さんの話もお聞きになつたり、あなたのおつしやりたいことも、おつしやつた方が好いわ。」

「何をわたしが、あの方に言はねばならぬことがあるでせう。わたし、青木さんから聞くこともないし、また言ふこともないの。」

彌生は冷然と言ひ放つた。純子は當惑した。

主婦は詳しい事情は分らないけれども、何んだか混み入つたわけがあるらしい二人の口振りに、立入つた口出しも出來ず、まごまごして居た。

「あなたがそれほどまでにおつしやるなら、わたし青木さんに能くわけをお話して、歸つて頂きますわ。」

「え、何うぞ。わたし會ひたくないんですから。」

彌生の言葉に、純子は主婦と一緒に玄關に出て行つた。彌生は硬張(こわば)つたやうな表情をして、固くなつた身體を、身動きもせず坐つて居た。

玄關の方では、何んだかごてごて話聲がして居る。彌生は聽き耳を立てたけれども、はつきり聞き取れなかつた。

四

彌生は、はつきり意味を聞き取れない、玄關の話聲に聽き耳立てゝ居るうちに、青木愼一郎が素直に歸つて行く道理がないことを感じて來た。自分が東京に出て間もなく、自分の跡を追うて上京したといふではないか。そして、今日まで自分の行方を尋ねて居たといふではないか。それが現に自分がここに居ることを知つた以上、どうして素直に歸つて行くやうなことがあらう。純子がわけを話してどんなに斷つたところで、無理にも上つて來るに違ひない。さうかといつて、自分の方から逃げ隱れるやうにこの場を避けることは、彼女の自尊心が許さなかつた。

「わたし、何も青木さんに顏を合されないやうな惡いことや、恥しいことをしたわけぢやない。何うしてわたしが、青木さんから逃げ隱れする必要があらう。會つてわたしを何うしようといふのか、會ふなら會ふでかまやしない。」

彌生はさう思つて、心を落着けた。青木愼一郎が家を捨て、學業も捨て、自分の跡を追つかけて居る以上、たとへこの場で會ふことを避けたとしても、何時か一度は會はなければならないであらう。彼女はさうも考へた。

「けれども……。」と彌生は瞬きし、恥しさうに顏を赧らめて心に思つた。「今のやうな境遇で、こんな身體で、あの方に會ふことは恥しい。青木さんの言つた通り、わたしが志田さんを愛することは決して幸福ぢやなかつたのだわ。長い月日を待つまでもなく、ほんの半年と經たない間にまざ〳〵と分つて來た。わたしは今のこの慘めさ、この不幸を初めから知らないのぢやなかつた。知り過ぎるほど知つて居ながら、あの場合何うしてもあゝならずには居られなかつたのだわ。さうすることがどんなに不幸であつて

も、運命の命ずるところに從はずには居られなかつたのだわ。不幸の豫覺に慴へながら、わたしは志田さんを愛さずには居られなかつた。見す〳〵分り切つた不幸の渦卷の中に、自分の身を躍り込まずには居られなかつた。わたしが今どんな不幸な身の上にならうと、慘めな思ひをしようと、それはわたしの覺悟の前なのだわ。今となつては、誰に慰められたくもない。誰に助けられたくもない。誰に訴へようとも、誰に涙を見せようとも思はない。自分の蒔いた種を、自分の手で刈るばかりだわ。わたしはどんな目に遭つても、どんな思ひをしても、默つて忍んで居る。泣く時には自分一人で泣き、苦しむ時には自分一人で苦しんで居る。それで好いのだわね。今更青木さんなぞに會つて、このあさましい姿を見られたくない。わたしの身の上に、憐みの眼を向けられたくない。それ見たことかと嘲られたくない。」

持つて生れた勝氣で、强情な性質が頭を擡げる。彌生は避けるに避けられず、會ふには會ひたくなし、一人心の中で苦しみもがいた。果ては何うでもなれと、捨鉢な心持になつて居た。

「あら青木さん。入らしちや可けませんわ。わたしがお願ひするんですから、何うぞ今日はお歸りなすつて下さい。」

急に玄關の方が騷々しくなつて、純子の押し止める聲が聞える。

「あなたに迷惑かけることは、僕實に濟まないと思ひます。けれども純子さん、何うぞ許して下さい。僕は何うしても會はなければならないのです。こゝに居ることが分つて居ながら、見す〳〵歸ることは出來ません。何うぞ會はして下さい。」

苛らだゝしい愼一郎の聲が聞える。

「あら、あら、そつちに行らしちや可けませんわ。それぢやほんとうにわたしが困りますわ。」

「うつちやつて置いて下さい。僕は彌生さんに會ふためばかりに、この半ケ年を、どんなに辛い思をし、どんなに苦しんで東京中をうろつき廻つたでせう。そして、今やつと會ふ時が來たのです。」

留めようとする。行かうとする。叫んだり、喚いたり、どたばたする騷々しい物音が、だん〳〵離室に近づいて來た。

彌生は最早冷然として、石の如く、顏の筋肉一筋微動だもせず、睫毛一筋動きもしなかつた。彼女は曾て志田が、自分を訪ねて來た時、青木愼一郎が玄關から追ひ返した時のことを思ひ浮べて居た。

五

「彌生さん。たうとうお會ひする時が來ましたね。」

愼一郎は押留めようとする純子の手を拂ひ退けて、行きなり離室座敷に跳り込んだ。彼はひどく興奮

して、色白で、薄手な皮膚をした、女のやうにきれいな顏は、醜くひきつり、眼は血走つて居た。

石の如く固く冷やかな彌生の身體は、依然として微動だもしなかつた。彼女はわづかに首を動かした。冷たく傲慢な眼が、ちらと動いたと思ふと、興奮した愼一郎の顏を仰いだが、直ぐそらされて了つた。

「靑木さん。あなたはわたしが留めるのも聞かずに、無理に上つて入らして了つて……わたし、ほんとうに困つて了ひますわ。」

純子は何うしたら好いか分らなかつた。彼女ははら〳〵するばかりであつた。

「純子さん。御迷惑かけて、あなたには濟みません。僕は、話が分りさへすれば、何も亂暴するわけぢやないのです。話をする間だけ、あなたの部屋を拜借さして下さい。それが可けなければ、彌生さんを連れて、あなたの部屋から出て行くばかりです。」

「わたしの部屋で話をなさることなど、わたしちつともかまやしません。わたしの言つてることは、そのことぢやないの。」

「分つて居ます。」愼一郎はやつと氣を鎭めて、穩かに言つた。「あなたは彌生さんと約束をしたのでせう。僕を座敷に上げないやうに、僕を彌生さんに會はせないやうに、玄關から追ひ返して了ふやうに、彌生さんから頼まれたのでせう。けれども僕が無理に上つて來た以上、しかたないぢやありませんか。それはあなたの責任ぢやなくて、僕の責任なのです。僕を許して下さい。」

愼一郎は、何んだか泣き出しさうな顏になつて來た。

純子は强ひて何うすることも出來なかつた。彼女の心持では、固より愼一郎を責めるつもりは少しもなかつた。ただ彌生から、會ひたくないから歸らしてくれと言はれたものを、愼一郎が無理に上つて來たので、彌生に對して自分が濟まない立場に立たなければならないことが、心苦しかつたのである。

「彌生さん。あなたから折角あゝ言はれたんですけれども……。」純子は氣の毒さうに辯解した。「靑木さんが、わたしの言ふことを聞いて下さらないものですから、こんなことになつてしまつたのよ。わたしあなたに惡いわ。堪忍して下さいね。」と、輕く頭まで下げた。

「まあ、純子さん。そんなに改まつて……。」彌生は反つて恐縮した。「わたし、もう好いのですわ。何うだつて好いのですわ。」

彼女のその調子には、どこか捨鉢な、何うにでもなれといふやうなところがあつた。

「彌生さん。たうとう會ふ時が來たんですね。」愼一郎は純子の勸める座蒲團を敷いて、何時もの物靜かな、しかし皮肉な鋭さを包んだ調子で言つた。「春の暴風雨の日、あなたが居なくなつた後の騷ぎを、あなたは知らないでせう。それとも、もう純子さんから聞きましたかね。」

「いゝえ、わたしそのことはまだ話しませんでしたの。」と純子は彌生がまだ何も答へないうちに、自分で言つた。「先刻そのことをお話しゝようとしたのですけれども、彌生さんが聞きたくないとおつしやるものですから、それぎり未だお話しゝなかつたの。」

「聞きたくないつて！」

愼一郎の詰るやうな眼が、屹と彌生の顏の上に、まともに注がれた。

「え、わたし、家のことを聞きたくありません。聞いたところで、何うにもならないのですわ。」

彌生はやつぱり自棄的な調子で言つた。

「あれほどあなたを愛し、あなたに背かれ、あなたに裏切られたために、死ぬほど苦しんでるをぢさんやをばさんは、あなたに取つて今はもう何んでもない人間だと言ふんですか。恩を負うた、あなたを唯一の生命に愛して居る二人の老人の生き死など、あなたには何んの問題でもないと言ふのですか！」

愼一郎の言葉は鋭かつた。

六

「青木さん。あなたはわたしを責めようとなさるの！」

彌生は、愼一郎の非難に屈しなかつた。彼女は蒼ざめた、神經的に震へる顏を屹と擡げ、きらきら輝く二つの眼を、眞直ぐに愼一郎の顏の上に注いだ。

「僕にはあなたを責めて好いか、怨んで好いか、それとも悲んで好いか分りません。あなたの行爲は責める以上のものではないでせうか。怨む以上、悲しむ以上のものではないでせうか。何んといふ忘恩、何んといふ背德、責められてあなたが若し抗辯し得る理由があるなら、僕その理由を聞きたいものです。」

愼一郎も負けては居なかつた。彼は彼女に向つて詰め寄つた。

「わたし、自分の過つたところは人に責められる前に、自分で責めて居ます。自分で苦しんで居ます。わたしが忘恩の人間であるか、背德の人間であるか、あなたには分りません。わたしの心は誰にも分りません。」

「分つて居ます。あなたがどんな人間だかといふことは、あなたの行爲が十分語つて居ます。あなたは恩ある祖父母を裏切り、許嫁の夫に背き、家を捨て、名譽を捨てゝ墮落したぢやありませんか。」

「墮落ちをね。」

彌生は脣を震はした。

「墮落ちと言はれるのが、あなたはそんなに殘念なのですか。そんなに口惜しいのですか。」愼一郎は益

益意地悪く突込んだ。「恩ある祖父母を捨て、人の道を無視して、男と手を取つて逃げるのは駈落ちぢやありませんか。日本の言葉では、あなたのやうな遣り口のことを駈落ちといふのです。」

「何んとでもおつしやい。」と彌生は震へる脣の内側を、前齒の先で屹と嚙み締めたが、直ぐつゞけた。

「あなたは、わたしを憎んで居らつしやるのです。わたしを傷つけ、わたしを辱め、わたしを怒らせれば、それであなたの氣が濟むのでせう。何うぞあなたの御自由に、何んとでもおつしやい。」

「自分を裏切つた者の前に跪く者が、世の中にあるでせうか？　自分に不幸を與へ、自分を苦しめた者の前に感謝の頭を垂れる者があるでせうか？」

「まあ、お二人共それぢや可けませんわ。彌生さんも青木さんも、何うしてさうなんでせう。」だん〳〵險惡になつて行く二人の態度に、純子ははら〳〵して居たが、たうとう堪らなくなつて、口を挾んだ。

「青木さんも、さういふ怨みごとをいふために、彌生さんの行方を捜して居らしたのぢやないのでせう。彌生さんに突つかゝつて、彌生さんを怒らせ、苦しめるのが、あなたの目的ぢやなかつたのでせう。彌生さんも、青木さんの今の態度や言葉は兎も角、あなたに對する青木さんの心持を正當に理解なされば、そんなに何もお二人で角目立つ必要はないと思ひますわ。お二人共間違つて居ます。えゝ、えゝ、お二人共それぢや可けません！　何うぞ打融けて話をなすつて頂戴。どんな見ず知らずの他人同志だつて、一つ部屋に落合つた時は、もつと親しいものだと思ひますわ。二度か三度か會つた顏見知りの間でも、久し振りで會へば、もつと喜び合ひ、樂しみ合ふものだと思ひますわ。小さい時から親しかつた三人が、半年振りにかうして會ふたのぢやありませんか。行方の分らなかつた彌生さんと、今、またかうして會ふことが出來たのぢやありませんか。それだのにわたしたちは、何故こんな風に氣まづい思ひをしなくちやならないのでせう。わたしたちは敵同士ではない筈ですわね。これぢや敵同士よりも、もつと慘めぢやありませんか。」

純子の圓い顏は、興奮のために眞赤になつた。彼女の眼は涙含み、その言葉には眞情が籠つた。會はないうちから敵意を持ち、會ふ早々からお互に傷つけ合ひ、尖り合つて居た二人も、さすがに胸を打たれた。愼一郎も自分を恥ぢた。彌生も自分を恥ぢた。二人共恥ぢに得上げぬ顏を伏せた。

「僕、惡かつたです。」

愼一郎はやがて顏を擡げ、彌生にともなく、純子にともなく言つた。

七

秋の日は暮やすく、まだ五時過ぎたばかりで、もう、とつぷり暗くなつた。

「わたし、失禮しますわ。」

氣まづい、息詰まるやうな沈默がつゞいた後、彌生はさう言つて起ち上つた。

純子が口を利いて、たゞならぬ雲行になつた二人の間を調停したやうなものゝ、一旦齟齬した二人の感情が、急には打融けられるわけもなかつた。當り觸りのないやうな話が二言三言交されたかと思ふと、直ぐ沈默に陷つた。座は白けがちであつた。純子は何うかして二人の間に、以前の親しみを復活させようと努めて見たが、それも無効であつた。そして彌生は遂に歸ると言つて座を立つたのである。

「何故そんなことをおつしやるの。」と、純子は咎めるやうに言つた。「何もおかまひは出來ないのですけれど、三人かうして會つたのですから、夕御飯を一緒に濟ましたいと思つて、をばさんに賴んだのよ。もう直き何か來るでせうから、待つて下さいな。」

「わたし、そんなにしても居られないの。」と、彌生は止まる氣色も見えなかつた。「御親切は有難いのですけれど、またのことにお預けして、わたし、今日はこれで失禮しますわ。」

「何うしてもお歸りにならなければならないの。」

純子は失望さうに言つた。

「え、だつて、夕方までには歸るつもりにして出かけたのが、こんなに遲くなつてしまつたんですもの。

もう歸らなくちやならないのよ。」

「まあ、殘念ね。」純子は心から殘念さうに呟いたが、やがて思ひ諦らめたやうに、「ぢや、しかたがないのね。これからは、ちよい〳〵お目にかゝりませうね。わたしもあなたのところへお邪魔に伺ひますから、あなたも何うぞ入らして頂戴ね。」

「えゝ、えゝ。また伺つてよ」

「ぢや、青木さん。ちよつと失禮して、わたし彌生さんをお送りして來ますから。」と、純子は會釋して起つた。

「僕も失敬します。」

默つて、二人の會話に耳を傾けて居た愼一郎も、突然起ち上つた。

「まあ、あなたもお歸りになるの。」

純子はびつくりして眼を見張つた。そして彼女は彌生の心持を憚るかのやうに、そつと彼女の顏を眺めた。

彌生は冷然と、無關心な表情をして居た。

「僕、電車の邊(へん)まで彌生さんを送りませう。」と愼一郎は言つた。

「それもさうね。」と純子は思慮深さうにちよつと首を傾げたが、またしても彌生の顏色を窺つて、「晉羽の通りに出るまでは淋しい道ですから、さうして頂くと安心だわね。」

「青木さん。わたしを送つて下さるなら澤山よ。淋しい通りだつて、わたし平氣ですから。」と、彌生は云つた。

「何うせ僕もあつちに歸るんですから、御迷惑かも知れないが、一緒に行きませう。」

「さう、そんならあなたの御自由に。」

彌生は、さつさと先に立つた。愼一郎は彼女からどんなに言はれても、どんな態度を取られても、彼女と一緒に行きさへすれば、自分はそれで好いのだといふやうに、平氣で彌生の後につゞいた。純子も二人を見送るために、玄關まで出て行つた。

「ほんとにお世話樣になりましたわね。」と、土間に降りてから彌生が言つた。

「またお目にかゝりませうね。」

純子は上り框で、また繰返した。

彌生と愼一郎の二人が出て行くと、行き違ひにその家の主婦が、勝手口から歸つて來た。

「おや、お客樣はもうお歸りなすつたの。」

主婦は茶の間に入つて來た純子と、顏を見合せて言つた。

「え、お二人共お歸りになつたの。」

「まあ、もう直き誂へたものが來るとこでしたのに。」主婦は殘念さうに言つたが、「あの方、まだお孃樣なんですか、それとももう奥樣なの。」と、好奇心らしく訊いた。

「さあ……。」

純子は何う答へて好いか分らないので、たゞ極まり惡さうに笑つた。

「身重なのね。あれは何うしても五月以上のお腹だわ。」

「え、彌生さん姙娠して居らつしやるの。」と、純子はさすがに顏を熱らして息を呑んだ。「をばさんには、それがお分りになつて？」

「分らなくつてさ、あなた。」

主婦はにや〳〵笑つた。

八

純子のところを辭した二人は、狹い露地から通りに出た。露地も暗かつた。通りも暗かつた。その暗

いだら〳〵の下り道を、二人は無言のまゝ歩いた。

彌生は口を利くのも懶いやうな氣がした。誰からも離れ、誰にも顏を見られることなく、たゞ自分一人になりたいと思つた。泣かうと笑はうと、誰に慰められることもなく、誰に言葉をかけられることもなく、勝手に泣いたり笑つたり出來る、自由の身になりたいと思つた。口は利かなくても、自分の傍に、青木愼一郎が居ることが邪魔になつた。自分の行く方に青木愼一郎も歩いて行くことが邪魔になつた。早く誰からも遁れて、自分一人の身になりたいと思つた。

青木愼一郎は、彌生とは全く正反對であつた。彼は一寸でも一刻でも長く彌生と一緒に居たいと思つた。彌生と別れて、自分一人にならなければならぬのが、辛かつた。彼女に向つて言はねばならぬ多くのことが、彼の胸一ぱいに渦卷いて居た。會つたらかうも言はう、あゝも言はうと思つて居たことを、まだ一言として言つては居ないのである。出來るものならこの機會に、洗ひ浚ひ自分の心持を彌生に向つて打ちまけたいと思つた。そして彌生の心を自分のものに取戻したい。若し取戻すことが出來なければ、自分も何んとか決心しなければならぬ。

愼一郎は、ひたすら言葉を切出す機會を捉へようとしてねらつた。けれども彌生の冷淡な態度は、何うしても彼にそれを切出す親しみを與へなかつた。恰も彼女は、彼が何を言はうとして居るかを十分見

透し、それを言はせないために、故意と冷淡に構へて居るのではないかと思はれた。

だら〳〵の坂はつきて、賑やかな音羽の通りは次第に近くなる。音羽の通りに出れば、江戸川電車の停留場までは直きである。そこまで行けば、もう話をする暇はない。彼女は電車に乘つてしまふであらう。さうすれば半年苦心をして、今やうやく會ふことの出來た彼女に、言はうと思ふことを何一つ言はないで別れて了はねばならないのである。

次第に坂が盡き、明るく街燈の輝く廣い通りに、大勢の人影が蠢く賑かな音羽通りが、間近に迫つて來るに從つて、愼一郎の心はだん〳〵焦つて來た。彌生は彼の焦慮に對して全然無關心の如く、或はそれを十分知つて居ながら、故意と意地惡く構へて居るものゝ如く、彼が口を利き出す餘地がないまでに、冷然として居る。

愼一郎は時々切なさうに溜息を吐いて、彌生の横顏をそつと覗き込んだ。が、彼女の顏は石で刻んだものゝ如く冷やかで、微動だもしない。愼一郎の心は益々焦つて來る。彼の脊筋は冷たい汗に濕り、彼の脣からは、幾度となく絶望的な溜息が、絞るやうに洩らされた。

二人はたうとう音羽通りに出た。兩側の店々には電氣の光が明るく輝いた。山吹町の通りには、道の兩側に夜店が並んで、電氣や、アセチリン瓦斯や、カンテラの光が、濁つた夜の空氣を血のやうに赤く

染めた。散歩する者、歸りを急ぐ者、夜店をひやかすもの、燈光の流るゝ巷を右に左に行き交ふ人々の姿で、廣い大通りもぎつちり埋まつた。次第に小高くなつて行く矢來の交番の邊りまで、人々の頭が蟲の如く蠢くのがつゞいた。

「彌生さん、ちよつと休んで行きませう。」

橋手前の江戸川公園の入口まで來た時、愼一郎は聲を硬張らせて言つた。

「わたし、歸らなければなりません。」

彌生の言葉は冷やかであつた。

「僕は、あなたに話さなければならないことを、まだ一言も言つて居ないのです。」

「あなたから何を聞く必要があるでせう。あなたが、わたしにおつしやりたいのは、どんなことか知らないけれども、何を伺つたつて、今となつちや無駄ですわ。」

「僕、このまゝぢや別れませんよ。あなたが居なくなつてから半年の間といふもの、苦勞に苦勞を重ねて、やつと會つたのですもの。言ふだけのことを言はないうちは、逃げようたつて逃しはしません。あなただつて、二人の以前の間柄を思へば、僕が話すことを聞いて下さるぐらゐの義務は、十分ある筈だと信じます。」

さう言ふ愼一郎の態度は、だん〳〵強硬になつて來た。

九

愼一郎は、厭がる彌生を無理やりに江戸川公園に連れ込んだ。秋のさびれを思はせるやうな乾いた木の葉が、時々撫で來る微風にかさかさと忙しい音を立てる。木の間にはそこ〳〵に電燈が點り、薄暗い光りは、梢や、葉や、地上や、あちこちに据ゑられたベンチの上にも流れた。片側は高い崖になつて、片側には江戸川が流れて居る。

彌生は初めてその公園に足踏みしたのであるが、どこまで行つても果しがないやうに奥深く感じられた。暗い中から瀧でも落ちるやうな水の音が、どう〳〵と聞えて、恰も自然林の中に踏み込んだやうに、大木は鬱蒼と茂り、四邊はだん〳〵暗くなつて來た。散策して居る人々の姿が、時々ぽつかり明るみに現はれたかと思ふと、直ぐ暗がりに消えた。偶にはベンチに寄りかゝつて居る者もあつたが、人影は極く疎らであつた。

「どこまで行くの。」

彌生は何んだか薄氣味惡くなつて、立止まつた。

「ぢや、この邊で休みませうか。」と、愼一郎も立止まつた。
「あなたが、わたしに話したいといふのは、どんなことでせう。早くそれをおつしやつて下さい。」
「そんなに急がないでも、腰をかけてゆつくり話さうぢやありませんか。」
愼一郎はにやりと笑つて、傍へのベンチに自分から腰を下ろした。薄暗い電氣の光の中に微笑んだ彼の顏は、何んだか彌生には氣味惡く見えた。今日久し振りに會つた時から氣のついたことであるが、以前とは見違へるやうに荒んで來て居るらしいことが、彼の顏で分つた。
「わたし、歸りを急いでるんですから……。」
彌生はしかたなし、愼一郎と同じベンチに、しかし彼の身體とは身を離して、腰を下ろした。
「彌生さん。あなた今でも志田君と一緒なんですか、無論一緒なんでせう。」
愼一郎は自分の方から、彌生の傍近く身體をにじり寄せた。彼の眼は怪しく輝き、彼の聲は、幾らか震へを帶びて居た。
「何んのためにそんなことをお訊きになるの。わたし誰と一緒に暮して居ようと、あなたに何のかゝはりがあるでせう。そんな質問に御返事する必要はないと思ひますわ。」
彌生は、愼一郎のぶしつけな問ひに、ひどく自分が傷つけられたやうに、鋭い言葉で答へた。

「さう言へば、まあ、さうですが……」と、愼一郎は强ひて聞かうともせず、素直に頷いた。「あなたが誰と暮して居ようと、あなたの流儀で言へば、それはあなたの自由なんですからね。また僕に取つても、それは肝心のことぢやない。何うでも好いことなんです。一番肝要なことはもつと他のことなんです。彌生さん。僕は單刀直入に言ひますがね。今までのことは今までのことゝして、あなた、僕と一緒に國に歸つてくれませんか。」
「國つていふと、北海道のことなんですね。」
「さうです。僕と一緒に北海道に歸つてくれませんか。」
「わたしに、おぢいさんやおばあさんのところに歸らないかとおつしやるのですね。」
「あなたが、僕と一緒におとなしく歸つて下さりさへすれば、今までのことは一切水に流して了ひます。あなたの罪も過ちも總べてを容します。何事もなかつた以前の純眞無垢なあなたとして、僕は一生の愛をあなたの前に捧げて行くことを誓ひます。彌生さん、何うぞ僕と一緒に歸つてくれませんか。」
「青木さん、あなたは、わたしに出來ないことを望んで居らつしやるのね。二度とそんなつまらないことを、おつしやらないで下さい。」
彌生は、自分が辱められて居ることを感じた。彼女は氣色を損じて、きつぱり斷つた。

「若しあなたが、僕の言葉に從つて下さるなら、僕はあなたの前に跪くことを、意としません。彌生さん、何うぞ僕と一緒に歸つて下さい。僕はこの通りお願します。」

愼一郎はほんとうに彌生の前に跪いた。彼はベンチの上に兩手を突いて、低く〳〵頭を下げた。

「止して下さい、止して下さい、止して下さい！」

彌生の神經的に震へる疳高な聲が、暗く、ひつそりとした四邊に鋭く響いた。

十

「彌生さん、あなたは、僕がこれほど言つても、まだ僕の心持を理解してくれないのですか。僕がこれほど賴んでも、僕の言ふことを聞いてくれないんですか。」

愼一郎も、彌生の態度にむつと顏色を變へた。が、彼は直ぐ思ひ返して自分を制した。そして燃え上る激情を抑へ、顫へる聲で、出來るだけ穩かに口を利いた。

「あなたは、わたしに出來ないことを望んで居らつしやるのですわ。」と、彌生は繰返した。「たとへあなたが、どんなにおつしやつても、今更あなたと一緒に歸るくらゐでしたら、わたしあの時家を捨てはしなかつたでせう。若しわたしが一度捨てた自分の家に歸るやうなことがあれば、それはわたしが生きるか死ぬかの場合ですわ。いえ、いえ！　わたしはたとへどんな生き死にの場合でも、二度とあの家に歸る面はありません。わたしがあの家の閾を跨ぐ時は、わたしの心から、誇りも恥もなくなつた時です。誇りを捨て、恥を捨てゝも、なほ生きなければならない場合だけですわ。ですが、わたしにそんな時が來ようとは思へません。生きるために誇りも恥も捨てゝ、一旦捨てた家に歸らなければならないやうな場合には、わたしは一そ潔く死ぬでせう。えゝ、えゝ！　わたしが一番輕蔑することは、わたしが一番憎むことは、男でも女でも、誇りと恥とを捨てることですわ。それは人間が獸になつた時です。蟲けらになつた時です。どんな場合でも人間でないといふことは、それは人間の恥辱ばかりではなく、恐ろしいことですわ。わたしはさう思ひます。わたしはたとへどんなことがあつても、二度とあの家の敷居を跨ぐことは、恐らくないでせう。」

「あなたに歸つて貰ふために、あなたの心を僕に引戻すために、男の恥も誇りも捨てゝ、あなたの前に跪く僕は、あなたの眼から見れば獸なんですね。蟲けらなんですね。だが、何う言はれてもしかたありません。踏まれても蹴られても、僕はあなたの前に頭を上げることは出來ない。愛するといふことは恐ろしい弱點です。」と愼一郎は呻くやうに言つた。

「青木さん、あなたのおつしやりたいことは、それだけなんですね？　けれども、どんなにおつしやつ

ても、それはわたしには不可能なことですわ。わたし、もうこれで失禮します。」
「ちよつと待つて下さい。」と、愼一郎は慌てゝ叫んだ。「彌生さん。僕も男の意地としても、自分の要求をこんな工合に見事に拒絶されて、そのまゝのめ〳〵とお別れすることは出來ないのです。」
「ぢや、あなたは何うしようとおつしやるの。」
「あなたを得るために、家も學業も棄てゝ、あなたの跡を追うて出て來た僕です。恥も名譽も捨てゝ出て來た僕です。あなたのおつしやる通り、恥や名譽のあるうちは人間です。恥や名譽のなくなつたものは獸です。蟲けらです。男の一念といふものが、どんなに恐ろしいものか、あなたも今こそ思ひ知らなければならない時が來たのです。」
青木愼一郎は突然立ち上つた。彼はひきつるやうに醜く歪んだ顏を彌生に向つて眞直ぐに突き出し、素早く片方の手を延べると、彌生の左の手頸をむんづと掴んだ。
「何をなさるの！」
彌生の慴えたやうな聲が叫んだ。彼女は掴まれた手頸を、一生懸命に振り放さうとした。が、華奢なやうでも男の力に掴まれた手首を、容易に振り放すことは出來なかつた。愼一郎の撓かな一本々々の指が、柔かな鞭の如く彼女の手首に喰ひ込んだ

「彌生さん。あなたのために、前途の希望も光明も抛つた僕です。無論あなたのために命を捨てることなど、ちつども惜しいとは思ひません。」
愼一郎は、粘つこい絡みつくやうな調子で、一句々々に力を籠めて言つた。彼はぢり〳〵と彌生の身體に迫つた。
彌生は何かただならぬ豫感に慴えて、彼が一歩近づけば、一歩だけ身を退いた。彼女は、何うかしてこの場を遁れたいと思つた。誰か來てくれゝば好いと思つた。遁れるには、愼一郎のために手頸をしつかと掴まれて居る。彼の身體は彼女の身體に、磁力に吸ひつく鐵の如く、次第にぢり〳〵と密着して來る。あひにく傍には人の姿も見えなかつた。
「あなたの心が分つた以上は、僕にはかうするより外に、生きる道はないのです。」
愼一郎の冷たい、嚴かな聲が、彌生の耳を打つた。冷やりと輝く白いものが、彌生の鼻面にきらめいた。彌生は豫期したものをいよいよ眼の前に見たと思つた刹那、熱い火の玉のやうなものが、自分の乳のあたりを打つたことを感じた。彼女は自分は殺されるのだと思つた。そしてその瞬間、分別も計畫もなく、たゞ本能的に身を翻へした。たゞならぬ叫び聲を上げた我れと我が聲が、異樣に我が耳に響いた。彼女はそれぎり何も知らなかつた。

運命の家

一

彌生は、丁度深い眠りから自然に眼が覺めるやうな工合に、偶と氣がついた。眼を開いて見ると、見知らぬ廣い座敷に寢て居るのであつた。頭の上に垂れ下つた電燈の光は、眞晝の如く眩しく輝いて居る。部屋の中を見まはすと、床の間の周りでも、欄間でも、襖でも、室内の器具調度が皆な立派なものばかりである。彼女は、ふか〳〵した、厚くて柔かな蒲團の上に、自分の身體が横はつて居ることを知つた。輕くて溫かな掛蒲團に、身體が包まつて居た。眞白なシイツ、枕を蔽ふた純白な布、何もかも、彼女にはちつとも見覺えのないものばかりであつた。

彌生は、ただならず、自分の身體が疲勞して居ることを感じた。手も足も脫けるやうに怠るく、身體の節々には鈍い痛みを感じて居る。胸のあたりが、重苦しく惱んだ。

「わたし、何うしたんだらう。わたし、どこに居るのだらう。」

彼女はそれを知らうとした。一度閉ぢた眼を、また薄目に開いて、再び部屋の中を見廻した。けれどもやつぱり何一つとして記憶にあるものはない。全く見知らぬ座敷であつた。彼女は仰臥したまゝ、首を捻つて、暫しの間部屋の有樣を眺めて居たが、電氣の光が眼に眩しいので、また懶く瞼を閉ぢてしまつた。

「何時の間に、何うして、こんなところに來たのだらう。一體こゝはどこなのだらう。」

瞼を閉ぢながら、彌生は考へて見た。考へても〳〵分らなかつた。

彼女は、若しや夢を見て居るのではないかと思つた。何を考へるのも、何を思ふのも、身心共にひどく疲れ切つて居るので、大儀であつたが、自分がかうして居ることが、夢であるのか、現實であるのか、それを確かめないうちは、何だか氣がゝりで、安心出來なかつた。夢とすれば、どこで、どんな場合にこのやうな夢を見て居るのか。現實とすれば自分は何時の間に、何うしてこんなところに連れて來られたのか。そして、こゝは一體どこなのであるか。

彌生は、自分は今まで眠つて居たのか、それとも死んで居たのか、兎も角意識を失ふ前までの記憶を喚び返さうと努めて見た。彼女は何んだか二年も三年もの長い間、自分が眠つて居たやうな氣がするの

であつた。そして、その眠らぬ以前にはどんなことがあつたか。

「さう……。わたし、上野公園で純子さんに會つたのね。」

彌生は、遠い〳〵昔のことを思ひ出すやうな工合に、やつと純子に呼びかけられた時のことを思ひ出した。それがひどく時の隔たつた、以前のことのやうな氣がするにもかゝはらず、彼女の疲れた、懶い顏には、その時の光景が、恰もきれいな活動寫眞の映畫の一場景を見るやうに、ぱつと鮮かに浮かんで來た。明るい秋の日射が漲つた、雜沓した公園内の光景や、パラソルを翳さないで、すぼめたまゝそれを手にした純子が、嬉しさうに、極り悪さうに微笑みながら、自分に近づいて來た姿や、行き交ふ自動車や、人力車や、公園の木立の梢にとまつて鳴いて居た鴉までも、まざ〳〵と彼女の眼に浮かんで見えて來た。

「さう。純子さんと會つて、そして……。」

彌生はつゞいて、二人が石の上に腰掛けて、暫しの間話し合つたことを思ひ出した。一緒に純子の宿に行つたことを思ひ出した。そこに青木愼一郎が訪ねて來て、氣まづい、息苦しい思ひをしたことを思ひ出した。自分が歸ると言つて起ち上つた時、愼一郎も一緒に歸ると言つて、つゞいて起ち上つたことを思ひ出した。江戸川公園の前まで來た時、彼が無理やりに自分を公園の中に連れ込んだことを思ひ出した。そして最後に自分の眼の前に閃いた、冷たく輝いた氷のやうな色をしたものを思ひ出した。自分の左の乳の下に熱い火の玉のやうなものを感じたことを思ひ出した。

「わたし、かうしちや居られない！」

夢のやうな、現のやうな頭の中に、記憶は記憶を追うて、そこまで來た時、彌生ははつと慴えたやうに身を顫はして、行きなり起き上らうとした。そして、身體を藻掻いた。が、その拍子に彼女は左の乳の下に、鋭い、刺すやうな痛みを感じたので、思はず顏を蹙め、低い呻き聲を洩らした。

その時廊下に面した障子が、すつと、靜かに開いた。

二

障子の滑る幽かな音を聞いて、彌生は誰かゞこの部屋に來たことを知つた。彼女は懶い身體を努力して、無理に首を捻ぢ向けた。總身純白な着物に包まれた一人の婦人が、すつと部屋の中に入つて來た。

「看護婦さんなのね。して見るとこゝは病院なのか知ら？」

彌生は突嗟にさう思つたが、直ぐ、病院にしては座敷があまりに立派過ぎると思ひ返した。どこかの屋敷であるにちがひないと思つた。

「お氣がつきまして？」

看護婦は、盆の上に藥瓶のやうなものを載せて、それを片手に捧げて居た。彼女は靜かに彌生の枕許に近づくと、優しく微笑んで訊いた。

「わたし何うしたんでせう。病氣なんでせうか。」

彌生は弱々しくにつと微笑んだが、何よりも早くそれを確かめたいと思つて、看護婦の顏を見上げるなり、氣急はしく問ひかけた。

「ちつとも御心配なさることはありませんわ。」看護婦はにこ〳〵しながら、彼女の枕許に坐つて、「御氣つていふほどぢやありませんわ。さあ、お藥を召上れ。」

「わたし、病氣でもないのに、何うして藥をのまなくちやならないの。」と、彌生は眼を大きく見張つて、不思議さうに看護婦の顏を仰いだ。

「興奮劑ですわ。」

「さう、興奮劑なの。」と、彌生は素直に頷いた。「どつちにしても、それを頂いた方が宜しいやうでしたら、わたし頂きますわ。」

「えゝ、えゝ、召上らなくちや可けませんわ。あなたは今大變疲勞して居らつしやるのよ。」

「わたしね、何んですか、身體がかつたるくてしようがないの。そして、まるでひどく打たれた後のやうに、方々痛いの。」と彌生は、小娘が甘える時のやうに口を利いた。

「直きお癒りになりますわ。」

「何んでもないのね？」

「え、何んでもないのですわ。」

看護婦は、丁度姉が妹に對するやうな優しさで、藥瓶から水藥を小さな猪口に注ぐと、親切に彌生に飲ましてくれた。彌生は、妹が姉の介抱を受けるやうな工合に飲ましてもらつた。

「わたし、何うしても分らないのよ。」と彌生は、やがてにつと微笑んで、また、看護婦の顏を仰いで問ひかけた。「わたし、何時の間に、何うしてこんなところに來たのでせう。こゝはどこなんでせう。」

「お分りにならなくたつて、御安心なすつて居らつしやい。ちつとも御心配なさることはありませんわ。」

「わたし、心配しちや居ませんけれど……。」と彌生は、看護婦の顏を仰いだ眼を、眩しさうに瞬きして、「わたしが何うしてこゝに來たのか、こゝはどこなのか、わたし、それを知つちや可けないのでせうか。あなたに伺つちや可けないのでせうか。」

「そんなこと、今お聞きにならない方が好うございますわ。今に直きお分りになりますわ。」

看護婦は、さう言つてたゞ笑つて居た。

彌生は自分が何んだか小さな子供になつたやうな氣がした。彼女は曾て自分を育てゝくれた老寡婦に、自分の兩親のことを訊いた時、そんなことは訊くものぢやない、大きくなつたら自然と分るのだと窘められたことを思ひ出した。廣岡家に引取られてから、廣岡一家が北海道に移轉する時、彼女は祖母に向つて、何うしてお引越しをするのかと訊いた時、祖母はそんなことを訊くんぢやないと叱つて、それから今に分ると言つた。

「やつぱり訊いちや可けないのだわ。やつぱり今に分るのだわ。」

彌生は老寡婦や祖母から窘められたことを思ひ出して、靜かに眼を閉ぢた。

「いろんなことを氣になさらないで、心を安らかにして居らつしやるのが宜しうございます。何しろ、あなたは不斷のお身體ではないのですからね。けれども直き御恢復なさいますわ。」

看護婦はさう言つて起ち上ると、また靜かに部屋を出て行つた。

不斷の身體でないといふ看護婦の言葉は、彌生の耳朶を雷霆の如く打つた。彼女は自分の胎内に身籠る小さき生命のことを思うて、切ない涙が瞼に滲んで來た。

二

彌生は、自分の居るのはどこであるか、何時の間に、何うしてこんなところに連れて來られたのか、それを確かめることの出來ない疑問のうちに、夜は明け、日が暮れ、また夜が明けした。氣がついてから三日ばかり過ぎたけれども、彼女はやつぱりどこに居るのか、誰がこんなに手厚い介抱をしてくれるのか、さつぱり分らなかつた。

醫者は朝夕二度づゝ見舞つてくれた。別に大して深い負傷ではないが、左の乳下を二寸ばかり斬られたのであつた。皮膚と肉とを傷つけたゞけで、骨にも内臓にも、少しも異狀はなかつた。傷口さへ癒着すれば、それで好かつた。醫者の慮れたところは外科の方ではなく、寧ろ彼女の平衡を失した神經であつた。殊に彼女は普通の身體ではない。たださへ婦人の姙娠期は、身體の安靜と、精神の平和を計らなければならないのに、それが突然恐ろしい事件にぶつかつたのである。そればかりでなく、彼女の境遇上、彼女の神經はひどく昂ぶつて居る。丁度護謨の紐を最極限度まで引伸ばしたやうなものである。今一本の指の力を加へたゞけで、その護謨紐は切れて了はなければならないと同じやうに、これ以上の刺戟を與へれば、彼女の精神狀態は何うなつてしまふか知れない。

醫者はそのことを慮れた。出來るだけ彼女の身心を安靜にさせることに努めた。物音でも、光線でも、出來るだけ強い刺戟を與へるやうなものは避けた。固より彼女の精神に激動を與へさうな話しは、絶對に彼女の耳に入れないやうにした。

好い工合に彌生は、精神の鎭靜を取返して來ると同時に、肉體の元氣をも恢復して來た。三日經ち、五日經ち、七日經つうちには、彌生の負傷は、全治とまでは行かないまでも、あらかた癒えた。後は時時の洗滌と、ガーゼの取替へぐらゐで、醫者の手もかゝらなかつた。一時變調を來して居た神經狀態も、だん〳〵平靜に歸つて來た。思考や辨別も、不斷の彼女と變らなくなつた。元氣も好くなつて、床の上に横たはつて居るばかりでなく、緣側ぐらゐまでは出かけて、庭を眺めるぐらゐにはなつて來た。

不思議なことには、彌生にはやつぱり自分がどこに居るのか、誰の世話になつて居るのか、何うしてこゝに連れて來られたのか、この家の主人は一體どんな人物なのか、さつぱり分らない。まるきり見當もつかない。彌生の方でも、與へられた座敷の緣側ぐらゐより外に出かけたことはないが、この家の主人は固より、家族らしい者は、誰一人彼女の眼にふれない。彌生の病室に入つて來るのは、決まつて一人の看護婦だけであつた。小間使らしい若い女が、ちよつと緣側に姿を見せることはあつても、座敷の中までは入らなかつた。その外回診の度に、醫者が入つて來るだけであつた。

この家の主人が、どんな職業でどんな身分で、その性格はどんな人であるか。何ういふ因緣動機と心持とから、このやうに手厚く自分を介抱してくれるのであるか、彌生はそれを知りたいと思つた。かうして何も分らない、見ず知らずの人の家に厄介になつて居ることが、何んだか自分がお伽噺の世界にでも入つたやうな氣がして、不安でもあつた。たゞ彼女にもこれだけのことはわかつた。それはこの家が並々ならず上流の生活をして居る身分だといふことである。初めて氣がついて部屋の様子を見た時、器具調度の立派なことを感じた。緣側から見る庭も廣く、植込は深く、棟は幾つか入組んで、澤の好い磨き瓦が、秋の日光にきら〳〵輝くのが、植込みの高い梢越しに見えた。西洋館もあれば、離室もあるやうであつた。邸内も廣ければ、建物も廣く、家族たちはどの棟で、どんな生活をして居るのか、彌生は親ひ知ることも出來なかつた。

彌生は、疑問と不安のうちに時を過ごした。一度正氣に歸つた時に看護婦に問ひかけて、訊かない方が好いと言はれてからこつち、彼女はもう再び訊かうとしなかつた。知りたいと思ふ一面では、看護婦の言葉通り、今に分るに違ひないと思つて居た。彼女は自分でも出來るだけ醫者の言葉を守つて、身體や心を安らかにするやうに努めた。

そして、それは間もなく分る時が來た。

四

彌生が、見知らぬ家に事情も分らず厄介になつて、五日七日と過ごして居るうちに、秋は次第に深くなつた。

朝早く、彼女は純白な寢床の中で、庭の植込に鳴く鋭い百舌鳥の聲に、呼び覺まされることがあつた。晝でももう日當りの懐しい時分で、彌生はよく緣側に出ては、柳の椅子に身を凭せ、ぽか〳〵と快い秋の日光を滿身に浴びながら、木立の奥深い庭の木々をうつとりと眺めて、時を過ごすやうなことが多かつた。輕い、白いきれ〳〵な雲が、晴れた空を悠々と徂徠して、明るい日射しをさつと影らすかと思ふと、直ぐまたぱつと明るくなつた。彌生は空を仰ぎ、雲を眺め、庭を見入りながら、よくこの家の人たちの上を想像して見た。自分の運命を思ふて見た。志田のことを思ひ、純子のことを思うた。自分を傷つけた後の青木慎一郎が、何うなつたかを思ふて見た。

彌生の眼には、最後に見た慎一郎の物凄い顏がちらついた。彼の叫んだ言葉が耳底にこびりついて離れなかつた。彼女は未だ曾てあのやうな恐ろしい、人間の一生懸命の表情を見たことがなかつた。あんたに眞劍な言葉を聞いたことがなかつた。慎一郎のきれいな顏は、丁度皮膚を剝いで、神經が一筋々々露出したやうに震へて居た。眼は憤怒と怨恨にきら〳〵燃え、脣は刻まれ、總身瘧に憑かれた如く、わなわなと戰いて居た。その慎一郎の恐ろしい表情は、襲ふ如く彌生の眼先にちらつき、彼の身體の戰きは、彼女の心臟を突き刺す如く、彼女の心に生き〳〵と再現される。

「若しかしたら！」と、彌生は息を呑んで肩を窄めるのであつた。「わたしを傷つけた後、あの人は警察に連れて行かれたのぢやないか知ら。わたしがかうしてこの家に厄介になつて居る時を、あの人は警察の留置所に繫がれて居るのぢやないか知ら。それとももう檢事局に廻されて、未決監に入れられたかも知れない。若しそんなことがあつちや、ほんとうにあの人に氣の毒だ。」

さう思つて彌生の胸は痛んだ。彼女は何故か、青木慎一郎の人物を好くことが出來なかつた。彼に面と向ひ、彼の執拗い言葉を聞いて居ると、單に彼を厭うばかりでなく、憎惡の念すら止めることが出來ないのであつた。が、彌生は彼が自分を傷つけたことのために、慎一郎を憎む氣にも、怨む氣にもなれなかつた。そのために復讐の念など、彼に向つて抱くことは出來なかつた。從つて、若し彼が自分を傷つけたことのために、警察にでも引張られて居るやうだと、氣の毒だと思つた。あゝいふ場合あのやうなところで、あんな騒ぎをしでかして、自分がかうして見知らぬ家の世話になつてるぐらゐであるから、慎一郎が警察に引張られて居ないといふことは、何うしても考へ得られなかつた。彼女は傷つけられた

自分の身の上と、傷つけた愼一郎の運命を思はずには居られなかつた。

秋の日も、日中の日當りで、身體一ぱいに光線を浴びて居ると、額や脊中にしつとりと、快く汗ばむほど暑かつた。邸内はひつそりとして靜かだが、遠い町の取留めもない雜音が潮騷のやうに微かに〳〵聞えて來る。それが却つて一層邸内の物靜かなことを感じさせる。先刻から九官鳥の鋭い鳴き聲が聞えたかと思ふと、また止んだ。そして向ふの西洋館の方で、ピアノを打つ音が聞えて來た。彌生がこの家に來てから、もう十日間近になるのに、その間彼女は一度も樂器の音など耳にしなかつた。

「まあ、屹度お孃樣に違ひないわ。この家には、ピアノをお彈きになるお孃樣が居らつしやるのだわ。」

彌生は靜かに耳を傾けた。曲はシュトラウスのもので、彈き方には、どこか幼稚で、固いところがあつて、上手とは言へなかつたが、それでも彌生は、あすこのところはかういふ工合に彈けば好いのにとか、あすこの彈き方は、あれでは可けないとか、一々身を入れて、熱心に聽き入つて居た。

「お氣分は如何です。」

聞き馴れない嗄れた人聲に、彌生ははつと氣がついた。見ると、頭髮の半白の、脊の低い、小柄な、さまで年寄りとも思へないのに、何んだか梅干のやうに萎びた一人の男が、彼女の眼の前に立つて居た。

五

彌生は、自分の眼の前に、突然立つた一人の老人を――彼女は最初一目見た瞬間、それがもう六十以上の老人のやうな印象を受けた――直ぐこの家の主人だと直覺した。それには別に根據も理由もなかつた。寧ろ見たところ極く風采の揚がらない、田舍くさい老人である。脊は低く、身體は小さく萎びたやうで、顏の造作など極めて荒削りで、かさ〳〵して居る。額は狹く、鼻は大きく、脣は厚く、眉は太く、そしてそれ等の道具立からいつて、ひどく不調和に小さな眼は、太い毛蟲眉の下奥深く窪んで、鋭く輝いて居るのである。脚は短く、胴は長く、手は腿の邊まで垂れ下つて、掌は目立つほど大きく、指は勞働者のやうに太く短かつた。

一目見たところ、それは何うしても完全に發育した一人の人間ではなかつた。國も違へば、人種も違ふどこかの野蠻人か、でなければ、若し猿が進化して人間になつたといふ進化說が本當だとすれば、彼の風貌は、正しく猿類が未だ完全に人間になりきらない、進化の道程にある一種の動物である。着物なども極く粗末な上に、着こなしが下手で、高く出張つた胸の上に襟ははだかり、シャツの釦は外れ、裾前も滿足には合つて居ない。その容貌風采から言へば、何うしてもこの立派な邸の主人だとは思へない

のである。恐らく彼自身、自らこの家の主人であると名乗つたとしても、この家の立派さと彼の[illegible]
釆とを比べて判斷する者は、容易にそれを信ずることは出來ないであらう。

それにもかゝはらず、彌生は最初彼を見た瞬間、彼がこの家の主人であることを直覺した。彼[illegible]
ろ、さう思つて再び彼の姿を見直した時、自分の直覺が誤つて居はしないかと疑つた。彼女は更に[illegible]
半疑で、自分の前に立つた不思議な男の姿を、まぢ〳〵と見直したのであつた。

彌生が最初六十以上の老人と見たのは、彼女の判斷の誤りであることを見出した。打見はひどく[illegible]
さく、老人染みて見えるのであるが、だん〳〵見て居るうちに、實際は外見ほど年を取つて居ないこと
が分つて來た。顏の皮膚も皺ばみ、硬い頭髮も半分は白髮が混ざり、太い頸や、大きな手の甲には、青
い靜脈が高く浮いて居るのであるが、それでもよく見て居るうちに、眼の輝きや、脣の色や、皺ばみな
がらもどこか彈力に充ちた皮膚や、動物の齒の如く、きれいに揃つた眞つ白な齒並の澤には、まだ若々
しいところがあることが分つた。

動物のやうでもあれば、人間のやうでもある。老人のやうでもあれば、また若者のやうでもある。微
塵微尾不自然で不調和で、混淆した彼の印象は、全く奇怪で取止めがなかつた。けれどもその不思議な
人物に、どこか侵し難い威嚴が備はつて居る。人間的な、溫和な空氣に包まれて居る。彌生が最初彼を

見た瞬間、この男がこの家の主人であり、これが自分を助けてくれた男であると直覺したのは、彼の持
つて居る威嚴、彼の包まれて居るその溫和な空氣を、彼女の鋭敏な觸覺が感じて、突嗟にさう判斷した
のである。

「お氣分は如何です。」

彼は、自分の言葉に彌生が答へようとしないで、何時までも不遠慮にじろ〳〵自分の上に注いで居る
彼女の視線を眩しさうに、低く窪んだ細い眼をぱち〳〵と瞬きすると、咽喉の奥でこすれるやうな、低
い嗄れた聲で繰返した。

「は、有難う存じます。大變宜しいんですの。」

彌生は初めて椅子から身を起して、慇懃に頭を下げた。

「何うぞ、そのまゝ……。」と、彼は武骨な手を差延べて、彌生に椅子に着いてくれるやうに勸めた。「わ
しも失禮します。今日は全く氣持の好い秋日和ですな。」

彼は彌生に向ひ合つて椅子に腰を下ろすと、しよぼ〳〵したやうに見える落窪んだ、けれども鋭い光
を持つた眼を、硝子戸越しに廣い庭に投げた。

「失禮ですけれども、あなた、このお邸の御主人で？」

彌生は椅子に着いて訊いた。

「はい、わしが三浦耕右衛門です。」と、彼はまたしても眼をしよぼしよぼとさした。

六

「あなたが三浦様で？　あの、三浦耕右衛門様で？」

三浦耕右衛門といふ名を聞いて、彌生は異様な衝動に打たれた。實業界に於て大倉喜八郎が有名である如く、淺野總一郎が有名である如く、三浦耕右衛門の名もまた有名である。大倉や淺野の名を知るほどの者で、恐らく三浦耕右衛門の名を知らぬ者はないであらう。

彌生は何時の頃よりか、三浦耕右衛門といふ一人の實業家の名を記憶して居た。總べての富豪や貴族の名が一般的になる時、それは好い意味に於いてよりも、寧ろ惡い意味に於いて人々の胸にその名を刻みつけられる場合が多い。三浦耕右衛門の名も、彼の實際の人物やその性格は兎も角、世間に傳へられるところは、餘り芳しからぬ意味に於いて有名であつた。彌生は最初如何なる機會で彼の名を耳にしたのかを知らない。が、少くも三浦耕右衛門といふ名だけは、今でも彼女の記憶の中に特別の位置を占めて殘つて居る。それは彼が小僧時代に國を出てから三十何年振りに、日本で指折の富豪となり實業家となつて、初めて故郷の土を踏んだ時、彼の故郷の總ての人々、大人から子供、男も女も、爺も婆も、一人殘らず彼の歸郷を迎へて、往來傍に土下座したといふ新聞記事を見てからこつちのことである。

それも故郷の人々が自發的にさうしたのではない。越中の邊鄙な一寒村から身を起して、天下の富豪となつた彼は我が故郷に錦を飾るに際して、その邊土に不似合な巨額の黄金をばら撒いて、强制的に町町村々の人々の全部を擧げて、自分の前に土下座せしめたといふのである。歸國するについて、彼は先づ時の政府を金と權力で動かして、自分の村に新しく官線の鐵道を敷設した。廣大なステエションを建てた。山を碎き田を埋め、人家を壞し、墓を發き、神社を破壞して、ステエションから眞直ぐに自分の曾て生れ育つた家まで、一路平坦砥の如き三十間幅の大道路を造つた。家を壞され、田を埋められた百姓町人は彼を恨んだ。神社を破壞された神主や村人は彼を憎んだ。けれども、彼は金の力を以て總べての人々の反抗、憎惡、怨恨を、片つ端から封じた。家を壞された者には、以前に優る立派な家を建てゝ與へ、田を埋められた者には、隣村の田を買ひ占めて分配し、神社も建て、墓地も拵へた。

見る影もなかつた僻村は、忽ち見違へるやうな立派な町となつた。鐵道は出來る。ステエションは建つ。道路は出來る。彼の横暴を憎んだ村人たちは、恰も掌を返すが如く彼の德を讃へ始めた。そこへ彼は、自分の歸國を迎へて路傍に跪く者には、足腰の起たぬ老人であらうが、生れたばかりの孩兒であら

うが、自分の足下に額づくその額に、洩れなく百圓札一枚を貼りつけてやるといふのである。跛者も、盲目も、躄も鼻缺も、近鄕近在の總べての人々は、夢に見たこともない百圓札を我れこそ額に貼りつけられようと、雲霞の如く押し寄せた。ステエションから彼の家まで二十幾町とかの間、彼の歸國を迎へて往來傍に土下座する者が、蟻の這ふ隙間もなく詰めかけたのである。三浦耕右衞門は、その間を悠々として百圓札をばら撒きつゝ、我が家に入つたといふのである。ただ一人、自ら社會主義者を以て任ずる村の小學校の若い一敎師が、頑として彼の前に土下座することを拒んだ。翌日その小學敎師は、職を奪はれ、村を追はれた。

何年前のことか知らない。恐らくもう六七年前のことであらう。さういふ新聞の報道を見てからこつち、彌生の記憶の中に、三浦耕右衞門なる一人物の存在が、はつきりと殘された。一時に五人の子供の父親になつたといふことや、小間使に手を出して、親父とか兄貴とかから捻ぢ込まれたといふことや、自分の工場に働く何千人とかの職工を、一度に馘首つたといふことや、輸出鑵詰の中に襤褸屑が一ぱい詰められて居たといふことや、素行上の亂倫なこと、事業上の惡辣なことなど、時々新聞紙の社會面を賑し、社會の輿論を騷がす。何時知るともなく目にし耳にして來たそれらの記憶が、三浦耕右衞門の名を聞いた瞬間、一時にむく〳〵と彌生の頭の中に甦つて來た。

「あなたが三浦耕右衞門樣で？」

彌生はもう一度繰返して、眼を見張り、息を呑んだ。

七

「はつはつは。」耕右衞門は、その萎びたやうな身體から何うしてそんなに元氣な若々しい聲が出るかと思はれる、彼の嗄れた話聲とはまるきりちがつた聲で笑つた。「あんたは、わしの名を御存じかな？」

「は、あの……」と彌生は、何故かぱつと赧くなつて、眼を外らした。「わたくし、存じて居るといふほどでもございませんけれども……」

「時々新聞などで書き立てられるものだから……。いや、世間つてなか〳〵煩いものでな。」

「わたし、あなたが三浦樣だとは、何うしても想像がつかなかつたものですから。」

彌生はだん〳〵冷靜になつて、眞直ぐに耕右衞門の方に顏を向けた。

「はつはつは。」と耕右衞門は、また、動物の齒のやうな眞白い、きれいな齒並を見せて、高らかに笑つた。「あんたの想像して居た三浦耕右衞門と、實際のわしとは、よつぽどちがつて居たと見えるな。」

「いえ、さうでもございませんけれども——。」と、彌生は眼を伏せた。

「これで世間で噂してるほど、大した悪黨でもないのだがね。」
「わたし、世間でいふやうに、あの、そんな風には思つて居ませんでしたの。」
「ほう、ではどんな風に？」
「わたくし、隠さず申しますわ。若し失禮でしたら御免遊ばせ。」と彌生はちらと彼を仰いで、その眼をぢつと彼の鋭く輝く小さな眼の上に据ゑたまま、「わたくし、あなたのことをはつきり記憶しましたのは、あなたがお國にお歸りになつたといふ、あの時の新聞記事を見た時からでございますの。」
「それで、わしをどんな風に思ひました？」
「わたくし面白い方だと思つてましたの。」
「どういふ意味で？」
「でも、あんまり變つたことをなさいますから。」
「はつはつは。わしのことを、あんたは面白い人間だと思つたのかな。そんな見方をしてくれた人は、少くもそれをわしの前に率直に言つてくれた人は、今まであんたより外には一人もない。世間では皆なわしを、横暴憎んでも餘りある奴だと思つて居る。極悪無道の人間だと思つて居る。でなければ底知れぬ強慾な人間だと思つて居る、面白い人間は、氣に入つたな。はつはつは。」

耕右衛門は、小さな眼を一層小さくし、上機嫌で笑つた。その時彼の容貌の奇怪な印象も、彼の持つた侵し難い威嚴も、どこかに消えてしまつて、一種溫和な空氣に包まれた一人の好々爺になつた。
「ですがわたくし、何うしてこちらのお邸に御厄介になるやうなことになつたのでせう。わたくし、何うしてこちらへ參つたのでせう。」
彌生は正氣に歸つてからこつち、知らうと思つて知ることの出來なかつた疑問を、耕右衛門に向つて質した。彼女のその調子には、恰も小さな孫娘が、年を取つた祖父に向つて甘えるやうなところがあつた。
「あんたは、あの時のことをちつとも記憶して居ないんだな？」
耕右衛門は同じやうに好々爺然として、眼を細め、溶け込むやうな風に、彌生の美しく可愛らしい顔を眺め入つた。
「えい、わたくし、さつぱり覺えて居ませんの。」
「丁度わしの自動車が、江戸川公園の前まで來た時、夢中になつたあんたが、行きなり横から駈け出して來て、自動車の前を突切らうとした。はつと思つた瞬間、運轉手が手際好く自動車を停めた。わしはほんとうにあの刹那、こいつは人一人轢き殺したと思つた。若しあの場合、運轉手がちよつとでもまごつかうものなら、あんたの身體は、わしの自動車のタイヤの下に轢き碎かれて了つたのだ。全く間一髪

を容れない、危險なところであつた。」

「まあ。」彌生は恐ろしさうに肩を竦めて、深く息を呑んだが、「それからわたくし、何うしましたのでせう。」と後の説明を促した。

八

「あんたは、わしの自動車の前で、何かに躓いたと見えてばつたり倒れた。兜器を持つた一人の若い男が、あんたを追つかけて、迫つて來た。運轉手臺を飛降りた助手が、行きなり若者を後ろから抱き竦めて、兜器を拐ぎ取つた。」

耕右衛門は、例の低い、嗄がれた聲で言つた。話をつゞけるに從つて、彼の聲は嗄がれたなりにだんだん力を帶びて來た。一度好々爺然と優しく細められ、柔げられた彼の眼光は、また鷲の眼の如く鋭く輝いて來た。厚ぼつたい脣が、若やかな血の色を帶びて、燃えるやうに眞赤になつて來る。

「青木さんですわ。あの時わたくしを追つかけて來たのは、青木愼一郎さんですわ。で、青木さんはどうなつたでせう。警察に連れて行かれたのでせうか。」

彌生は、せか〳〵瞬きして、不安さうに息を詰めた。

「さう。兜器を閃かして、あんたを追つかけて來たのは、その青木愼一郎といふ青年です。」と耕右衛門は力强く頷いて、「何しろ人だかりはする。あんたは道の上に倒れたまま氣を失つて居る。青年は一方ならず興奮して居る。愚圖々々して居て警官でも來ると面倒だと思つて、それには何か深い事情もありさうだし、あんたもたゞの身體ではなさゝうだし、兎も角運轉手と助手と二人がゝりで、正氣を失つたあんたを自動車に抱へ乘せ、興奮して思慮分別を失つて居る若者も一緒に、この邸に連れて歸つたのだ。」

「まあ、では、青木さんもお邸の御厄介になつて居ますので？」彌生は恥らうやうに、また深い感謝の意を示さうとするやうに、低く頭を垂れて、「で、青木さんはその後何うなつたのでせう。今でもまだお邸の御厄介になつて居ますのでせうか。」

「あの若者も、興奮の餘り前後の思慮を失つて、兜器なぞ振り廻したことを、今ぢやひどく後悔して、邸で謹愼して居ます。」

「まあ好かつた。」と、彌生は心から重荷を下ろしたやうに溜息を吐いて、改めて感謝の頭を下げた。「今まで何の緣も由緒もないあなたに、飛んでもない御厄介をかけまして、ほんとに何んとお禮を申上げて宜しいか……わたくし、感謝の言葉もございません。」

「いや、あんたのやうに、さう改まつてお禮なぞ言はれちや、却つてわしの方で恐縮です。これくらね

のことは、何も世話の厄介のと言ふほどのことでもない。こればかしのことは、見も知らぬ他人に對してだつて、當り前のことでさあ。俗に袖すり合ふも他生の縁といふことがあるぢやありませんか。はつはつは。」

耕右衛門は、椅子の上に身を乗り出して、緩くほてつた彌生の美しい顏の眞近に、自分の奇怪な顏を近々と押し寄せ、高らかに笑つた。太い毛蟲眉の下の、落窪んだ彼の眼は、どこか好色らしい、執拗い情を含んで、輝いて居た。

「若しあの時あなたが、あそこを通り合されなかつたら、わたしの身も、青木さんの將來も、何うなつて居るか分らなかつたのですわ。」

俛だれた彌生は、耕右衛門のその特殊な眼光には氣もつかなかつた。あの場合の恐ろしい事件は、右衛門に會つたために無事に免れても、しかし、耕右衛門に會つたことのために、更に自分の上に如何に忌はしく恐ろしい運命が展開して來るかも、彼女は元より豫知する筈もなかつた。彌生はたゞあの場慎一郎と自分と、二人の身を安全に救はれたといふことに對して、心から感謝せずには居られなかつた。

「いや、わしは却つてあんたと近づきになつたことを、ほんとうに喜んで居るのですよ。或ひは御かも知れないが、わしには一人の娘がありましてな。丁度あんたと同じぐらゐな年頃です。母親は、

家には兄弟もなく、たつた一人ぼつちで、ひどく寂しがつて居るものですから、あんたのやうな友達が出來るといふことは、實は娘のためにも喜んで居るのです。」

耕右衛門の言葉に、彌生は世間に傳へられて居る彼の家庭のことを思ひ出した。耕右衛門が、普通の放埒な男とちがつて、不自然な關係の婦人や、その腹に生せた子供を、決して家庭には足蹈みさせないこと、幾人の妾を置き、幾人の女と關係はしても、糟糠の妻に對しては、渝りなき好き夫であつたこと、その妻に最近死別したこと、夫婦の間にたゞ一粒種の令嬢があること、その令嬢が父の耕右衛門とはちがつて、美人で、溫和で、貞淑であることなどが、彌生の記憶に浮んで來た。

九

「娘を紹介しますから、會つてやつてくれませんか。」

やがて、耕右衛門は善良な父親らしい、慈愛に滿ちた眼光で言つた。

「は、何うぞ。わたしからもお願ひいたしますわ。」と、彌生は答へた。

「娘は、あんたに會ひたがつて居るのです。わしが、氣を失つたあんたを自動車に乗せて、邸にお連れした時、娘は一目見るなりあんたにすつかり惚きつけられてしまつたのです。ひどくお目にかゝりたが

りましてね。あんたの寢んで居る部屋を、幾度となく覗いては見るんです。けれども、今までは斷じてお會ひしちゃ可けないと、止めて置いたのです。何故かつて、あんたの神經を刺戟しちゃ可けないと氣を遣ひましてね。」

「もう大丈夫ですわ。わたくし、もうすつかり好くなつたのですわ。」

「さう、もう大丈夫ですね。」と、耕右衛門は笑つた。「では、直ぐ娘を呼びませう。」

彼は椅子から起つて、呼鈴を推した。直き淑かに彼の前に立つた小間使に、彼は命じた。

「お嬢さんに、ちよつとこちらへと申上げてくれ。」

「は。」

小間使は畏つて、退つて行つた。

彌生は好奇心に滿ちた期待を以て、耕右衛門の令嬢と會ふ時を待つた。世間ではその父親のことを、黄金の惡魔の如く言ふかと思へば、その娘のことは天使の如く言ふ。彌生は既に惡魔の如く言はれるものゝ正體を見た。そして、今や天使の正體を見ることが出來るのである。

その時までも打鳴らされて居たピアノの音が、はたと止んだと思ふ間もなく、廊下の突當りの杉戸が靜かに開いた。丁度耕右衛門と向ひ合つて居る彌生の眞正面に見える、開かれた杉戸の間から、優形な、

脊の高い、一人の美しい令嬢の姿が覗いた。多くの場合、女が女を觀察する時、彼女たちは相手の優れたところよりも、缺點ばかりに眼をつける。殊にそれが定評のある美人に對する場合に於ては、一層その傾向が激しい。そして、女といふものは、同性の缺點を見出すことに特殊の鋭さを持つて居る。男ではとても氣のつかないやうな、如何なる微細な缺點をも、容赦なく見遁さない。

彌生も今この家の令嬢を初めて見た時、總ての女が同性を觀察する時の、寸毫も假借しない鋭さと、嚴正さとを以て對したにもかゝはらず、而も彼女は一點非難すべき餘地を見出さない美人を、自分の眼の前に見たのである。脊恰好、顔の輪廓、眼鼻立、總てが申分なく均整の美を保つた、美はしき姿であつた。

彌生は彼女の姿をちらと見た瞬間、彼女の總ての美しきところを見盡してしまつた。彼女の胸は不思議に打たれた。このやうな不調和な肢體と容貌とを持つた父親に、何うしてこのやうな完全無缺な、美しき令嬢が生れたかと云ふことに驚嘆した。その心ばえに於て惡魔と天使の差があると言はれる如く、目のあたり見るその姿に於ても、まことに一個醜怪な怪物と、麗らかなる天女の如きちがひがある。若しこれが眞に骨肉の父と子とであるならば、それはこの世の中に於ける解くべからざる不可思議な謎が、今自分の眼の前に横はつて居るのだといふ氣がした。

「お父様、何か御用でございますの。」

令嬢は、彌生と眼を見合した時、何かもの言ひたげに、また會釋しようとするかのやうに、につこり微笑んだ。が、彌生の眼があまりにも鋭く、あまりにも熱心に自分を凝視して居るので、ぱつと顏を赧めると、眩しさうに瞬きして、睫毛を伏せた。そして彼女は靜かに杉戸を後手に閉めて置いて、耕右衞門の傍に近づいた。

「おゝ、瑞子。」と、耕右衞門は溶けもしさうに眼を細めて、娘の顏を見上げると、「お前會ひたがつて居たゞらう。お前、お友達になりたがつて居たゞらう、廣岡さんに御挨拶すると好い。」

「お嬢樣で。」彌生は椅子から起つて、慇懃に會釋した。「まあ、瑞子樣とおつしやるので。わたくし、廣岡彌生ですの。何うぞ宜しく。」

「何うぞ宜しく。」

瑞子は懷しさうな眼光で、ちらと彌生を見ると、極り惡さうにお辭儀をした。

耕右衞門は、二人の挨拶する樣を、眼を細めて笑ましげに眺めて居た。

十

風もないのに、落葉はきり〳〵と舞ひながら、芝生の上に、飛石の上に、四阿の屋根に、泉井の水の上に落ちた。木の間を洩るゝ、稍西に傾き初めた日影は、土の上や、水の上に、ぱつとその明るい光線を投げかけた。時々大きな鯉が、ぽかりと浮かぶと、絲の如き水面にぶくりと大きな波紋を殘して、また水底深く沈んでゆく。

彌生と瑞子とは、泉水の傍の、四阿の榻に向ひ合つて腰を下した。母もなく、兄弟もなく、たゞ一人ぼつちの寂しい身の上だと、耕右衞門が瑞子の身の上を說明した通り、美しい彼女の姿にはどこか寂しい影がある。一代の富豪三浦耕右衞門のたゞ一人の愛娘と生れて、何不自由もなく、何苦勞もない、自由で、幸福な境遇であるにもかゝはらず、彼女の姿にはどこか痛々しいやうな寂しい影がある。それだけに人懷つこく、未だ三十分と話をしないうちに、もう姉妹の如く彌生に馴染んだ。年は同じ十八といふのである。けれども瑞子はほんの十四五の小娘の如く邪氣ない。彌生に比べると五つ六つも年のちがふ妹を見るやうである。

耕右衞門は、瑞子を彌生に紹介して置いて、是非出かけなければならない用事があるからと、自動車の用意を命じて、あたふた出かけた。後で二人は音樂の話をした。學校の話をした。繪の展覽會の話をした。それから庭を散步して、どちらから言ひ出すともなく、二人は期せずして、その四阿の榻に腰を

下ろしたのである。
「お父様は、大抵毎日お留守なの。」
やがて彌生が訊いた。
「えい、何時でもお留守なの。」
瑞子がきれいな眼で、彌生の顏をぢつと見て答へた。
「あなたお一人で寂しいわね。」
「えい、わたし寂しいんですの。」
「それではわたくし、お宅から歸つても、またちよい〳〵遊びに伺ひますわ。」
「えい。でも……」と、瑞子は困惑さうに眼を伏せた。
「わたし、伺つちや可けなくて？」と、彌生は首を傾げて、優しく微笑んだ。
「いゝえ、いゝえ、あら、さうぢやありませんわ。」瑞子は顏を赧くして、慌てゝ言つた、「わたし、あなたと、どんなにお友達になりたいと思つて居るでせう。あなたが遊びに入らして下さるのは、どんなに嬉しいでせう。わたし是非あなたにお友達になつて頂きたいの。遊びに入らして頂きたいの。けどもね……。」

瑞子は口籠つて、救しを求めるやうな、可憐らしい眼光で、ちらと彌生の顏を仰ぐと、切なさうに溜息を吐いた。
彌生には、彼女の心持が解せなかつた。彼女は自分と友達になりたいと望んで居る。自分に遊びに來て欲しいと望んで居る。それだのに彼女は自分が遊びに來るといふ言葉に對して、何をこんなに躊躇ひ、何をこんなに困惑して居るのか。彌生にはその意味がさつぱり分らなかつた。
「けれどもわたし、遊びに伺つちや可けないの。」と、彌生は相手を劬はるやうな調子で言つた。
「いゝえ、可けなくはないの。入らして頂きたいわ。」
「ぢやわたし、伺つてよ。」
「ね、わたし、心配してるの。」
「何を心配して居らつしやるの。」
「でも、でも……」と口籠つたが、その美しい顏を、ぱつと一時に紅葉のやうに赤くして、「お父様が可けないのですもの。」
「え、お父様が？」
「えい、お父様はほんとにいけないのよ。」

「何故？　でも、あなたのことをあんなに可愛がつて居らつしやるぢやありませんか。優しい、ほんとに好いお父様ぢやありませんか。」

「あなた、ほんとにさうお思ひになつて？　あなたはお父様のことをほんとにさう思つて下すつて？」

瑞子の内氣な、けれども一生懸命な眼が、彌生の顏の上にぢつと注がれた。

「えゝ、えゝ！　わたし、あなたに嘘のことは申上げませんわ。」

「有難う！　わたしのお父様のことを、そんな風に言つて下さる人は、あなたより外に、世間には一人もないのですわ。」

瑞子は涙含んだ眼を瞬いて、彌生の前に頭を下げた。

十一

彌生は、世間からも人からも、鬼の如く、惡魔の如く言はれて居る父のことを、そんなに思つて居る瑞子の可憐らしい心根に、胸を打たれた。人に對しては、たとへ鬼でも惡魔でも、我が子に對してだけは、慈愛深き父親であることに變りない。娘の名を呼び、娘の姿を見る時、耕右衛門の奇怪な顏には、如何に人間的で、純な、優しさが現れるか。その眼光には、如何に慈愛の和やかな光が湛へられるか。

彌生はそれを眼のあたり見たのである。今また我が父のことを好く言はれて、涙を流して喜ぶ瑞子の純眞さに、彼女は自づと涙含まずには居られなかつた。彼女は、世間から惡罵と攻擊の的になつて居る三浦家の家庭に於いて、眞に美しき父子の情愛を見たのである。

「瑞子様、あなたお父様を好く言はれることが、そんなにお嬉しい？」

彌生はハンカチーフで、濕つた瞼をそつと拭つた。

「えい。でも、お父様は誰からも好く言はれないのですもの。お父様は皆なから憎まれて居らつしやるのですもの。」

瑞子も涙に濡れた眼を拭つた。

「それは、しかたがないのね。世の中に立つて、自分の思ふだけのことをして行かうとするには、誰だつていろんなことを言はれるのですわ。世間つてそれは煩いものですからね。」

「でも、お父様も可けないのよ。」

「あなたさうお思ひになつて？」

彌生は、意外な瑞子の言葉に、眼を見張つた。

「い。でもね、それがほんとうなんですもの。」と、瑞子は恥かしさうに微笑んだ。「わたしにも、それ

から亡くなつたお母様にも、お父様はほんとに〳〵好い方なの。わたしをどんなに可愛がつて下さるでせう。どんなに優しくして下さるでせう。わたしのしたいと思ふことで、お父様がそれをしちやならないとおつしやることはありません。けれども世間には、外の人には可けない方ですわ。」

「まあ、あなた御自分のお父様のことを、そんな風におつしやつちや可けませんわ。」

「えい。けれどもね、わたしあなたですから、ほんとのことをお話しするのですわ。」瑞子は言ひにくさうに躊躇つたが、「あのね、わたし先刻あなたに、遊びに入らして頂きたいけれども、入らしちや可けないと言つたでせう。それはね、お父様が可けないからですわ。お父様は、それは恐い方なの。どんな女の方にでも可けないことをなさるの。わたしはね、ほんとはあなたに何時までもこゝに居て頂きたいの。お歸りになつてからも、また遊びに入らして頂きたいの。けれどもお父様のそのことを考へると、わたし恐いんですわ。あなたが若しそのことを御存じないと、ほんとうにお氣の毒だと思ひますの。あなたをかうしてこの家にお連れして、今まで誰にもお會はせしないで居たのも、父がどんなことを考へて居るためだか分りませんわ。それを考へると怖いのですわ。もう幾度か志田様つていふ方も入らしたし、太田様といふ、女のお友達の方もお見えになりましたの。けれども、父はどなたにもお會はせしないでせう。どなたが入らしたことも、あなたにはお知らせしないでせう。父は屹度々々あなたにも、何か好くない恐ろしいことを考へて居るのぢやないでせうか。わたし、何んですか、心配なのですわ。父のことを考へると、わたし悲しいのですわ。あなた、わたしの心持がお分りになつて？」

「えゝ、えゝ！　ようく分りました。あなたの御親切は忘れません。」彌生は益々彼女の可憐らしさに胸を打たれ、感動的に頷いた。「それぢや、あの、わたしがこちらに御厄介になつてから、太田さんや志田さんが、こちらにお伺ひしたんですのね。」

「えい、わたし、お二人にお目にかゝりましたの。」

さう言つて、瑞子は何故か羞らうやうにぽつと兩頬を染めて、眼を外らした。

「ぢや、志田さんも太田さんも、わたしがこゝに居ることを、もう知つて居らつしやるのね。」

彌生は考へ深さうに、獨り語のやうに言つた。

十二

彌生は、自分のあてがはれた部屋に歸つた。彼女は久し振りに庭を歩いたり、人と話をしたりして、ぐつたり疲勞を感じた氣怠るい身體を、緣側の柳製の肱椅子に深々と埋めて居た。日は黄昏て、庭の隅隅や、木蔭や、軒下には、もう秋の物淋しい仄暗い夜の色が忍び寄つて居る。

耕右衛門は出かけて行つたきり、まだ歸つて來ず、瑞子は自分の部屋で何をして居るのか、廣い邸内はひつそりとして、人の氣配も聞えぬ。

彌生は我が身の運命の不思議を思うた。あの場合若し愼一郎の腕の力が勝れて居るか、自分の身の交し方が今一瞬間遲かつたならば、恐らく彼の揮つた刄は、自分の心臟を刺したであらう。乳の下の負傷は、恐らく致命的なもので、自分の命はあの時限り、この世の中から消えて了つたであらう。單に自分一人の命ばかりではなく、自分の胎内に宿れる一つの未生の命、我が血と、我が肉とによつて育みつゝあるところの、光を慕ふてこの世に生れ出ようとする小さな命も、共にこの世から消え失せてしまつたであらう。再び日の光を見ることも出來なければ、夜の闇を知ることもなく、生の勞苦も幸福も、自分といふものから遠く離れ、自分の存在はこの世界から塵の如く消滅して了つたであらう。

さう思つて彌生は今更慄然として戰いた。

それが不思議にも、生命を完ふすることが出來た。そして如何なる運命のめぐり合せか、たま〳〵通りかゝつた自動車に助けられて、運ばれたこの家は、世に有名な三浦耕右衛門の邸宅なのである。彌生は、この眼に見えない不可思議な絲の縺れを、無意味に考へることが出來なかつた。その底に容易ならぬ何かゞありさうな氣がする。

彌生は幾ら考へても、その不可思議な何かゞ、何んであるかをはつきり掴むことが出來なかつた。耕右衛門の自分に對する態度、ぢつと自分を見入る彼の執着深い眼光、そして、瑞子の謎のやうな言葉、それらの一切が何かの暗示を自分に與へて居るやうに思ひながら、而も彼女はそれを信ずることが出來なかつた。

「そんなことがあるわけがない。わたしに對して……？　そんなつまらない！」

彌生は妄想も甚しいものだと思つた。自ら窘め、自ら恥ぢて、顏は燃ゆるが如く熱くなつて來た。

「却つてそれよりも……。」と、彼女は自分で自分を辯解して、心を他の問題に向けるのであつた。「さう、それよりも若しかしたら、志田さんと瑞子さんとの間に、何かゞあるのかも知れない。今は、何んにもないとしても、二人の間に何かゞ成り立たないと、何うして保證することが出來よう。先刻瑞子さんが志田さんのことを話した時の、あの表情は！　あの眼光は！　だが、これもわたしの妄想なのか知ら。」

彌生は偶と我が空想を反省した。が、その下から直ぐ、先刻四阿で瑞子が、太田純子や志田が訪ねて來て、彼女が彼等に會つたといふことを話した時、彼女の美しい顏を彩つた、可憐な含羞の色を、まざまざと眼の前に浮べずには居られなかつた。

「いえ、いえ！　それをわたしの妄想として斥けることが、何うして出來よう。混み合つたステエションで顔を見合したばかりに、あの方はもうわたしの心を捉へて了つたぢやないか。十日か二十日か、ほんの僅かの間の知り合ひで、わたしから一切のものを捨てさしたぢやないか。あの人はわたしを奴隷にしてしまつた。そしてわたしと一緒に東京に出てから、未だやつと半年經つか經たない間に、あの人は幾人の女の心を捉へ、幾人の女の魂を踏み躙つたことであらう。ほんとうにあの人は不思議な人だわね。どんな女でも、女といふ女があの人に會ふ時、あの人のしようと思ふ通りにならずには居られないのだわ。あの人のどこにその力があるのだらう。わたしがあの人に一目會うて惹きつけられたやうな工合に、瑞子さんの心も、もうあの人に惹きつけられて了つて居るのぢやないか知ら。あの人のひろげる恐ろしい網の中から、他の總ての女が何うしても身を遁れることが出來ないやうに、瑞子さんもあの人の網の中に、しつかり身を縛られてしまつて居るのぢやないか知ら。」

一度妄想として斥けたことが、次第に動かし難い事實として、彌生の胸にひし〳〵と感じられて來た。

「若しそれがほんとうなら！　若しそれがほんとうなら！」と、彌生は恐ろしい眼をぢつと一ところに据ゑて、深い〳〵息を靜かに吐いた。「わたし、あの方を許さない！　單にわたしのためばかりでなく、あの人に傷つけられ、あの人に踏み躙られた總ての女のために！　いえ、いえ！　塵芥の如く女を屠げ、女を踏み躙つて、少しも良心の痛みを感じない男といふものを、女全體のために、わたしも女の一人として許さない！　わたしはあの人を罰せずには措かない！」

その時彌生は、我れと我が下腹部にびくりと微妙な胎兒の蠢きを感じた。彼女は、はつとして我れに歸つた。

「だが……だが、この子供は……？」

彌生は火の如く熱い息を吐いた時、彼女は自分を呼ぶ微かな人の聲を聞いた。

「彌生さん、彌生さん。」

慄然として眼を上げると、相貌憔悴した青木愼一郎が、黄昏の薄暗がりの中に、彼女の傍へに、幽靈の如く突つ立つて居た。

十三

彌生は自分の傍近く、窶れた愼一郎の姿が悄然と立つて居るのを見た時、彼女の全身には異樣な戰慄が走つた。彼女は思はず聲を上げやうとしたが、やつと自分を抑へた。びつくりして思はず一度起しかけた腰を、また落つけた。

「大丈夫です、彌生さん。」と愼一郎は、恐怖に滿ちた彌生の顏を、暫しの間ぢつと眺めて居たが、やがて低い聲で靜かに言つた。「僕は後悔してるんです。あなたに對してあんな恐ろしい眞似をしたことを、今ぢや後悔してるんですよ。で、僕はあなたにお詫びしたいと思ひましてね。」

「まあ、何時の間にか、すつかり暗くなつて了つたのね。わたし、今電氣を點けますわ。」

さう言つて彌生が起ち上らうとするのを、愼一郎は抑へた。

「このまゝで好いのです。電氣はつけなくても好いのです。」

「でも、あんまり暗いぢやありませんの。」

「暗い方が却つて好いのです。」愼一郎は、彌生に向ひ合つた椅子に腰を下して、聲を潜めた。「僕は隱れてやつて來たのですから、誰かに知れると困るんです。あなたに會つちや可けない、あなたに一言も口を利いちやならないと、固く言ひ渡されて居るんですからね。僕がかうしてあなたのところへ來たことが、誰かに知れると、僕、ほんとに困つて了ふんです。ですから却つて暗い方が好いんです。」

「わたしに會つちやならない、わたしに口を利いちやならないと言ひ渡されて居るのに、あなたは何うしてこゝへ入らしたの。何んだつて人に隱れてなぞ、わたしのとこに入らしたの。」

「何うぞ、そんなに僕を咎めないで下さい。」

「でも、あなたもわたしも、この家に厄介になつて居る身の上ぢやありませんか。この家の人の言ふことに背いちや可けないと思ひますわ。」

「それはその通りです。けれど僕は、あなたに話があるんです。」

「あなたはわたしに、この上未だ何んの話があるのでせう。あなたはまたあの時と同じことを、わたしに繰返さうとなさるのね。あなたはわたしに、あなたと一緒に國へ歸れとおつしやるのね。けれども幾度おつしやつても、わたしの返事は同じことですわ。わたしの心に變りはありません。そのことならもう二度と、わたしの耳に聞かせないで下さい。お願ひですわ。」

「彌生さん。あなたは早呑み込みをしてるんです。」愼一郎は蒼ざめた顏に、淋しさうに微笑んだが、「僕の話といふのは、そのことぢやないのです。僕はあなたにお詫びをしたいのです。」

「わたし、あなたから何を詫びて頂くことがあるでせう。」

「あなたは屹度、僕を憎んで居らつしやるでせう。怨んで居らつしやるでせう。」

「いゝえ、わたしにはあなたを憎むこともなければ、怨むこともないのですわ。」

「彌生さん。それはほんとうですか！」と愼一郎は急に眼顏を輝かして、「あなたは僕を憎んでも怨んでも居ない。あなたを殺さうとし、あなたを傷つけた僕を、あなたはほんとに憎んでも恨んでも居ない！」

「何うしてそんなことを執拗くお訊きになるの。」
「ぢやほんとうなんですね。それを聞いて僕やつと心から重荷を下ろしたやうに、氣が樂になつた。」と慎一郎はほつと深く太息を吐いて、「あれから後、この十日餘りの間といふもの、僕はどんなに苦しんだでせう。どんなに我が身の愚かさを責めたり、恥ぢたりしたでせう。夜も碌々眠れなかつたのです。眠つたと思ふと直ぐ苦しい夢に魘されて、はつとしては、ぱつと眼が覺めるのです。自分のし出來した愚かしいことの償ひを、何うしてしたら好いかと思ひましてね。若し僕のしたことのために、あなたの身に萬一のことでもあれば、僕も生きちや居ない決心でした。あれまでは、あなたが萬一僕の要求に應じてくれない場合には、あなたを殺してしまはふ。全くその決心で國を飛び出して、血眼になつて、東京中あなたの行方を尋ね廻つて居たのです。けれども僕は自分の手に人の身を傷つけて見て、初めて人が人の命を害ふことが、どんなに恐ろしいことかといふことを身を以て痛感したのです。あなたを殺す意氣込みで、あなたの跡を追つかけて居たものが、あなたを傷けた後では、若しあの場合ほんとうにあなたを殺して居たら、どんなであらうとさう思つて、幾度慄然としたか、分らないのです。」

十四

慎一郎の聲は、苦悶に震へて居た。蒼白く見える彼の顏は、病み疲くものゝ如く歪み戰いて居た。
彌生は眞に苦しめる者の切ない聲を耳に聞いた。眞に惱み戰ける者の痛ましい顏を眼の前に見た。彼女はやつぱり、慎一郎に對する厭はしい感情を如何ともすることが出來なかつたけれども、今や彼に對する心からの同情を止めることが出來なかつた。自分のために斯ばかり苦しみ、自分のために斯ばかり傷つき惱んで居る男の姿を眼のあたり見て、彼女自身の胸もまた痛みを感ぜずには居なかつた。
「青木さん。あなたどうぞ、わたしのことはもうそんなに氣になさらないで……。あなたが悪いばかりぢやなくて、わたしも悪いのですから。いえ、いえ、誰が悪いのでもなく、わたし一人が悪いのですから。あなた一人がそんなに苦しむわけはありません。苦しまなくちやならぬのは、あなたぢやなくて、わたし一人なのです。ですから何うぞわたしに、詫びるの謝るのとおつしやらないで！　そんな風に言はれると、わたしが却つて餘計に苦しむばかりですわ。」
彌生はもつと何か言ひたいと思つた。世の中の人は誰一人として悪い者はない。悪いのは自分一人である。あらゆる罪も科も自分一人の身に受けて、自分一人が苦しめば好いのであるといふことを、もつと力强く、もつと執拗く、もつと徹底的に言ひたかつた。その時彼女の中に爆發した烈しい自己卑下と、自己嫌悪の感情は、どんなに自分を責め鞭打ち、罵り、辱めても、まだ足りないやうな氣持がした。

「僕は、あなたの口から、あなたに對してあのやうなことをした僕を、憎みもせず、怨みもしないといふ言葉を聞いただけで、自分で自分を責める地獄の火から救はれたのです。それで僕はこの十日ばかりの間、苦しみに苦しんでやつと決心することの出來た決心通りに、自分の身を處置することが出來るのです。何んだか今のところもう思ひ遺すことはないやうな氣がします。」

「あなたの決心とおつしやるのは？　あなたの思ひ遺すことはないとおつしやるのは？」

彌生は愕然として顔を擡げ、息を詰めて、恐怖に充ちた雙の瞳が愼一郎の顔に見入つた。

「彌生さん。僕はこれきり、國に歸らうと思ふのです。」

「國にお歸りになるの。」

「何うしてもあなたといふ者を得られないと決定した僕に取つては、地上到るところ何處に身を置くのも、無意味です。生きてかうして呼吸して居ることも無意味です。さうかと言つて、僕には自分の手で自分の一身を潔く處決するだけの勇氣もなければ、意志もなく、決斷もないのです。僕のほんとうの正體は平凡で、氣の小さい、極く意氣地のない人間なんです。僕は近頃やつと眼が覺めて、初めて自分の眞價が分つたのです。世の中に生きて居て、何も際立つた働きをする才能もなければ、力もなく、さうかと言つて、思ひ切つて一思ひに自分の身を處決する勇氣もない、凡庸な僕のやうな人間が、希望も力も失つたこれから先の永い一生を生きて行くには、さういふ凡庸で、意氣地のない人間に相應した、生き方をするより外仕方がありません。北海道に歸つて、畠を耕したり、牛や馬を養つたり、林檎の樹を育てたり、鷄や山羊を飼つたりしながら、同じやうに世の中から望みも光明も失つたあの年寄りたちと一緒に、雪の中に埋もれて暮らすことが、僕の柄に合つてる生活なんです。そのことがやつと僕に分つたのです。僕は北海道の雪の中に歸つて行きます。洞穴の中に生えた菌のやうな生活をして居る、老人夫婦の許に歸つて行きます。」

「あなた、おぢいさまやおばあさまのところにお歸りになるのね。まる半年間、深い雪と氷にとざされる北海道に歸つて行らつしやるのね。」と、彌生は感慨深さうに繰返した。

「その代り彌生さん。僕は今から言つて置きますがね、この恐ろしい都の生活があなたを苦しめ、激しい都會の人情に、あなたが疲れ、あなたが傷ついて、あなたが心から平和と休息とを求める時が來たなら、何うぞ何時でも歸つて來て下さい。雪に包まれたあの平和な家は、どんな時でも喜んで門の扉を開いて、あなたを迎へるでせう。」

彌生は言葉もなかつた。愼一郎も沈默した。外には風を思はせるやうな乾いた風が、から〳〵と鳴つて通り過ぎた。

寂しき道

一

年の暮が押迫るに從つて、東京の町々は次第に活氣を呈し、雜沓を極める。軒並に旗は閃き、顧客の心を唆り迎へる樂隊や、蓄音器の音は、絶え間もなく響き、夜はイルミネーションの美しき光が空を染め、路面に漲る。

殊に年末の銀座街頭は、一層の繁昌、一層の雜沓であつた。車道には、電車、自動車、馬車、人力車、自轉車が、消魂しくベルを鳴らし、喇叭を鳴らして、目まぐるしく馳せちがふ。兩側の鋪道には、南を指すもの、北に向くもの、右往左往する群衆に、殆んど蟻の這ふ隙間もない。若い會社員らしい、輕快な洋裝の青年紳士が、ボーナス氣分で、美しく着飾らした細君同伴で、細身のステツキを小脇に抱へ、赤革の短靴の足許も輕快に群衆を縫ふて行くもあれば、何うせ上流とは思へぬ質素い風采をした中年の細

君が、美しく飾られた店々のショーウヰンドを、もの欲しさうに一つ一つ覗いて行くもある。

丁度日暮のことで、明日の冬晴れを思はせるやうに、西の空は眞赤に夕燒して、今日の名殘りの薄明りは空にも地にも仄かに漂つた。日はまだ暮れ切らなかつたが、町から町には晝を欺く輝かしい電燈の光りが漲つた。風のない、空氣の沈んだ、寒さのしん〳〵と滲みるやうな夕暮であつた。露店商人は忙しさうに店をひろげ、品物を飾りつけて居る。爽快な樂隊の音はそこからもこゝからも響いて來る。浪花節、かつぽれ、軍歌、マーチなど、賑やかな蓄音器の音は店毎に溢れて居る。

往來は混雜した。忙しさうに歸りを急ぐもあれば、もうどこかその邊の飲食店で早い夕飯を濟ましたらしい、氣輕さうな若い勤め人らしいのが、まだよく整ひもしない夜店を、ひやかし〳〵ぶらついて居るのもある。

その賑やかな銀座通りの、とあるカツフエーの、半曇りにした硝子の扉を押して、人混みの往來に出て來た三人連れの青年があつた。何れも附近の銀行か會社か、若しくは商會にでも勤めて居るらしい風采で、ソフトを冠つたのが一人、後は中折れと烏打で、皆な同じやうに厚ぼつたいオーバーを着て居る。ひどく好機嫌な一ぱい元氣で、この寒空に顏を眞赤にほてらし、蹣跚たる足どりである。

「世間は不景氣で、どこの社でもこの暮なんざ實に慘めだといふぢやないか。えゝ、おい。そこに行く

と、我れ〳〵の社なんさ豪勢なものさ。社長は話せるね。何しろ月給の三倍だからね。去年から見るとまた率が上つてるんだよ。」

中折帽が、ひよろ〳〵する危つかしい足許を、ソフトの肩に凭れて、四邊闊はぬ高聲で喋る。

「また、ボーナスのことを言つてるんか。」と、ソフトは苦笑した。「一年中休みなし勤めて、年末に三月分のボーナスで有頂天になつてるんだね。」

「有頂天になつてるわけぢやないが、でも君、世間一般の不景氣を考へると全く豪氣だよ。」と中折は得意さうに、仰向いた獅子鼻を一つ手の甲で擦つて、「お互に金錢のことを言つた日にや、新聞記者なんつてつまらないさ。忙しくて、月給が安く、盆暮の手當だつて、景氣の好い會社なぞに比べれば、お話になつたものぢやないんだからね。だが、我れ〳〵が新聞記者に志しを樹てゝ居るのは、何も慾得づくぢやないんだ。憚りながらその邊にさらにころがつてる利慾本位の會社員や、商店員とは、ちつとばかりわけがちがふんだ。お互にまあ利慾以外の天職に殉じて居るといふわけさ。だが金を懐ろにして見て、萬更氣持の悪いつていふ筈はないよ。それに、時はこれ恰も年末だしね。」

「大きな聲して、見つともないよ。往來の人が皆なこつちを振り返つて行くぢやないか。」と、ソフトは窘めた。

「僕はほんとのことを言つてるんだ。ほんとのことを喋つて、笑ふ奴には笑はせよ、さ。な、おい北海道。」

「僕も三月分のボーナスが欲しいよ。」默々と歩いて居た鳥打帽は、北海道と呼びかけられて初めて口を開いた。「僕の家は貧乏だ。兄弟が多いんだ。足袋の一足づつも買つて送つてやれば、親父や阿母が、どんなに喜ぶか知れない。」

「東海林、人中で、吝つたれたことを言ふのは止せよ。」

中折が呶鳴つた。

「僕は事實を喋つてるんだ。笑ふ奴には笑はせよ、さ。」

「何んだ、おれの口眞似をしてやがる。だが大いに愉快だ。どつかで飲まうぢやないか。金はあるんだ。この通り！。」

中折は元氣よく自分の胸を叩いて見せた。

二

もう一度飲まうといふ。澤山だといふ。雜沓する夕暮の往來で、中折とソフトとは、お互に自分を譲

らなかつた。
「東海林、君は何うだ？　飲む方に賛成か。飲まない方に賛成か。君の意見によつて決定しよう。」
果てしがないので、たうとう中折が言ひ出した。
「僕は飲んでも好いね。」
「東海林、君はまだ飲むつもりか。この上中川に飲まして何うするんだ。」と、ソフトが呶鳴つた。
「僕は飲まなくても好いね。」
「飲む方に賛成か、飲まない方に賛成か。一體どつちなんだ。瓢箪鯰（うたんなまず）では駄目だぞ。」と、中折が焦れつたさうに叫ぶ。
「飲むも好し、飲まざるもまた好し、さ。飲まざるも好し、飲むもまた好し、さ。」
「だから、どつちだと訊いてるんだ。」と、中折は苛ら立つ。
「どつちだか知らない。これ以上メートルを上げれば、君の三月分のボーナスは益々減るだらう。」
「減つたつて大丈夫だ。おれのものをおれが使ふんだ。え、おれがおごつてやるんだぜ。もう一度景氣よくやつゝけるんだ。」
「まあ、止した方が好からうね。」

「けち〳〵するな。」
「君の懐中のことだ。誰がけち〳〵するもんか。だが、これ以上アルコールを流し込んでも、まあ無駄だね。」
「東海林は張合ひのない奴だ。君は瓢箪鯰だ。一體どこを押へたら好いんだ。」と、中折は舌鼓ちした。
「勝手に、君の好きなところを押へるさ。」
東海林は空嘯く。
「これ以上飲むのは東海林も不賛成だ。僕も不賛成だ。多數決によつて解散だ。」と、ソフトが言つた。
「何んだ、これで別れるのか。」
中折は未練深さうである。
「歸つて共に細君に喜びを分つさ。なあおい、東海林、それが好いね。」
「馬鹿にするない。おれはそんなサイノロジストとはちがふんだ。君等がそんな言ひ甲斐なき奴ばらなら、おれは猛然として單獨行動を取る。」
「まあ、待て！　君は醉ふと氣が大きくなつて可かん。」
ソフトが腕を延ばして、肱（ひじ）を摑まうとした時は既に遅かつた。中折はひらり身を跳らしたと思ふと、

素早く群衆の間を潜つて、電車路を突切るべく、勢ひ好く車道を二三歩駈けた。

その時さつと眩しいヘッドライトが路面を照して、一臺の自動車が警笛の聲凄じく疾驅して來た。進むも退くもすでに遲かつた。中折は危く轢き倒されるところであつた。あはや彼の身體はタイヤの下に轢き碎かれたと思つた瞬間、敏捷な運轉手は把手を捻つて、大きな車體は急角度でカーヴを畫き、だぢだぢと停まつた。

手に汗握つた人々は、僅かにほつと太息を吐いた。

「危い！」

はつと膽を冷やしたらしい運轉手は、危く轢きそこなつた醉つぱらひが、呆然と突つ立つた姿を見ると、一聲叱聲を浴びせて置いて、再び把手を取つた。

「その自動車待て！」

間髪を入れざるその場の光景を、息を呑んで見詰めて居た鳥打帽は、再び疾驅し初めた自動車に向つて叫んだ。明るく電氣の點つた箱自動車のクッションに腰を降ろした車中の人を、扉の硝子越しに認めたと思ふと、彼ははつとして顏の色を變へたのであつた。そして彼は思はず大聲に叱呼して、車道に飛び降りた。と思ふと彼は長大な軀幹を弓の如く反らして、自動車の後を追ひかけた。

「その自動車待て！」

走りながら彼は再び叫んだ。

「東海林、おい、東海林！　何うしたんだ。」

さつぱり樣子が呑み込めないで、一瞬間啞然として居たソフトは、彼の後ろから聲をかけた。

「その自動車待て！」

東海林は駱駝の如く駈けながら、三度び叫んだ。

三

駈け行く自動車の速力が緩められたと思ふと、大きな車體が一つ搖れて、ぴたりと停つた。

「志田君、降りろ！」

東海林は、ぜい〳〵息を喘まして、自動車に追ひつくと、扉の外で呶鳴つた。

自動車の箱の中は、明るい電氣の光に眩しく輝いて居た。內部は薔薇色したきれいな縞織天鵞絨の布で、すつかり張り詰められ、グラスの一輪差しには、水仙の花が二三輪差されて居た。ふか〳〵したクッションに並んで腰を下ろしたのは若い男女で、男は東海林が呼びかけた如く志田忠治で、女は三浦耕

右衛門の令嬢瑞子であつた。
東海林の不遠慮に呶鳴る聲に、志田はその濃い眉を當惑さうに蹙め、厚い脣をきと堅く引結んだが、扉硝子の内と外とで顔を見合せると、さすがに不機嫌な態度も取れなかつた。
「ちよつと待つてくれ。今降りるよ。」
志田は堅く引結んだ脣を綻ばして、苦笑ひした。
瑞子は不安さうな眼光で、何かもの問ひたげに志田の顔を仰いだ。
「お降りになるの。」
やがて瑞子は、何かに怯えたやうな表情で言つた。
「僕は、ちよつと降りなければなりません。若し何んでしたら、あなた先に歸つて下さい。」
「でも……」と瑞子は、美しい姿に甘えるやうな優しいしなを見せて躊躇つたが、「あなた、御存じの方なの。」
「友人なんです。」
「でも、大層お酒を召上つて居らつしやるやうね。」
「ひどく酔つぱらつて居るやうです。が、大丈夫です。」

「愚圖々々してないで、早く降りないか。」
東海林は焦れつたさうに、靴の踵でとんと一つ路面を蹴つた。
「まあ、わたし怖いわ。」
瑞子は志田を仰いで、肩を窄めた。
「では失禮ですが、あなた先に歸つて下さい。その方が好いです。何うせ取捉つたら、容易には放さないでせうから。」
「わたしお先に失禮しても、あなたに悪くはない？」
「かまひません。その方が好いのです。」
「何時まで待たせるんだ。早く降りて來い！」と東海林はまた叫んだ。
「ぢや、あなた先に歸つて下さい。僕、こゝで失敬します。」
志田は思ひ切つて身を起すと、瑞子の耳に口早に囁いた。
自動車が停ると同時に、運轉手臺から飛び降りて待つて居た助手は、志田が身を起すと共に、外から恭しく扉を開いた。
「僕はこゝでお別れするんだ。」志田は助手に向つて言つた。「お嬢様は邸にお歸りになるからね。」

「畏まりました。」

助手が物慣れた身のこなしで、ひらりと運轉手臺に飛び乘ると、警笛が鳴つた。重いタイヤは路面を轉がり始めた。箱の中の瑞子はさやうならと會釋するやうに、志田に向つて頭を動かした。志田はそれに答へやうとするやうに、頷いて見せた。

「志田君、今日は逃げようたつて逃がさないよ。さあ、僕の行くところに一緒に來るんだ。」

東海林は行きなり志田の肱を、むんづと掴んだ。

「放してくれ。僕、逃げはしない。みつともないぢやないか。」

志田は斯う言つて、取られた肱を行きなり振り放した。

「あの令嬢は、一體どこの何者だ。」と、東海林は不遠慮に訊いた。

「三浦耕右衛門氏の令嬢さ。」

「さうか。あれが有名な三浦氏の令嬢か。」

東海林は自動車の駈け去つた方を振り返つて見た。が、もうその影は見えなかつた。

「君はまた何うして三浦氏の令嬢などと、ちかづきになつたのだ。」と東海林は重ねて訊いた。

「何、或る機會でね。たゞちよつと知り合つたのだ。」

志田は擦つたさうな微笑を浮べて、男らしいがつしりした肩を、搖すつた。

「三浦氏の令嬢と自動車に合ひ乘りなんざ、お安くないぞ。奢らなくちや可かんよ。」

「しかたない。君の好きなところを奢らう。」

志田はやつぱり得意さうに笑つて居た。

四

東海林は、それまで一緒であつた中折帽とソフトと、二人の同僚に事情を話して別れを告げた。彼は自ら先に立つて、志田と共に近所のカフエーに入つた。

「僕は日本酒だ。肴は何もいらない。が、ソーセージでも貰はうか。」

東海林は、メニューを持つて來た可愛らしい給仕女に向つて叫んだ。

「あなたは？」

給仕女は何を召し上つて？　と問ひかけるやうに、媚を含んだ眼で志田の顏を眺めた。

「僕は別に何も欲しくはないが……」

志田はメニューを弄くつて居た。

「この先生はね、」と、東海林は馬面を給仕女に向つて突き出し、白い齒を出して笑つた。「飲まなくても喰はなくても、美人が側に居てさへくれゝば、それで好いのだとよ。」

「あら、まあ……。」と、給仕女は首を捻つて、ほゝと笑つた。

「冗談言ふのは止せよ。」と志田も苦笑した。

東海林はとんぢやくしなかつた。彼は行きなり、給仕女のぽつちやりした手を掴んだ。

「きれいな、柔かい手だね。僕、女の手を握つて見たのは、これが初めてだよ。」東海林は感嘆したやうに言つた。「だから、君こゝに居たまへ。この先生の傍に居てくれたまへ。」

「あら、あら、あら！　可けませんわ。ごぢやうだんなすつちや可けませんわ。」

給仕女は擽つたさうな笑ひ聲を立てゝ、身をくねらした。

「止せよ、東海林君。こんなところの女をからかつたつて、初まらないぢやないか。」と、志田が見兼ねて口を挾んだ。

「カフエーのウエートレスをからかふのは初まらなくて、良家の子女をからかふのは、名譽かね。」と、東海林は笑ひながら給仕女の手を放した。

「厭味を言ふのは止してくれ。君が本氣でそんなことを言ふなら、僕は怒るよ。」

志田の濃く太い眉がぴくりと動いた。彼は氣色ばんだ。

「惡かつた、惡かつた。僕の言ひ廻しが惡かつた。」と東海林はふさふさと柔かな髪の毛が、白い額の上に垂れ下つて來るのを、煩ささうに掻き上げつゝ、素直に謝つた。「ついロがすべつてしまつたのだ。何も怒ることはないさ。僕は君にもつと眞面目な話があるんだからね。」

「まあ、この方、ほんとに好かない。だつて嫌な亂暴なさるんですもの。わたし、お酒も何にも持つて來て上げないから好い。」

給仕女は、半ば嬉しさうに、半ば極り惡さうに、そして半ば腹立たしさうに、東海林を睨んだ。

「參つた、參つた。僕は、方々から攻擊されるんだな。」東海林は同じやうににや〳〵笑ひながら、頭を掻いた。「まあ、そんなに怒らんで、酒を持つて來てくれよ。」

給仕女は何かぶつ〳〵言ひながら、彼等のテーブルを去つた。向ふの隅のテーブルに、學生らしい青年が、何か飲物を啜つて居るだけで、店はひつそりして居た。バーボーイが酒臺に兩肱突いて、苦々しさうに東海林たちの方を見て居た。

「君はまだ飲むんだね。」と、志田が言つた。「もう、かなり醉つぱらつてるぢやないか。」

「君が女をあさる如く、僕は酒をあさるのさ。君が女に飽かぬ如く、僕は酒に飽かぬのだ。」

「君はまたそれを言ふんだね。」と志田は、ぴくりと眉を震はした。「一體君は、僕を厭がらせるために、わざ〳〵こんなところに連れ込んだのかね。」

「何ういたしまして。」と東海林は頭を横にふつた。「大いに忠告を與へなくちやならんと思つて、それで今まで君の跡を追つかけ廻して居たんだ。」

さう言つた東海林の顏は、急にそれまでとは打つて變つた、嚴肅な表情になつて來た。

「僕に忠告を？」と、志田は訝かしさうに訊き返した。

「君は金色夜叉を知つてるかね。」と、突然東海林が訊いた。

「小說だらう。題ぐらゐ聞いてるけども、讀んだことはないよ。」

「さうだらうね。君は無味乾燥な法律書生だから、金色夜叉すら讀んだことがないのだらう。」

五

給仕女が正宗の瓶と、ソーセージの皿とを運んで來た。志田は紅茶と水菓子とを註文した。

「金色夜叉と、君が僕に與へるといふ忠告と、何ういふ關係があるんだ。」

やがて志田が言つた。

「その小說の中に、荒尾譲介が間貫一に大忠告をするところがあるんだ。貫一は君のやうに酒を飲まない。荒尾譲介は僕のやうに酒飲みだ。そこで僕は、金色夜叉を聯想したから、君に訊いて見たのだよ。」

東海林は、給仕女が注いで行つた盃を飲み干して、また手酌で注いで脣に持つて行つた。

「何んだ、そんなことか。馬鹿々々しい。」といふやうな表情をして、志田は、甘さうに盃を舐める東海林の口許を眺めて居た。

二人共暫しの間言葉がなかつた。

「で、君一體何ういふことなんだ。」

やがて志田が沈默を破つた。

「その前に確かめて置かなければならないことは、」と、東海林が言つた。「君と僕との友情についてだ。君は何うか知らないが、少くも僕だけは、同じところに生れ、同じところに育ち、同じ學校に通つて、今日まで渝らない交際をつゞけて來た君に對して、小さい時からの友情を失はないつもりだ。君は親もなければ兄弟もない、ほんとうに一人ぼつちの人間だ。だから兄弟の情愛などは、話して見ても理解も出來ないだらう。が、僕に取つて友情は、兄弟の情愛以上のものだ。何時か君が北海道に歸つて來た時、君は何時でも僕の身の上を案じて居ると言つた。僕はその時友情の有難いのはこゝだと思つた。緣もゆ

かりもない赤の他人が、たゞ友達であるといふ結び着きのために、その友達のことを何時も案じて居る。これはほんとうに勿體ないことだと思つた。僕は實際あの時、心の中では嬉し泣きに泣いて居たのだ。友だちなればこそと思つた。あの時の君の友情が、君の言葉が僞りでないなら、君が僕のことを思つて居てくれる如く、僕もまた君のことを思つて居るのだ。あの時の言葉が嘘かほんとうか、僕はそれを君に確かめたいと思ふのだ。」

東海林は、なみ〳〵注いだ盃に手を觸れやうともせず、大理石のテーブルに片肱突いた身を前に乘り出すやうにして、熱心に言つた。初めのうちの、人を茶化すやうな、からかふやうな曖昧な微笑は、彼の顏から何時の間にか跡方もなく消え失せて、彼の眼も顏も、固く引緊り、或る犯し難い誠實さに輝いて居た。

「何ういふわけで君は、今更僕にそんなことを確かめる必要があるのだね。」

志田も相手の嚴かさに打たれて、引緊つた氣持になつて呟いた。

「何んの必要があつて確かめると言ふのか。」東海林は反問した。「あの時君の言葉が若し僞りなら、僕は永久に君と左樣ならだ。若しまたあれが眞實なら、僕は改めて君に話しがあるのだ。」

「確かめられるまでもなく、僕は人に對して僞りを言ふことを、最も恥辱として居る。これだけ言へば、

あの時の言葉が嘘かほんとうか、今更確かめる必要もなからう。」

「有難う。君はやつぱり僕の變りなき友人である！」

東海林はつと右手を伸ばすと、テーブルの上に重ねて居る志田の手を行きなり掴んだ。彼は固く〳〵握手をした。

志田は感激に富んだ。が、どこか未だ稚氣の失せない東海林の態度を、笑ふことも出來なかつた。彼は東海林の自分に對する純眞な友情、僞りなき誠に胸を打たれて、東海林のなすがまゝに委して居た。

「あら、あなた方は、お二人で握手して居らつしやるの。」

志田のために紅茶と水菓子とを運んで來た給仕女が笑つた。

彼女の言葉に初めて我れに歸つたものゝ如く、東海林は極り惡さうに顏を赧くして、掴んだ志田の手を放した。彼は盃を取つて、がぶりと一つ呷つた。

六

「志田君、僕は君の近頃の生活を、默つて看過ごすことが出來ないのだ。君が僕に何のかゝはりもない人間なら、僕は君のどんな生活でも、どんな行動にでも、文句を言ひ得る權利はないかも知れない。が、

君が僕の友達である以上、僕は君の生活に對して默つて居ることが出來ないのだ。或は君は言ふかも知れない、餘計なお世話だとね。自分で蒔いた種を自分で刈る以上、親であらうと、友人であらうと、口出しする必要はないとね。さう言へばそれぎりだ。さう言つて了へば、親子の愛情もなければ、友達同志の友情もないことになる。人間は自分のしでかしたことを自分で始末さへすれば、銘々勝手だといふことになる。が、若し君が友情を否定しないなら、僕が、友達として君の生活に干渉することを許してくれたまへ。」

東海林は、給仕女が去ると共に熱心に言つた。

志田は、スプーンの上に乘つて居た砂糖の塊を、紅茶の中に摘み入れたが、掻き廻さうともしなかつた。ぶく〳〵と泡を立てゝ溶けるのを、ぢつと見詰めたまゝ、眞面目に東海林の言葉に耳を傾けて居た。

「君は、僕を責めるのか。」

志田は伏せて居た眼を懶さうに上げて、ぢつと東海林を見入つた。

「責める以上に、僕は悲しんで居るよ。」

東海林の言葉は沈痛であつた。彼の眼は悲しげに瞬きした。

「人に責められる前に、僕は自分で責めて居る。人に悲しまれる前に、僕は自分で悲しんで居る。」

志田の言葉も沈痛であつた。何時でも誇らしく、傲慢に輝いた彼の顏は、その瞬間、曾て見ることの出來なかつた、弱々しい影に蔽はれた。が、それは恰も晴れた空に浮ぶ一片の氣紛れな浮雲が、今太陽の光を遮つたと思ふと、もう次ぎの瞬間にはぱつと輝いて居るやうに、一旦蔭つた彼の表情も、直ぐ以前のまゝになつた。

「では、君自身も、君の生活を善しと認めては居ないのだね。」

「僕は、自分で自分の生活を振返つて見る時、曾て寸毫も自分の生活を是認したことはない。徹頭徹尾取るに足りない、やくざな人間だと思ふ。自分の生活は恥づべき、忌はしきものだと思ふ。だが、他人の人物や生活と比べて考へる時、僕はまたちがつた判斷を持つて居る。」

「他人の人物や生活と比べて見ると言ふと？」

東海林は解せないやうに首を傾げた。

「僕よりももつと愚劣な、もつと取るに足らない人間で、世の中は充滿して居る。僕の生活よりも、もつと忌はしい、汚れた生活をする人間で、世の中は充滿して居る。それだのに彼等は、僕のやうに決して苦しみはしないのだ。彼等は皆紳士なのだ。何故僕一人が、人のすることをしてはならないのか！人が樂んで、誇らしくして居ることを、何故僕一人が恥ぢたり、苦しんだりしなければならないのか！

人が各その生活を樂んで居る如く、僕も僕自身の生活を樂んで好い筈ぢやないか。僕はさう思ふんだ。」

志田は何かに反抗しようとするかのやうに、濃い眉を上げた。男らしい、がつしりした肩を聳やかした。

「君は、君自身といふものを、單獨に考へる場合と、君自身と他人とを比較して考へる場合と、どつちをほんとうだと思ふんだ。」

「どつちがほんとうだか、僕には決めることが出來ない。僕にはどつちもほんとうのやうな氣がするんだ。」

「君には、君自身の生活を恥ぢたり、責めたりせずに居られないものが、君の性格の中にある。僕に言はせれば、卽ちそれが君の良心なのだ。何故君は、君の良心にかなつた生活をしないのか。」

「良心か。」志田は嘲るやうに言つた。「若し人間といふものが君の考へてるやうに、そんなに單純に、良心と少しの矛盾のない生活をすることが出來るやうな工合に、生れて來て居るものだとね。」

「君にはそれが出來ないといふのか。」

「何よりも可けないことは、世の中が退屈なことだ。生きてることがつまらないことだ。そこで我れ我れは、人生に於て色彩を求めなければならない。藥味を求めなければならない。恐らく君は、僕が女から女に移るのが可けないと攻擊するのだらう。だが、少くも僕に取つて女は、この退屈な人生を紛らしてくれる花瓣なんだ。藥味なんだ。たゞそれだけさ。」

七

「君のやうな考へ方は、僕に取つては何んだか恐ろしいやうな氣がする。さういふ思想は、人を毒し、己を毒するものだ。殊に君のやうに、さういふ考へを背景にして、女から女に移つて行く生活は、人間のために許して置かれないと思ふ。」

東海林はまともに志田の顏に見入りながら言つた。

「ぢや、何うすれば好いんだね。責むべきは僕一人だらうか。」

志田は皮肉な微笑を、その厚い脣の周りに湛へた。

「この世の中には、君以外に不埒な人間が多い。だからと言つて、君のけしからん生活が當り前だとは言へないのだ。」

「僕の言つてる意味はね、斯うなんだよ。つまり僕一人のみが、女に對して責任があるわけはない。僕が責められなければならないなら、僕の相手も共に責められなければならない筈だと言ふのだ。」

「と言ふのは？」

「男女の關係に於て、何故男だけに責任があるのか！　相互的に與へるところがあつて、完全な意味を遂げ得られるのが、兩性の關係ぢやないか。それだのに何うして男だけが惡いのだ。若しそれが罪であるとするなら、その罪は公平に、男女各自の上に、二等分されなければならない筈だ。さうぢやないかね。不完全極まる法律だつて、姦夫のみを罰する法律はない筈だ。況んや全能なものから見て、たとへそれがまちがつた男女關係であつても、その責を男一人のみが負はされる筈はないと思ふのだ。神樣の考へは何うか知らない。我れ〳〵不完全に造られて居る人間が、全能なる者の意志にまで立入る必要はないのだからね。全能なる者が以て惡と認めるなら、何時かはその惡が罰しられずには居ないだらう。人間の道德では、人間の習慣では、男女のまちがつた關係を責める場合、その目標になるのは、何時でも男に決つて居る。これは大人と子供と喧嘩したとして、何時でも大人の方が惡いと言はれると同じことだ。一面から言ふと斯ういふことは、女を侮辱するも甚しいものではないのかね。僕はもつと女といふものを認めるね。尊重するね。男女關係に於て、男も女も對等であると思ふね。喜ぶ時には二人喜びを分ち、樂む時には二人樂みを分つのだ。苦しむ時にも同じやうに二人苦しみ、責められる時にも二人責められるのが當り前ぢやないか。僕の方で婦人を、人生の孤獨を彩るきれいな

欠

「絶交を恐れるやうな君でもあるまい。」と、東海林は悲しげに微笑んで、「だが、僕は絶交はしないよ。絶交するには、餘りに君に對して友情を持ち過ぎて居る。では、さようならだ。」

「待ち給へ。一緒に出かけよう。」

頭を垂れて、東海林の言葉を聞いて居た志田は、東海林を呼び止めた。彼は給仕女を呼んで、勘定を命じた。

九

夜の銀座通りは、一方ならぬ賑ひであつた。イルミネーションや、ショーウヰンドから流れる高燭の電燈や、夜店の瓦斯や、カンテラの光りで、往來は眩しいほど明るく、寒さにもめげない忙しさうな暮の人々が、ぞよ〳〵蠢めいて居る。

「君は宿に歸るのか。」

二人肩を並べて、人波を搔き分けつゝ歩いて居た志田は、東海林に向つて言つた。

「さあ、何うしようかと思つて居る。」と、東海林は煮え切らない。

欠

「どこか他に、廻り道でもあるのかね。」
「實は、これから彌生さんのところを訪問しようか、何うしようかと思つてるんだ。」
「君は、時々あの女に會つて居るかね。」
「東京に出てから三四度會つた。」
「君が上京してから、もうどれくらゐになつたかね。」
「二月足らずだよ。」
「新聞社の方はどんな工合だね。」
「忙しいには忙しいが、しかし、働くことは愉快だ。勤勞は我れ〳〵を眞面目にしてくれるよ。殊に僕は、新聞記者といふ職業に興味を持つて居るからね。」
「君のやうな健全な生活は、羨ましいね。」
「恐らくこれは貧乏の賜だらうよ。働かなければ食へないのだからね。自分一人が食へないばかりぢやない、僕には貧乏な兩親があるんだからね。小さい弟や妹があるんだからね。一生懸命に働かなければならないのだよ。」
「結構だ。」志田は心から感嘆して、頷いた。「僕は、君のやうな立派な友人を持つて居ることが、實に嬉

欠

「それで、彌生さんはどんな風に暮して居るかね。僕のことについて、何か言つて居はしないかね。」

やがて志田は言葉を變へて訊いた。

「一言も言はないね。」と東海林は答へた。「尤も、君たちが一緒に上京する時からこつちの知り合で、深い馴染でないせゐかも知れないが、あの人は一言の愚痴も言はなければ、一言の不平も洩らさないね。あの人を見て居ると、何か深い決心を持つて、自分の痛い運命に堪へて居るやうな、悲壯な感じがするよ。」

「僕はこの三ケ月ばかりの間、一度も會はないのだが、」志田は幾らか極り悪さうに、肩を揺すつて、「尤も、君はまだあの時分北海道に居たのだが、秋のあの事件があつて、三浦の邸に世話になつてる時、二三度訪ねたんだが、會ふことが出來なくてね。それぎり會はないのだからね。」と、辯解するやうに微笑んだ。

「新たな女をあさるために、忙しいのだらう。三浦瑞子嬢のために忙しいのだらう。」

「忙しいばかりぢやない。會ふことが今は寧ろ苦しみなんだ。切めて見た時には天女のやうに思へたものが、今は無味平凡な、有りふれた女に過ぎないのだ。女といふものは不思議なものでね、どの女でもよく理解しないうちは、それ〴〵美しく、それ〴〵心を惹きつけられる。だが、一度その女を知つて了

欠

ふと、それは要するに平凡な、有りふれた女に過ぎなくなるのだ。どの女でも、總べての女は並木のやうに皆な同じことなのだ。女は、それを知らないといふことが、男を惹きつける唯一の美である。男の前に女がその祕密を失つた時、それは天女が羽衣を失つた時なのだ。太陽が光を失つた時なのだ。世界の貴婦人淑女諸君よ。あなたの祕密を、最後まで決して男に許してはならない！　僕はさう忠告したいね。さうしたら男の生活の意義が、興味が、どんなに豐富であるか。無盡藏だからね。」

「呪はれた者だ　君の胸には、鼠のやうな毛の生えた、短い尻尾のある、三角形の尖つた口をした惡魔が巣食つて居る！」

東海林は肩を窄めて叫んだ。

生れ出づる惱み

一

病院の夜は更けた。

廣い建物の中は、ひつそりした。電燈の光が白々と照して居る長い廊下を、眞白な着物に包まれた看護婦が、スリツパの音もひそやかに、時々通り過ぎるかと思ふと、またどこかの部屋に消えて了ふ。入院して居る產婦の分娩があるのか、手術衣を着た醫員が二人、上靴の音をこと〳〵と廊下の板敷に鳴らして、分娩室に入つて行つた。と、後はまた以前のひつそりした靜かさに歸る。

どこかの部屋で、赤ん坊の泣く細い聲が聞える。

そこは駿河臺の或る大きな產科婦人科の病院であつた。二等室の十五號、彌生は二三日前からその部屋に入院して居る。丁度產み月で、女中と二人暮しで、人手のない彼女は、もうやがて生れ出づる子供

の出産のために、そこに入つたのであつた。留守は女中に預けて、丁度試驗休みに當つた太田純子が、彼女に附き添つてくれた。

「何んだか今夜は蒸し暑いのね。看護婦さん、濟みませんが窓を開けて頂戴。」

彌生は寢臺の上で、上氣したやうにぽつと赧らんだ顏色をして、看護婦に言つた。

彼女は夕方から夜に入つて、輕い陣痛に一二度襲はれたが、二時間ばかり前に見廻りに來た醫員は、まだ〳〵こんなことではと笑つて、立ち去つた。もう三十近い年頃の看護婦も落着いて居た。が、初產の彌生は固より、一向經驗のない純子は、ひどく不安であつた。たゞ看護婦だけが力であつた。

「夜風に當つてもかまはないでせうか。」と、純子は不安さうに問ふた。

「でも、蒸し暑いのですもの。」

「かまひませんわ。お暑いやうでしたら、却つて空氣の流通を好くした方が宜しいですわ。」

看護婦は立つて窓の上げ下げ戸を、二ところほど加減して開いた。

暗く曇つて、星影一つ見えない、蒸し〳〵する夜であつた。それでも閉て籠めて居た窓を開くと、濕つぽい夜氣が冷や〳〵と流れ込んだ。と、仄かな花の香りが、部屋の中に忍び込んだ。窓先に咲き滿ちた白木蓮の匂ひであつた。

窓を開けた序でに、枕頭臺の上をちよつと片づけて置いて、看護婦は部屋を出て行つた。扉を後手に閉めると、靜かなスリツパの音が、遠い廊下の向ふに消えて行く。

看護婦の足音が消えるか消えないに、見る〳〵彌生の顏は赧らんで來た。深い痛みを堪へようとするやうに、脣を屹と引結び、濡々したきれいな顏が蹙められて、息を詰めた。

「お痛みになつて？」

純子は、はら〳〵して訊いた。

「えゝ。」

彌生は呻くやうな聲で答へて、わづかに頷いた。

「お苦しい？」

「えゝ。」

「看護婦を呼びませうか。」

「……」彌生は頭を横にふつて見せたが、「そんなでもないの。まだ大丈夫なの。」と、切なさうな聲で、きれ〳〵に言つた。

純子はどうしたら好いか分らなかつた。

彼女の心には自然と、以前のことが思ひ浮べられて來た。彌生がまだ小學校に通つて居た時分、それはついこの間のやうな氣がする。それだのにもう五年も六年もの月日が經つて居るのだ。彌生が北海道に歸つて來て、久し振りで會つたと思ふ間もなく、彼女は家を捨て、祖父母を捨て、志田と共にまた東京に出て了つた。頭をお河童さんにして小學校に通つて居た時分も、東京の女學校に入るために、ミス某に連れられて東京に出發した時も、去年の春、女學校を卒業して北海道に歸つて來た時も、そんなに遠い昔のことのやうには思はれないのに、彌生は今からして人の母にならうとして、生みの苦しみを苦しんで居るのだ。

さう思ふと、純子は何んだか有り得べからざる不思議な奇蹟を、目のあたり見て居るやうな氣がするのであつた。

「けども、けども、わたしだつて、やつぱりその間に大人になつて來たのだわね。」

純子はさう思つて、顏がぱつとほてつて來た。

二

彌生は、だん〳〵深みを加へて來る陣痛に、思はず洩らしさうになつて來る呻き聲を、ぢつと脣を嚙み緊めて、我慢して居た。

純子は、生みの苦しみを舐めつゝある彌生を前にして、自分の思ひに耽りつゞける。

「何故女といふものは、子供を産まなければならないのか知ら。何故子供を産むことは、こんなに苦しいことなのか知ら。」

純子は、彌生が入院してからこつち、彼女に附き添つて居る間に、もう三四人の婦人が分娩するのを見た。どの女も生き死にの苦しみをする。どんなに嗜みの好い婦人も、産みの苦痛を堪へ忍ぶためには、獸のやうな呻めき聲を擧げる。あさましく取亂した姿になる。

女が一つの新たな生命をこの世に送り出すためには、實に己れの命を賭した苦しみを舐めなければならない。それだのに男は、その新たな生命の創造に對して、共同の責任を負ふべき筈の男は、女の産みの苦痛に對して、全く無關心なのである。

「これは何んといふ不公平であらう。ほんとにこれは何んといふ矛盾であらう。」

純子は深い溜息を吐いた。

「殊に志田さんは、」と、彼女は考へつゞける。「彌生さんをこんな目に遭はして置いて、自分は見向きしようともしない。何んてひどい方！　何んて恐ろしい方！」

純子は、彌生のために志田の冷酷を憤るといふよりも、女といふもの全體のために、彼の無道を怨んだ。

「男つてこれで好いものか知ら。これで濟むものか知ら。」

男性に深く接したことのない純子は、志田の彌生に對する態度が、男として當然なのかどうかを知らない。男といふものゝ總てが、女に對してこのやうに無責任なのか、志田だけが特別なのか、彼女は知らない。若し男といふものゝ總てがこのやうなものであるなら、彼女は總ての男を許せないと思つた。若しまたこれが志田一人であるなら、志田一人を許せないと思つた。

「それでもよく、彌生さんは我慢して居らつしやるのね。愚痴一言言はず、怨み一言言はず、默つて我慢して居らつしやるのね。彌生さんの性質ならこそだわ。それだけにどれぐらゐ恥を感じ、苦しみを感じて居らつしやるか知れないのだわ。ほんとにお痛はしい。」

純子は、如何なる困難も、如何なる苦痛も、人に向つて歎きもしなければ、訴へもせず、靜かに忍んで居る彌生の勇氣と、忍耐とを感嘆すると同時に、無責任な志田の態度に、燃ゆるやうな憤りを感ぜずには居られなかつた。

「たとへ彌生さんは、默つてあの方を許してお置きになつても、わたしには放つて置けない。彌生さんはあんな人のこと諦めて了つても、わたしは諦めない。あの人がひどければひどいほど、わたしはあの人にどこまでもついて行かずには措かない。」

彌生に對する志田の冷酷を、純子は單に彼女一人に對する冷酷とのみ思へなかつた。自分に加へた志田の無責任を思はずに居られなかつた。自ら責任を負ふ心なくして、自分に向つてあのやうなことをしたのだとすれば、彼は自分を弄んだのである。これ以上の侮辱はない。

「それにしても彌生さんは、わたし以上のひどい目に遭つて居る彌生さんは……。」

純子は、志田の無責任のためにたゞ一人で苦しみつゝある彌生の姿を眼の前に見て、瞼の中が熱くなつて來た。

「ひどくお苦しいやうでしたら、看護婦さんを呼びませう。」

純子は、ぢつと喰ひ縛つた彌生の脣から洩れる微かな苦痛の呻き聲を聞いて、自分の物思ひから我に歸ると、椅子から身を浮かした。

「いゝえ、好いの。まだ大丈夫ですわ。」彌生は頭をふつて見せて、「それより純子さん、ちよつと手を借して頂戴。」

「どうなさるの？」